

---

# 喪失の青空 夏（冬の続きです）

堀田一雄

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

喪失の青空 夏（冬の続きです）

### 【Nコード】

N9180C

### 【作者名】

堀田一雄

### 【あらすじ】

利谷はヌボーとした男を雨の中で拾ったのだが・・・その先にあるものは、冬の海の水平線を見ている三人の男たちのシルエットだった。

## 太陽がいつぱい

熱気と喧騒の夏

あるいは、太陽がいつぱい

断章 拉致

室内の硝子戸に向かつて右側の男は木製の椅子に座っており、左側の男は床に座って四メートルほど離れたダブルベッドにもたれていた。

右側の眼鏡を掛けた男は、やはり木製のテーブルの上においてある携帯を眺めては、時々腕を組みなおしたりしている。が、左側の顎に深い傷を持つ男は胡坐を組んだまま、左手に赤檜の木刀を持ち、目を瞑って動かない。

二人とも、土足のままである。

そしてエアコンの効いた室内には、もう一人、若い女がいた。その女はダブルベッドの足元の方で、横になっていた。死んでいるわけではない。が、後ろ手に縛られ、目と口にガムテープが貼られていた。白いスカートが腰の辺りまでめぐり上がり、パンティーストッキングが立体感のある光沢を放っている。

その女は自分に注意が注がれるのが怖いのか、時々、本当に時々しか身体を動かさなかった。

どこかのマンションの一室らしく、室内は非常に明るい。

眼鏡の男が腕時計を確かめて

「遅いな・・・」

と、誰にともなくつぶやく。

時刻は、夜十一時を回っている。

その時テーブルの携帯が、小さな音楽を鳴らした。

空気が張り詰める。

眼鏡の男がそつと取り上げ、耳に当てた。

「・・・来たか？」

そう言ってから、相手の言っている事をじっと聞いているのか、一分ほど何も言わず携帯を耳に当てている。やがて、小さく舌打ちすると

「判った。続けてくれ」

と、言った。

そんなやり取りを幾度か繰り返しているのか、男の動作や口調にはある種の焦りと同時に慣れが感じられる。

それから十分もしたであろうか、壁際のソファアの横にあるサイドテーブルの受話器から突然、呼び出し音が鳴った。

ピシッと、またも空気が張り詰めたような緊張感が室内を満たす。

そしてまるで電話の相手に見透かされるのを避けるように、二人の呼吸音が小さく、長くなる。

ルルル、ルルル

七回、八回と呼び出し音が続き、やがて諦めたようにベルが止まる。空気が弛緩する。

「どっとなっているんだ？」

と、眼鏡の男が言くと

「焦ってもしようがなかるう。待とう」

と、木刀を持つ男が低い声で、静かに言った。

遠くで、列車の走る音がする。

幾度かの緊張と弛緩の繰り返しで、いよいよ室内はそれ自体が生き物のように、生臭い臭いを昇めていく。

またテーブルの携帯が、小さな音楽を鳴らす。

眼鏡の男はゆっくり携帯を取り上げ、耳に当てる。

男は何も言わなかったが、耳に当てた携帯からかすかに女の声が聞こえる。何やら気ぜわしく、状況の説明をしているようだ。

一分近く、じっと聞いていて、眼鏡の男は

「・・・判った。一人だな・・・ドアをすぐ開けられるようにして、

玄関の前に付ける。・・・いいな、そうして待機しているんだ」と言った。

それを受けるかのように顎に傷のある男が目を薄く開け、唇をぐつと引き締め、木刀を杖代わりにして立ち上がった。そして硝子戸の横の壁に、隠れるようして身を沈めた。

身を沈めて、木刀を腰の陰に構えた。

上着を着込んだままの姿であるが、ワイシャツからはネクタイが外されている。

腰の落とし方が、据わっている。

もう一人の男は携帯をワイシャツの胸ポケットに入れ、飾り棚の横に置いてある大型液晶テレビの所へ小走りに走り、スイッチを入れた。

テレビの笑い声が、室内を満たす。

そしてまた小走りに戻って来たかと思うと、テーブルの下に投げ出してあった細めのロープを拾い上げ、木刀を構えている男とは反対側の壁に、身を貼り付けるようにした。

エアコンが効いているにも拘らず、眼鏡の男の広い額に汗が光る。

硝子戸の向こうの玄関扉を

「ガチャリ」

と、誰かが鍵を開け、ノブをまわす音がする。

靴を脱いで、人が、入って来た。

二メートルほどの廊下を突き当れば、硝子戸である。

クイズ番組でもやっているのか、テレビからは絶え間なく笑い声が流れている。

「帰ったぞ、テレサ」

だみ声と同時に、硝子戸のトツテが下へ向き、戸がスローモーションの映画のように開く。

脚が、すうっと、入って来た。

瞬間、木刀がその脚を薙ぐように閃いた。

「うおっ！」

グギツと、脛骨の碎ける音がし、男は先ほど眼鏡の男が座っていた椅子の方へ、つんのめるようにして倒れ込んだ。

男の息詰まるような野太い叫びがしたかと思うと、椅子のひっくり返る音と、テーブルがずれて飾り棚にぶつかり、硝子が割れる音が同時にした。そして、どこに置いてあったのか、花瓶が床に落ちて碎ける音が、続いた。

テレビからは、相変わらず笑い声がしている。

木刀が、倒れた男の首の辺りに振り下ろされる。

間髪を入れず眼鏡の男がロープを輪にして飛び掛り、馬乗りになって両手を後ろ手に縛り上げた。

全ての所要時間は、二十秒くらいである。

倒れた男は髪を短くしてスポーツ刈りにしていたが、全く抵抗しなかった。最初の一撃で、昏倒したようだった。

顎に傷のある男が木刀を斜めになったテーブルに立て掛け、ガムテープを持って飛び跳ねるように倒れた男の所に行くと、眼鏡の男が「駄目だ！」

と、小さく叫んだ。

倒れた男をひっくり返して上向きにすると、鼻から夥しい血を噴出させている。倒れた時、テーブルか椅子の角で、顔面を打ったようである。

苦痛に歪んだ顔は、普通の顔ではなかった。頬骨がなくなって平坦になった顔面左側の、こめかみから口元にかけて、引きつったような裂傷が走っており、そのために左目がひどい形で垂れていた。口元の方は左上唇が削げて無くなっており皮膚が直接口というか、歯になっていた。

そのお化けのような顔が、むせていた。むせて息を吐き出す度に、鼻から鮮血が飛び散る。

このままガムテープで口を塞げば、窒息してしまう。

「タオルはないか！」

と言った時、胸ポケットから小さい音で、音楽が鳴った。

素早く携帯を取り出し、小さく言った。

「何だ？」

眼鏡の男は聞きながら静かに立ち上がり、顎に傷のある男に、倒れこんでいる男の始末を続けるよう目で合図し、二・三步硝子戸の方に向かった。

「・・・間違いないか？」

と、言った時、サイドテーブルの上の受話器から

「ルルル、ルルル・・・」

と、これもやはり、小さく呼び出し音が響いた。

二人の男の動作が、同時に止まる。

眼鏡の男が携帯を胸ポケットにいれ、顎に傷のある男と目を見合わせる、言った。

「誰か、来たようだ」

「・・・」

「・・・クソッ」

顎に傷のある男は、倒れた男の口にタオルを回して猿ぐつわとし、ロープで足首などを縛った。そして木刀を取り上げ立ち上がった時、倒れた男の腰の辺りから、今度は男の携帯の呼び出し音がし始めた。事態は緊迫の度合いを強めているようだ。

ようやくにして呼び出し音が止まる。

顎に傷のある男は木刀を掲げて、開け放たれている硝子戸を潜るようにして玄関扉の前に行き、横の洗面所の影に入った。

眼鏡の男はベッド脇のドレッサーの鏡に自分の顔を写し、頭髪などをいじり、身だしなみを整えている。

テレビからは笑い声。

インターホンの呼び出し音が鳴った。

眼鏡の男はインターホンの所には行かず、小走りに硝子戸の所へ行き靴を脱いで、意を決したように後ろ手で戸を閉めながら、大きく息を吸った。そして、言った。

「はい、どなたです」

言いながら、横の影で木刀を持って身構えている男と視線を交わし、ノブを回し、扉を開ける。

パンチパーマの男が立っていた。

「誰や？」

「誰って、誠三の親戚の者ですけど・・・」

「金やんの？」

「中で待ってますよ。どうぞ」

「・・・」

パンチパーマの男は用心深いのか、それ以上中に入ろうとしない。しばらくして後ずさり、大声で言った。

「おんどりゃあ、ズボンに血が付いとるやないけ」

眼鏡の男はそう言われて、反射的に自分のズボンを見た。確かに、真新しい血が付いている。

「三浦んとこの者かい」

パンチパーマの男はそう言うと、上着の内ポケットのあたりに手を入れ、何かを探しているようであった。

それと歩調を合わせるかのように眼鏡の男が退き下がると、同時であった。入れ代わるようにして、顎に傷のある男がパンチパーマの男の前に飛び出し、木刀を振り下ろす。

しかし、その俊敏な動作は、最後まで続く事はなかった。

パン

という拳銃の射撃音がして、木刀を振り下ろし始めていた男の右肩が、ガクンと、後方へ押されるような動作に変わったのである。

が、しかし、男は手練ていたのかそのままの状態から左手一本で、赤檜の木刀をヒューツと伸ばした。

眉間に木刀の切尖を受けたパンチパーマは、向かいの部屋のガス給湯器の戸に、ドオーツと倒れた。

倒れたまま拳銃を二発、でたらめに発射させる。

パン。パン。

金属音と擦掠音が飛び交り、扉が衝撃を受けている。

顎に傷のある男は、怯む事なく突進し、木刀を横薙ぎに払った。パンチパーマの頭に衝撃が走る。

続けざま、柄の先を、身体ごとパンチパーマの鳩尾に落とした。パンチパーマは、海老のように背中を丸め、口から何かを吐き出している。たうち回る。

その時、後ろから眼鏡の男が先ほど縛り上げた男を担いで現れ

「こつちだ！」

と叫び、斜め前のエレベーターとは反対の方向へ走った。

あちらこちらの戸が開いて、五・六人の顔が見える。しかし、二人の男が連れ立って走って行くと、次々と戸が閉まる。

廊下の照明が、やけに明るい。

靴音が響く。

角を曲がると、そこにもエレベーターの昇降口があり、男たちが来るのを待っていたようにエレベーターは停まっている。

ボタンを押す。

エレベーターが開くと、担いでいた男を放り入れて、男たちも同時に雪崩れて倒れ込んだ。

二人の男から汗がドツと流れ出、呼吸が乱れに乱れている。

エレベーターが下降を始めた。

「大丈夫か！」

と、眼鏡の男が言うと、顎に傷のある男は、自分の右肩の辺りを見て言った。

「熱いもんだな・・・」

そして眼鏡の男に目を移し、心配そうに聞いた。

「お前、心臓は？」

「・・・下で、家の奴が・・・薬を持ってる・・・」

二人の男は荒い息をして、お互いを見詰めあう。

ガクンと、エレベーターが一階に着いたようだった。

平成十七年六月二十四日深夜、大阪府八尾市東山本新町五丁目にあ

る、十二階建てマンションでの出来事である。  
梅雨も開け、沖ノ鳥島の南方四十五キロ付近で、台風四号が発生したとニュースは伝えていた。その頃の出来事である。

## 第1章 出会い

### 第1章 その1 利谷

現代では子午線の四千万分の一がメートルではない。オレンジ色に輝くという、クリプトン原子の光の波長の百数十倍がメートル、というわけでもない。

一メートルとは、光が真空中を二億九千九百七十九万二千四百五十八分の一秒間に進む距離、という事になっている。

利谷幸一は、そんなことは知らない。知りはないが、彼が今手に汗しているのは、やはり距離と速度の問題である。

利谷は新聞を頭の上にかざして、顔の部分にだけ陽影を作り、目を細める。

逃げ切れ！

関東地方に梅雨明けの予報はまだ出ていないが、今日はもう真夏日を思わせる空模様で、朝からの強烈な太陽の光が午後四時近くの間馬場全体を包んでいる。

第四コーナーを回り、残り三百メートルの直線コースに入っても、ハイスターチの脚は衰えを見せない。

いける！

後続馬との間隔は六馬身半はある。

騎手の、赤と緑に彩られた派手なチョッキが炎天下に躍動し、ゴールに向かって突き進む。

しかし、三枠のキサキオーサキの追い込みが急だ。馬体の伸びがいい。

砂が飛ぶ。

ハイスターチの逃げ足が鈍ったわけではないが、差が序序に縮まりを見せている。

キサキオーサキの外側大きく単独馬になっていた栗毛のタサキコンテマが、それ以上のスピードで追い込みを始めている。鞭がうなる。

行け！

残り五十メートルになっても、ハイスターチは後続馬に四馬身の差をつけて駆けている。

罵声と絶叫と、それ以上の怒号が入り乱れて、場内は興奮の渦である。馬券が二・三ヶ所で、風のない空へ向かって放り投げられ始めた。無理もない。ガチガチといわれた本命も対抗も、後続の馬群の中に埋もれたまま二千三百メートルを走り続け、ついにゴールを迎えようとしているのだ。

ハイスターチが駆け抜け、二番手をキサキオーサキと争ったタサキコンテマが半馬身差で通り抜けるとドオーツ

と場内が沸いて、浅い屋根しかない空へ喚声が広がった。

平成十九年七月五日、午後四時の川崎競馬場。気温・摂氏三十二度

「ねえ、ねえ」

と、シャツを引っ張る節子の声で、利谷はやっとわれに返った心地がした。

「陽陰に行きましょうよ。暑くってー」

「ああ・・・」

と、節子に従いながら、利谷は苦笑せずにはいられない。

節子も利谷に言われて、八・八のぞろ目を購入しているはずだ。オッズからしても万馬券は間違いない。だから躁げ、とは言わないまでも、もう少し嬉しそうな素振りをするとか、ニコツと微笑むとか、なんらかのアクションがあってもいいのではないか、と利谷は思う。

利谷は人混みの中を、節子と一緒に階段の下へと移動しながら、そのことを聞いてみた。

「うん、そりゃあ嬉しんだろうけど、とにかく暑くってさあ」

節子はそう言っただけでブラウスの胸の辺りを指で摘み、パタパタとハンカチで風を送った。

ウォーッ

と、上の方でどよめきがおきている。配当金が表示されたのだろう。三連単なら五十万円以上ついているはずだ。

「じゃあ、利ちゃんは嬉しいわけ？」

「なに言っただけさあがる」

「だって、私に嬉しくないかってさあ、変なこと聞くんだったもの。聞かれりゃあ、嬉よって答えるけど・・・」

ただ目的はお金儲けじゃなくて、競馬というものを一度体験したかったのだ、と言っただけ。

口ぶりに、体験したから帰りたい、というニュアンスがある。

適わないな

「判ったよ、帰ろう」

「うん、ごめんね」

ナイトー競馬のために開門が午後二時半である。それに合わせる形で午後三時前に来て、今のレースで都合二レース目であるが、実を言えば帰ることに利谷も異存はない。

節子のように暑さに負けたわけではないが、利谷の目的も終わっている。

のめり込むかな？

追い込みが全盛の現代競馬界にあつて、往年のヤマニンマサコのように逃げに徹する馬が、利谷の好みには合っている。

追う、という迫力より、追われる、という必死さが、利谷は好きなのである。

川崎競馬場にそういう馬がいると先日石黒から聞いて一度見てみたいと思っていた矢先の昨夜、節子がどうという風の吹き回しなのか一

度競馬に連れて行って欲しいと言うのであった。

それが、この暑さに負けて、もう帰ると言っている。

いい加減な女だ、と、利谷は思っているわけではない。賭け事に対する彼女の淡白な性格を知っているからではなく、なまじっか他の賭け事を知っている彼女の様な人間には競馬や競艇はレースから次のレースに移る時間が、苦手なのである。「間」が持たないのだ。しかし、帰りの車の中では、節子は目が醒めた如く饒舌になった。

「知らなかったのよ」

と、そんな言葉を枕にしては、ケラケラ笑った。

知らなかったのだ、と言う。配当金が一万四千三百円だから、自分に返って来るお金は二万八千六百円であると、そう思っていた、と言っているのである。

拳句の果てに

「チツクシヨウ、私、何で二千元しか買わなかったのかしら」と言ったり

「もう一度やりにいこうか」

と言ったりしては、ハンドルを抱えるようにして突如、ケタケタと笑ったりした。

利谷幸一、四十一歳、数え年でいえば本厄に当たる。

五年前、離婚した。

子供が二人いた。

この五年間、別れた女房の順子にも子供にも会っていないが、たまに、子供に会いたいと思う時がある。上の坊主は今年で十二歳、中学一年になっているはずだ。下の娘は小学三年生。自分で育てているわけでもなく、月々の決まった養育費を払っているわけでもないのに、毎年三月末になると、利谷は自分の中にだけいる子供の学年を数える。

別れた理由？

事業の失敗、あるいはサラ金というのが一番判り易いだろう。順子の兄弟もそう思っているはずだ。しかし、それが真実ではない事は、自分と順子が一番よく知っている。月並みで気障な言い方をすれば、男の夢と女の現実、というギャップの問題なのだ。

夢があつた。見果てぬ夢ではあつたが、自分のすべてを賭けても悔いる事のないであろうと思われた夢が、あつた。

十年前、利谷は人間関係のもつれから八年勤めた商事会社を辞し、株式会社野田企画という不動産会社に営業として再就職した。就職というようなものでもなく、女房に内緒でとりあえず潜り込んだというのが実体に近かつたが、それが利谷の運命を変えた。

不動産会社といっても、北関東地方の山林を別荘地というふれ込みで整地し、首都圏への販売を中心とした、いわゆる悪い意味での開発屋である。間違つても、デベロッパのようなものではない。

利谷が入社した平成九年ごろといえば、別荘地の販売などは既に見限られた業界だったし、社会はそれどころではなかった。金融不安が募り、証券会社や銀行などが相次いで破綻をした年である。

しかし、この業界は業界で、細々と生きながらえてはいたのだ。業界としては昭和五十年代がピークであつたらうか。平成に入るところにはこういったまがい物の開発屋は、テレビや週刊誌などに叩かれて徐々に駆逐されていった。そしてバブルの崩壊と共にほぼ全滅した。

ただ、利谷が入社した時期は上記のごとく、庶民はまだ別荘どころではない。が、そこに面白があつた。

十数年のブランクは、知らぬ間に購買層が一巡していたのだ。

しかも、飛び込みという営業スタイルが利谷に合っていたのだろう、水を得た水澄ましのようなものだった。

当時の野田企画は、月一といって、月間に一本の契約を成立させればそれで良しとしたものだったが、利谷は入社初月から月間成約数が七本と、他を圧倒していた。

実入りは契約の金額や件数にも依るが、概してオーダー金額の二十

三％が固定給に加算され、三ヶ月後の利谷の収入は三百万円を超えた。

夢のようであった。

野田企画は一応株式会社になつてはいたが、営業マン十一人に事務員一人という、漫画のような会社であった。

それがこの不況業種の中で細々と生き永らえて来られたのは、社長である野田栄一の腰の粘りにあるといえた。もう行き詰まりか、という段になると、不思議とそれを乗り越える知恵が出てくる。発想が意表を衝いており、正に「ワープの野田」の異名は伊達ではないといえた。

どちらかといえば行動派であると利谷は、物事の本質を追及するようなところがある六つ年上の野田と馬が合った。といつても入社当時の利谷には馬とか牛とかいいう以前の問題で、自分の勤める会社の社長と会社の行く末を語り合うという事自体が、今までの利谷の会社勤めから考えれば破天荒な事であった。

飲みに行った時などそんな具合に会社の将来を話しあう内、利谷は野田企画の運営に深く関わっていく事になり、実に多彩な経験を経ることになる。

「一利ヲ興スハ、一害ヲ除クニ如ズ」

というのは組織の鉄則である。

実は会社という組織も、外部からの挑戦によつて敗れ去っていく、というのは稀である。一見そのように見えても、実態は内部の腐敗、という言葉が過激ならばモラルの低下、あるいは対処能力の欠如ということが前提としてあるのである。

業界全体が低迷に晒されている野田企画の場合も、規模こそ小さけれ、その例外ではなかった。たった十一人の営業マンに、派閥があったのである。利谷にも泥を被つたり被せたり、内々で場外乱闘と呼称していた毎日が、仕事以外の空間にあった。

通常、入社して彗星のように光り輝いた営業マンもそういつた泥濘に足を取られ始めると、営業グラフは急激に下降し、ただの人にな

っていく。

その点、利谷は特異であった。面目躍如というのか、泥濘が養分のような男なのである。

七ヶ月後には営業部長が四人の営業マンを連れて他社に奔り、利谷が営業全体を束ねるようになった。

そもそも営業会社というものは単純な、誰にでも判るシステムで運営されているものなのである。新参の利谷にも充分理解し、把握できた。

しかし、その「判る」事が魔物なのであった。

この場合「判る」ということは、先が読み取れる、ということであり、それは未来が己の掌の中で息づいている、ということに他ならない。

利谷は熱狂し、没頭した。業界の環境の善くなった四年後には、社員が百五十名を超え、浦和の本社に加えて新宿、松戸、横浜、そして大阪と営業所を拡げ、絶頂期を迎えた。いや、今振り返るからこそ絶頂期であったわけであるが、その時は絶頂であるなどと思いきなかつた。

未来という真紅の炎は、相変わらず己が掌の中で燃えている、と、思われた。

突発的な「振り込め詐欺」事件。

当初は「オレオレ詐欺」といわれたこの事件は、平成十三年から広く報道され始めたが、ちょうど野田企画が一年ほど前から営業方針を訪問販売から、電話を使ったテレアポへと切り替えたところだった。電話を使った営業が、ストップしたのである。

転機はまことにあっけなく訪れた。営業方法が似ている、それが致命傷だった。詐欺と営業方法が似ているというのもおかしいものだが、現実の問題だった。そのロスも拡大局面の組織ならば、どこかに吸収出来たかも知れない。が、丁度その頃、携帯電話の普及によってテレアポの獲得率が急降下しており、会社は会社で売り物件である福島二本松の造成地が、開発許可砂防指定地の作業申請に関し

て、県から、告訴も辞さずの勧告書突きつけられ、下請け業者との板ばさみになって二ツチもサツチもいなくなっていた。悪いことが重なりました、というのには第三者に対する判り易い言い訳であるが、利谷には内部的な崩壊、というイメージの方が強い。負債総額三億六千万円

野田社長の失踪

顧客からの預かり金返還要求と、それに続く告訴、刑事事件  
馬鹿馬鹿しい形で立件された詐欺罪の従犯として、刑期一年、執行猶予三年

保証人になっていた市中金融の返済、追い込み、そして離婚  
五年前の事である。

「利ちゃん、カサプランカ行こうか？」

新車のクレスタを転がしながら、サンガラスの奥から節子が言った。  
「ホテルへ帰るよ」

眩しいほどな七月の光に晒された産業道路を、白いクレスタは走っている。しかし上方を湾岸道路から続く首都高速横羽線が塞いでいるため、車道の北側だけは陽影になっていて、排気ガスの微かな匂いさえ我慢すれば快適である。

右手前に横浜博の時の大観覧車が、低いビルとビルの間に見え隠れしている。

「じゃあ私、カサプランカに行っているからさあ、後で来てよ。今夜、飲もうよ」

「クリスタルかい？」

「いいじゃん。私の奢りということさ」

「節っちゃんもいい加減だなあ。事務所の方はいいのかい？」

「うん。それ言われると弱いなあ。だけど、香保さんが上手くやってくれるしさ、携帯も鳴らないから・・・」

「節っちゃん、営業でもやったら大成するぜ、保証してあげるよ」

「イツヒツヒ、みんなにそう言われるんだ。だけどね、わたしじゃあ

あいう事はしないんだな」

節子はサンガラスを外しながらそう言い、利谷を見て、淡い緑のアイシャドーに彩られた左目で軽くウインクをした。

クレスタは生麦の交差点を左折し、利谷の住むG - グラスホテルへ向かった。

節子は、カサブランカでは「節っちゃん」が通り名なのだが、本名は横井節子

といい「横浜節子探偵事務所」という小さな興信所と、その事務所をパーテーションで区切った「横浜レンタル」という貸事務所を、京浜急行の黄金町駅の近くに開いている。

本人は利谷より五歳年下だと言っているが、少しサバを読んでいるのではないかと利谷は思っている。容姿は目と目の間隔の広い、美人というより可愛い感じの、小柄でスタイルの良い、いつも微かな香水の香りを放っているような、まあ、いい女である。ただ、性格の根っこに瓢衾なところがあり、利谷と一緒にの時など十代の小娘のような表情を見せたりすることがある。

二人の間に、特別な関係、というものは無い。節子も四 - 五年前に離婚したらしいが、利谷は深く尋ねたこともない。

節子と出会ったのは「カサブランカ」というバラ打ちの雀荘である。カサブランカは横浜市内を中心として、都合六店舗の店をチェーン展開しているが、利谷が主に利用しているのは中華街の横手にある加賀町店である。近い、という理由だけではない。真田、という口ひげを生やした店長が気に入っているのである。

クレスタは桜木町から弁天橋を渡り、しばらくして細長いビル前で停まった。G - グラスホテルと穿たれた金色のプレートが嵌め込まれたそのビルは、一階がラウンジ兼用の喫茶室になっていて、二階がフロントと和食の店、三階から八階までが客室になっている、ノッポのシティーホテルである。

利谷は丸五年、ここで生活している。

五年前に、身を潜めるような毎日を過していた時、偶然泊まったホテルであったが、以来今日までホームグラウンドの埼玉を離れ、何となくグズグズとこの横浜という小汚い街に居ついている利谷であった。

当てにするなよ、と言う利谷の錆のある声を無視するかのように「じゃあ、待つてるね」

と節子は言つて、車の流れの中に入っていった。

利谷は節子の車が見えなくなるのを確かめてから、空へ目を移した。青空をいく純白の雲が二・三片浮いていて、五時近いのに太陽が眩しい。街全体が陽当りと陽陰の、強烈な白黒のコントラストに還元された相貌を示している。

ゆらめくような、夏が来ているのだ。

暑い

利谷は充分過ぎるほど太陽の光線を意識してから、三〇三号室の自分の部屋へ帰るべく、ホテルの中に入って行つた。

部屋へ帰つて、何かする当てがあるわけではない。冷たいシャワーを浴びてから、ハイスターチの走りっぷりでも回想して、午睡でもしようかと思つている。今の時間からでは、パチンコもつまらない。利谷は麻雀とパチンコだけで生計を成り立たせている。一日、二万五千円の稼ぎが、利谷が自分に科したノルマである。五年間、毎日のノルマの上下はあつても、月間五十万円を切つたことはない。

何故なのだろう？ どういう訳か、他人から見放すしか考えられないような、訪問販売の営業とか、今のような生活が利谷の性格には合っているようであつた。暗い、博才のようなものがあるのである。

しかし、ここへ来た時から今日を目指したわけではない。反対に、ここへ来た時から、この境遇を抜け出すべく努力しているようなも

のであった。

ところが、半年もして、身の回りの問題が納まるどころへ納まるころには、野田企画の対抗会社であった丸の内開発から手腕を見込まれ、新設の第二営業部長として入社を請われた時、利谷はアツサリとその話を袖にした。

袖にしてから、断った自分に自分で驚いた具合だった。

フロントでキーを受け取り、クリーニングの確認をしていると

「あっそうだった。メッセージが入っていたんだわ」

と、チヨコレイト色の制服に体を包んだ愛子が、利谷に言った。

「メッセージ？」

「ええ、一時間ほど前だったかしら、野田って言えば判るからって・

・・・」

「えっ・・・？」

野田、と聞いて利谷の胸に激しい感情が走る。懐かしいくせに苦いような、複雑な感情が喉元まで押し寄せる。

愛子は利谷の心の揺れが判らないのか

「はい、これ」

と、にこやかに言っつて、利谷にメモ用紙を渡した。

PM三・三〇と、受け付けた時間の下に「いつでもいいから電話をくれ」と、電話番号が書かれてある。

石黒が教えたのかな？

利谷は愛子と少し話を交わしてから部屋へ行き、エアコンをセツトして、火照った身体に頭から冷たいシャワーを浴びせた。

バスルームから出てベッドに腰を掛け、バックの中から百四十三万円束を取り出して、百三十万円だけを傍らのアタッシュケースの中へ移した。

それにしても

利谷はパドックを回っていた時のハイスターチの目を思い出す。

周囲の思惑などそつちのけで、うつむき加減に歩いてきたハイスタ  
ーチが利谷の近くまで来た時、ヒョイと立ち止まって空を見た。  
青空が映ったような、あの目がよかった。

のめり込むかな

そんな思いは絶えずしているが、それは裏返せば、のめり込みたい  
という利谷の願望に他ならない。

一時の感情の昂ぶりを、自分で弄んでいるに過ぎないのだ。

何事にせよ熱中するという事は、今の利谷には出来ない事であろう。  
自分に向かつての冷たい計算が出来るようになっていく。

ベッドに横になって、天井を見詰めた。

天井の右端のクロスジョイント部分が僅かにずれていて、横にな  
る度にそれが気になる。

野田社長・・・

どうして自分の居場所が野田社長に判ったのか、少し考えてから、  
野田社長は今どうしているのかと思った。あの知恵の塊のような野  
田社長のことである。あの修羅場でさえも、痕跡を留めぬ一瞬の泡  
沫として切り抜けたに相違ないと思う。

連絡をするかどうかは、石黒に問い糺してからにしよう。利谷はそ  
う考えてから、浅い眠りに落ちた。

雀荘カサブランカの加賀町店は、人通りの多い繁華街に面した雑居  
ビルの二階にあることもあって、客の出入りが激しい。卓を囲めば  
四人のうち一人は、まず初対面である。三十坪強の店舗に十三の卓  
を持ち、メンバーさんと呼ぶ店員が店長の真田を入れて八人いる。  
七時過ぎに利谷が店の中に足を入れると、独特のざわめきの中から  
「チップは一枚ずつね」

と、石黒の声が奥の方から聞こえた。

木目を鮮やかに出したカウンターの中心で、他のメンバーと話をして  
いた真田が利谷を認めて、ニヤツと笑い、目で挨拶を送ってくる。

「遅かったですねえ」

「うん、ちよつとね」

「節っちゃんが八時までには戻るから、待ってて欲しいって言うてましたよ」

「そう・・・」

「六時少し過ぎてたかなあ、携帯で呼び出されたんです」

石黒はメンバーの制服である黒のチョッキに黒の蝶ネクタイをしているが、色の黒い角ばった顔に口ひげを生やしている石黒には、どう鼻屑目に見ても似合わない。せめて髪を綺麗にセットでもすれば良いかも知れないが、いつも油気のないパサパサの髪を手でなでて整えたつもりでいる。

「今日、凄かったですっつて?」

「・・・馬かい?」

「節っちゃんがね、わたしやこれから競馬ギャルになるんだって、張り切っていましたよ。利谷さん・・・引きずり込んだら駄目ですよ」

真田がそう言うて笑い、カウンターに凭れている利谷の前にアイスコーヒーを置いた。

「マー坊、今日についてますよ。半チャン六回で四回トップ、マイナスなしの成績です」

「ふうん。困ったことだ」

「まだ気にしてるんですか?」

「どうかな?」

利谷は小首を傾げる仕草をした。

「勝ったじゃないですか」

「そう、お前の言う神様に点棒では勝つただろう。しかしね、ああいうのは勝つたとは言わないんだよ」

利谷はグラスからストローを取り出し、直接グラスを口に当ててアイスコーヒーをすすった。

二人の会話の説明が要る。

真田が、篠田という男がいるが

「あれは神様だ」

と言ひ、利谷に是非一度、卓を囲んで診てやって下さいと言つ。了解すると、待つてましたと真田はその為のメンバー選びを楽しんでいた。そして二週間ほど前にメンバーが決まり、場が立った。

最初、利谷は神様だという篠田のことなど眼中になかった。それが、途中から、妙に気になりだした。すっきりしない。

場の主導権を握つて振り回す利谷に対して、真田ともう一人は連係プレーとも思える打ち方をして、何とか利谷の勢いを止めようとするのだが、篠田はその戦いに入つて来なかつた。

篠田の打ち方は悄然というのか従容というのか、独りで何ものかに向かつて「問うている」ような、打ち方だった。

それでいて最終局面ではいつもトップか、トップにピタリと照準を当てている。利谷とすれば、いつも背中に匕首を当てられているような、首輪をはめられた犬のような、妙な気持ちだった。それが、全局そうだった。

終局後、四人で飲みに行った。

「運の太さを、競うような麻雀だね」

利谷の麻雀を評して、篠田はそう言った。

あれ以来、麻雀がおかしくなっている。

利谷と真田がカウンターの隅で話をしている最中も、客がひっきりなしに来ては控えのソファアの所に集まる。

メンバーが空いた卓へ客を案内したり、終了卓へ行って計算をし、場代を徴収したりと、忙しく立ち働いている。金曜日だから、いつもより忙しいのかも知れない。

「利谷さん、打ちますか？」

と、メンバーの一人が言った時だった。節子が顔を覗かせ

「あ、居た居た」

と言ひ、スリッパに履き替えて利谷の横に来た。

「利ちゃん飲みに行こう」

「ちよつとまだ早いんじゃないか？」

時計を見ると、七時四十五分である。

節子は真田の方をチラッと見てから、話があるのだと嬉しそうに言う。

「カモが来たのよ」

「カモ・・・？」

「うん、いいからさあ。とにかく行こうよ」

利谷は真田に、後でクリスタルに来るよう石黒に言ってくれと伝言を頼み、促す節子の後に続いて店を出た。

バー・クリスタルは中華街に続くシルク通りにあつて、九階建ての最上階の一角を占めている洒落た小さな店である。

ガラス窓に寄り添うようにして、四人掛けのボックスが二つと、それに対して斜めの角度に張ったカウンター席が十四・五席あるだけの店である。

利谷がこの店を好んでいるのは、マスターと気が合うからではない。亜紀という女性バーテンダーの作るジントニックが好きなのだ。

ボトルは「グレンリベット、セラーコレクション64年」を取り寄せて置いてあるのだが、それは棚に飾ってあるだけでまだ封も開けてない。それは見ているだけで気分が良いのだ。きつと近いうち、開ける日が来ると利谷は信じているのである。

実際に飲むものは、ほとんどその日の気分にあった物をショットで頼んでいる。

店内には二組の客がいて、カウンターで何やら話をしている。

利谷がボックスに座りハイネケンの生を頼むと、節子は、わたしもと言ってから

「今日についてるんだ」

と言って、につこりした。

ガラス窓を通して、横浜の夜景が美しい。

「どっしたんだよ？」

「うん、困ってるのよ」

節子が言うには、携帯で呼ばれて事務所に行くと、五十歳くらいかと思われる男が待っていて、千葉にある会社を調べて欲しい、と言ったというのである。

「私、断ろうかと思ったのよ」

そもそも探偵事務所と一口にいつてもいろんなタイプの事務所があるわけであり、節子の事務所の場合は結婚に関する身元調査とか、浮気の調査といった、いわば浮世の人間関係の調査がほとんどであり、会社の調査などはあまり得意ではない。普通この業界のこんな場合は、受けるだけ受けてマージンを抜き、同業他社へ回すのだが、節子は僅かなマージンでリスクを負うのが嫌だといって「転がし」はいつも断る。

ところが、よく話を聞いてみると、企業調査といっても会社社長・榎 圭次個人の身辺調査だという。しかし節子は、やはり断ろうと思った。

「だってさあ、遠いじゃん」

榎 圭次の自宅は船橋市であり大取をしている株式会社千葉恒産の社は千葉市内である。

けれど最終的には、節子はその依頼を受けた。理由は金額である。

「カモったのかい？」

と、利谷が訊くと、金額は相手が提示したのだという。

「一ト月で二百万円、経費別途だつてー」

節子はよほど気分が良いのか、ビールをもう一杯と頼んでから

「そこでお願いがあるんだけどー」

そうやって利谷を斜めに見て、軽くウインクをした。

「バカ、俺はやらないよ」

「何でえ・・・利ちゃんこの間言ってたじゃん。こんな生活いつまでもしてらんないって。仕事でもしようかなつてー」

「おい、おい」

「笑ってごまかそうなんて駄目よ」

確かに利谷はそう言った記憶があるが、それは言葉としては正確であつても、意味するところは正しくない。しかし、節子がそう言うのも無理はない。節子は利谷の過去を知らないのだ。

「四分六でどう？ 私が八十万で利ちゃんが百二十万」

節子の手首のブレスレットが、グラスを傾ける度にキラツと輝く。

「まあ、アドバイスくらいにしておいてくれよ。節ちゃんとは利害関係を持ちたくないんだ」

節子は頬杖をして利谷を睨んでいる。

「石黒に頼みな。それ位の調査なら奴にも出来るし、あいつこそ仕事が出来なくて堪らないんだよ。もうすぐここへ来るはずだから、俺からも口添えしてあげるからさ」

「マーちゃんに・・・？」

と節子は言つてから、どういう関係なのかと、利谷と石黒との事を聞いた。

「昔の、俺の部下」

利谷はそのように当たり障りのない言い方をしたが、それはそうに違いないにせよ、二人の関係はそれを超えたところにある。

マー坊、こと石黒達治は、今年二十八歳の青年である。両親に見捨てられ、施設育ちの彼は、七年前に利谷に拾われて以来ずっと傍らを離れず、利谷を父親か兄貴のように慕っている。

利谷は、ふつと暗い表情をした。

お前が野田社長に連絡を取ったのか？

それを問い糺したい気持ちだが、利谷の心の中に渦巻いている。

何故なのか、何に拘っているのか、それは本人である利谷自身にも判らなかつた。

七月十八日

気象庁によれば、この年は例年になく猛暑になるという事であったが、それが事実であることを実証するかどうかのような高気圧が、早くも東日本を覆って、この日の首都圏は燃えるような一日であった。

千葉、東京、横浜をつなぐ湾岸道路は、首都圏を支える産業の幹線道路として、相変わらず車の群れに埋め尽くされていたが、時として百メートル程の車間が空くと、それだけの間隔であるにもかかわらずアスファルトの上には逃げ水が発生した。陽が落ち、熱気が少し冷めたその夜のことであった。

田島数夫は勤め先の製本会社を八時半に退社し、JR房総線に揺られて長浦の駅を降り、自宅へ向かった。線路沿いに南下し、商店街が途切れた所から踏み切りを渡って少し行くと、左手に大きな倉庫が二棟建っており、その二棟の倉庫に挟まれて二百坪ほどの駐車場がある。

時刻は夜十時前である。

田島は、不審を抱いたと、後で証言することになる。

「あの辺りは暗い所でしょう。だから帰りが晚い時は駐車場の灯りで助かっていたんです」

それが、消えていた。

四つのライト全てが消えていたのも変だったし、何か「嫌なもの」を感じた。

しかも通り抜けざま、灯りの消えた駐車場の虚空を覗いて見ると、微かだが人の話し声がするではないか。

「・・・？」

抑揚からして、何かを問い詰めているような声音に感じられる。

田島は関わらない方が良いと即断して、急ぎ帰宅した。

何故なのか？という警察の問いに、暴走族だと思った、と田島は答えるが、それは無理なからん事であった。

夏になると、確かにこの近くには国道十六号線を疾駆する俄か暴走族が出没し、毎年必ず二・三件の傷害事件を起こす。

しかし、田島にとって、事はそれで終わった訳ではなかった。帰宅すると大学三年生になる一人息子がクラブ研究会のために遅くなっているということで、女房に言われるまま犬を散歩に連れ出したのである。

田島は犬を自転車に繋ぎ、人気のない所を回りながら、途中、先ほどの暴走族の事が気になり、ちよつと遠回りであったが灯りの消えた駐車場に自転車を走らせた。

倉庫の影が、半月の月に輪郭を現し始めたころ、距離にして七・八十メートルであったろうか、駐車場の裏手から続く田んぼの中を、人が走っていた。

走っていた、というより転げ回ると言った方が正しいような走り方である。

五十センチほどに育った稲を踏み分けるようにして走っているのであるが、時節がら水が多い。

田島は自転車を止めた。

「……？」

月明かりの田んぼの中を転げ回って走っているのは、一人ではなかった。一人の男の影を、二人の男の影が追っているようである。無言のうちの荒い息遣いや、必死の動作が感得できる。

バシヤツ、バシヤツ

声は聞こえない。

緩く風が吹いている。

田島はゾクつと背筋に悪寒が走るのを感じた。

その時であった。

自転車の繋いであったボスが、猛然と吠え始めたのである。その吠え声に助力を認めたのか、追われている男が血を吐くような叫びをあげた。

「助けて！……助けてくれ！」

若い男の声であった。

## 第1章 その2 有本

神奈川県茅ヶ崎市は、人口二十五万人ばかりの静かな住宅の町である。

相模湾を南に受けて暖かく、後背遠く丹沢の山塊、そしてその合間をぬって富士を望む。高い建物はあまりなく、市の中心部であるJR駅近辺に僅かばかりのオフィスビルと、数件のスーパーがあるに過ぎない。

湘南の海岸に沿って松林と住宅街が続き、所々に海水浴客を見込んだホテルが建っている。

海水浴シーズンを除けば、陽の光の静かな、嘘のように落ち着いた街である。

その茅ヶ崎市の新湘南バイパス沿いに、星野電機製作所の本社があり、その本社の経理一課に有本省次郎という若者が中途入社したのは、今年の五月のことであった。

会社として中途採用が珍しいわけではなかったが、本社採用の、それも経理一課への配属社員となると、これは非常に珍しいというより初めての事であった。

八年前に経理課が一課と二課に分かれ、一課は財務を、二課は一般経理を担当する事になって以来、経理関係の新入社員は全て二課へ配属され、その上で一課へ昇格するという事になっており、中途採用の新入社員がはじめから一課へ配属された今回の人事は、社内にはさまざまな波紋を呼んだ。

経理の責任者である室賀常務は序列意識の強い人であったが、その常務も不思議なことに何も語らない。その話題に対しては苦虫を噛み潰したような顔を見せるだけであった。

しかし、誰も常務の渋い表情を見て納得したわけではなく、陰でさまざまな批判や憶測が乱れ飛んだ。

経理畑の人間たちだけではない。

配電盤を主にしている上海工場と、プリント基板を中心とするバンコク工場を束ねる星野海外事業統括常務など、その人事に対して神経を尖らせているらしく、みんなの前で室賀常務にその理由を尋ねたくらいである。

そのうち人事課から、この人事は会長の星野八郎の指示である事が非公式に伝わり、以来批判派は表立ってこの問題を取り上げなくなった。が、経理課に利害関係を持つ人間を中心に、相変わらず有本省次郎を見る目は冷たいものだった。

早く失敗でもしないかな、というのが、ほぼ全員の彼に対する期待である。

そういった人の思惑を知ってか知らずか、蛙の面に何とやらで、有本省次郎は入社の際緯に関して一切口を閉ざしている。

有本省二郎、旧姓、堀井省二郎。

闇の深さを知る人間にだけ、光はその暖かさの真の姿をみせる。

省次郎は三月の終わりに千葉刑務所を仮出所した。春の陽差しがようやくその匂いを撒き散らし始めており、硬かった桜のつぼみが柔らかさを増している季節だった。

まぶしかった。

全てが、まぶしかった。

乾いた土が小雨によって潤いを帯びていくように、省二郎の心は少しずつではあるが、確実に生氣を取り戻していった。五年前のあの当時から考えると、省二郎を取り巻く環境はずいぶん変わっている。三年前に母が死んでいた。脳卒中だったという。桜の花が美しく咲く青山の墓苑で、省二郎は独り泣いた。

省二郎が生まれ育った三鷹の家は、人手に渡っていた。そのことに對して兄は多くを語らなかつたが、省二郎には判る気がする。あそこに居ることは、針のむしろであったであろう。

その兄は離婚していた。

全ての問題がああ的事件に収斂し、そしてそれを契機に全てが発生し

ていた。

しかし、その激震も薄らいで来ているのか、新しい芽吹きもある。一年前に兄が再婚し、双子の子供が出来ていた。

「ここはお前の家だ」

多摩丘陵が美しい分譲住宅に住む兄はそう言ったが、省二郎はその言葉に感謝こそすれ、甘える気持ちにはなれない。

それと、三鷹の家を売却したお金の一部だと言って、二千万円の預金が入った通帳を渡されたが、それは頑として断った。そんなお金を、受け取れる権利のあるうはずがないではないか。

身元引受人である兄の所に二週間程いてから、有本精一叔父の家に移った。

「家へ来い」

と言う精一叔父の言葉に従ったのである。そして

「内面も大事だが、人間は外面も大切にしなければならん。省二郎、堀井の姓を捨てろ」

そう言うて省二郎を諭し、有本家の養子なることを勧めた。

その上で、東京には住みづらかろうと言い

「茅ヶ崎へ行け」

と、星野電機製作所への就職を世話してくれた。

星野電気の会長、星野八郎と精一叔父との繋がり、一・二度叔父から聞いたことがある。

叔父は商社時代の武勇伝のように笑い話で済ませているが、1960年代にカンボジアのコンボンソムで海老の輸入をするため冷凍倉庫を作り、現地責任者として赴任したのが、企画立案、実行を担当した精一叔父と星野会長の二人だという。

気が付いた時には半年で世界情勢が激変し、共産ゲリラに拘束されてしまい、一月余り後に収容所を逃げ出して、密林の中を食うものも無く五日間逃げ迷った仲であるらしかった。

就職には実のところ、驚くことが多かった。

省二郎は獄舎にいた時から出所後の身の振り方で悩んでいたのだが、

出所すると、兄からも友人たちからも沢山の就職の誘いがあったのである。

その中から、星野電機を選んだのには、省二郎なりの明確な理由がある。

西岡為三を、捜さなければならぬ

その、一点である。

その為には鎌倉に近い所が良いに決まっている。

それに、省二郎には気になっている事があるのだ。西岡の、天麩羅屋「おか」での何気ない言葉

「緑化技術は日本が一番進んでいる」

あの言葉が忘れられなくて、逮捕される前日に中央図書館へ行ったくらいだ。鎌倉に近くて緑化最前線となれば、鎌倉から小田原を結ぶ海岸線に平均幅二十メートル余、長さ三十数キロに亘って断続的に続く湘南の防砂林ということになる。

しかし、かといってその防砂林が西岡とどんな関係にあるというのか？

西岡為三

怨んでいるわけではない。

初めの二年間はともかく、今となっては怨んでいるわけではない。

何故なんだ？

白壁の殺された理由も判らなければ、自分が標的にされた理由も判らない。それが、知りたい。

白壁貢を殺害したのは西岡である、と、激情の余り思い込んでいた。しかし、それさえも、冷静になって考えてみれば怪しいものであった。

省二郎は、どんな事があっても探し出して殺してやる、とまで西岡のことを思っていたのだが、五年の歳月は長い。もう一度自分の人生を築きあげよう、そう考えるようになるまでに僅か二年の月日しか要しなかった。

人間は過去に捉われて生き続けることは出来ない。そんな時間の、

余裕はない。新しい生活を始めなければならないのだ。

しかし、かといって、あの事件を放っておく訳にもいかない。あれは、解決しなければならぬ。それが自分にとって、本当の意味での出発点になるであろう。

省二郎は、自分が渋谷署の留置場から東京拘置所に移送される前日の事を、折に触れては思い出す。

三月半ばの、明日は拘置所に移されるという、晴れた日の午後であった。一人の刑事が来て

「最後に聞いておきたい事がある」

と、省二郎を取り調べ室へ連行した。

顔だけ知っている刑事であったが、その刑事が己の名を、佐橋、と名乗り、その後長い沈黙をした。

コーラを省二郎に渡して

「飲みな」

と言った以外、何も言わなかった。

省二郎は冷たいコーラを飲みながら、鉄格子の嵌まった窓の外を流れる白い雲を、ぼんやり眺めていた記憶がある。

十分か十五分か、静止した時間の中に、二人だけの視線が絡み合う事もなく漂っていた。

「お前は、馬鹿だ」

唐突に、沈黙を破って佐橋は言った。

「今から俺が独り言を言う。ようく、頭に叩き込んでおけ」

そして宮古市における西岡の事件、そして白壁と明子夫婦の失踪の経緯を語った。

「俺はな、金沢刑務所に収監されている金森が西岡と面識がある、と思ったよ。しかし、なかった。そうになると、どうやっても白壁と

西岡の接点は判らん。 姫路で消えて、浅井という名で東京に

現れるまでの二年余、彼の身に何があったのか・・・？」

そう言つて、無表情に窓の外を見ている省二郎の横顔に視線を当て

「以上だ。　　後はお前の問題だ。自分で解決しろ」  
そう言った。

省二郎は佐橋の独り言を聞いたが、衝撃などはなかった。何がどうなるかと、驚くような精神状態ではなかったのだ。

しかし、佐橋の独り言は、日を追うに従って省二郎の胸の中で大きく育っていった。

そうだ、佐橋の言う事が事実ならば、実に多くのケースが考えられる。そしてそのポイントは、間違いなく佐橋の指摘する一年余の空白にあるに違いない。

確認したい

省二郎は出所が待ち遠しかった。

省二郎は電機部品メーカー、といっても現在の主力商品は省工電線と自動車ユニットの配電盤であるが、その部品メーカーの星野電機製作所に入社することになった。資本金三十一億円、売上げ六千五百億円、国内従業員二千八百名余りを擁する中堅企業に入社出来るなどとは、獄舎にいる間、夢にも思っていなかった。殺人という前科があり、五年前とは違って、運転免許証以外の国家資格は全て剥奪されているのだ。

有本叔父と星野八郎会長の二人の特別な関係が、自分の入社に結びついている事は間違いなさそうであった。形式的な、一顧の面接、といっても東京のホテルのロビーで三人してお茶を飲んだだけであるが、それだけで入社したのである。

ただ省二郎が抱えている問題は星野会長にも伝わっているらしく、会長は

「省二郎君、会社の仕事なんか二の次だ。まず、自分を立て直すんだぞ。そこからしか出発はない」という言葉をかけてくれた。

省二郎は自力、というものを取り敢えず捨てている。今はただ、他

人の好意に身を委ねて、その中から少しずつ自分の将来を築いていこうと思っっている。

だから、自分が経理一課へ配属された事で、経理課全員の注視を浴びている事は判っていた。それが、どちらかといえば冷たい視線である事も充分判っている。

しかし、そんな事は省二郎にとって、どうでも良い事だった。

そういう事に煩わされるには、まだ、省二郎は余りに闇の深さに心を閉ざしていた。

省二郎がこの会社に入社するに当たって、反対をした人間が一人だけいた。

柴垣、である。

「危ない」

というのがその理由であるが、省二郎はその辺りも充分計算している心算だった。

自分の所在を詳らかにしていれば、いつ、どういう形で、西岡たちに再度襲われるか予測がつかない。襲われない、かも知れない。

しかしだからといって、柴垣が言うように、ホテルを転々としながら対決をする、というような事をしようとは思わなかった。柴垣はあれ以来少し神経質になり過ぎている、と思う。

今、東京本社にいる柴垣には感謝の一言である。省二郎が獄舎にいる五年の間に、彼に預けてあった六百万円のお金が、三千万円弱になつて運用されていたのである。

柴垣からその預り証をもらって「えっ」と驚いていると、一昨年のライブドア事件がなければ五千万円を超えていたと、更に驚くことを言ったのだった。

そしてそれとは別に一千万円近くを勝手に流用して目減りしているが、それは許せ、と柴垣は言った。何に使ったかを柴垣は言わなかったが、許すも許さないも、礼金として払ったようなものだった。

省二郎は一千万円だけを残して後は全て換金し、その資金を基にして将来に亘る基盤を作りながら、西岡たちの影をゆっくり追ってみ

ようと思っている。

追う、と一言でいってみても、これがなかなか難しい。表立って動く事は、極力避けなければならぬ。自分を監視する目が、どこかにある、そう考えた方が危険は少ないのだ。

しかし、ゆっくり影を追う、という目論見は七月十九日の今日すでに綻びを見せ始めている。

そんな時間の止まったような考え方は、闇ばかり見ていた監獄ボケ以外の何ものでもない、という事を、省二郎はこれからの一ト月で嫌というほど知ることになる。

七月十九日といえば田島の飼い犬のボスが、怪しい人影に向かって敢然として吠えたあの夜の、翌日である。

省二郎は、女に会わなければならぬ。

柏木奈美江、彼女の退社時間に間に合うよう、今日は入社したての会社をまたもや早退しなければならぬ。

しかし細切のように舞台が移って煩わしいのだが、その前に焦点を利谷に移さなければならぬであろう。

破綻は、意外なところから発生したのだから……

### 第1章 その3 勝野外科病院

石黒達治は七月五日の夜、節子から頼まれて千葉恒産社長、榎圭次の身辺調査をする事になった。

身辺調査といっても聞き取り調査なしの、ただ単に一日の行動を一ト月間連続して調べ、多めに写真を撮ればいいだけの事である。要は、尾行するだけの事である。

これが又、退屈であった。

榎は朝十時に二名のボディガードマンが迎えに来ると、彼らを専属運転手の運転する車に乗せて家を出、十時四十分頃に会社に着く。大概はそのまま夕方七時近くまで会社において、それから夜の街に繰

り出し、早ければ十一時、遅いときは午前二時くらいに家に帰る。その繰り返しなのである。ただし木曜日だけは中央区にある別のマンションに泊まるので、ここに彼女がいるのだろう。

どんな仕事をしているんだろう？

石黒は榎の消えてゆく千葉恒産の本社ビルを眺め、写真を撮ったりするだけで、後は毎日ぶらぶらと過した。日中はやることなく、競馬新聞を買ってきてはノミ屋に流して時間を潰した。それ以外はほとんど車の中で雑誌などを読んで過した。

夜は夜で飲む事も遊ぶことも出来ず、千葉栄や東京銀座の、榎が入ってゆくクラブのネオンなどをデジカメに収めるだけで、腹立たしく見つめた。

もうこんな仕事はやらねえ

しかし、そんな石黒にも慰めがないわけではない。

外出する時、榎は常に二人の男に守られるようにして歩いていた。屈強そうな運転手は車の周りで待っている。榎が飲みに行く時もそうであった。

運転手の奴も俺と一緒にだね

そう思うことで少しだけ溜飲を下げる事が出来た。馬鹿ばかりい話だが「よう」と、声を掛けたい衝動に駆られるくらいだった。要するに、気の抜けた、いい加減な尾行をしていた訳であった。それが、そんなことを繰り返して二週間ほどした七月十八日の夕方、八時を回っても榎は退社して来ないのである。

どうしたのかな？

と、思って車のシートに身を凭れ掛けているとガスンツ

と、車に追突の衝撃を受けた。

慌てて外に飛び出すと、目の前に百九十センチはある片思いの運転手が立っており

「ウツ！」

と思う間もなく、腹と右頬に強烈な痛みを覚え、気が遠のいた。

節子が木更津署の刑事から、勝野外科病院に石黒が入院をしていることを知らされたのは十九日の朝、九時半であった。

全治二ヶ月の重傷であるという。

節子は「クラッ」と、目の前がかすんで行くような衝撃を受けた。すぐに利谷に連絡を入れたが、携帯の電源が切つてある。ホテルに連絡すると、不在だという。

昨夜から帰っていないと言っているのである。

ホテルにはメッセージを残し、携帯にはメールを入れて、取る物もそこそこに木更津に車を走らせた。

病院では面会謝絶という訳でもなく、石黒は二人病室の窓側で、頭に包帯を巻き、右頬に大きなガーゼを当て、拳匂に右腕をストレッチャーからぶら下げて、虚ろな目をして節子を見た。

髪の毛にまだ少し血がこびり付いている。

石黒は節子を認めると

「とうしまひよう？」

と、息がどこかに抜けていく様な声で、心配した。

「えっ何？」

石黒は今日の尾行が出来なくなった事を気にして、節子に謝っているのだった。

マーちゃん、ごめん

節子は涙が出て来るのを止めようがなかった。

節子はそんなこと気にしないでゆっくり休みなさい、と言いたかったのだが、そうもいかない。こんな場合だからこそ、善後策だけはキッチリしておかなくてはいけない。

話を聞くと昨夜救急車で運ばれて以来、幾度か刑事が来ているのだという。

どうしよう？

節子にいい知恵があるわけでなし、第一、どうしてこんな事になっ

てしまったのか、さっぱり判らないのだ。

節子はハンカチで目頭を押さえながら尋ねた。

「誰にやられたの？」

「えのきのホレーカーロマンねす」

「・・・」

「けいさつにいつてはいけなれひょう？」

「そう・・・ねえ・・・」

節子は返答に窮した。

丸椅子に座って石黒の額に手をやり、溜息をついて窓の外を見ると、夏の陽光を受けた東京湾が広がっており、アクアラインのその向こう岸、スモッグに霞んだ街が見えている。横浜であろう。

石黒が節子を見て言った。

「ほんふひょうに、れんらくをしてくらさい」

節子は大きく頷きながら、その本部長に連絡が取れないのよ、と思っっている。

その時だった、看護師が小走りに走って来て、電話が入っていると、

節子が受付の電話ボックスに行つて電話を取ると、事務所にいる高木香保が出て、宮下さんから連絡があつて連絡を欲しいと言っている、と言う。依頼人の宮下一郎は、電話での連絡はこちらからは取れない。いつもメールだけのやり取りなので、横浜を出る時にメールを流しておいたのだが、節子が病院内にいて電源を切っていた為、直接事務所に電話をしたらしい。

高木香保は連絡先の電話番号を、節子に教えた。

「判ったわ。すぐ電話をするけど、利谷さんからの連絡はまだない？」

「ない、と言つ。」

節子はその場で宮下と連絡を取るべく、言われた通りの電話番号を押した。都内だった。

「はい、セリーナです」

「もしもし、あのう、宮下さんお見えですか？」

「はい、宮下さんですね。少々お待ち下さい」

喫茶店か何かであろう、受け答えがあっさりしている。しばらくして、宮下が出た。

「もしもし、宮下です。えっと、何か大変なことが起きたとか……？」

「そうなんです。うちの調査員が大変なんです。すぐにもお会い出来ませんか？」

「……どういふ事なんです？」

「それが……詳しくはまだ判りませんが、昨夜、うちの調査員が榎社長のボディガードマンにやられたらしくて……」

節子はそう言っつて石黒の容態と経緯を大雑把に述べ、病院の名前を告げた。

それは大変な事になった、と宮下は言い

「すぐに伺いましょう」

だから病院で待っているようにと、節子に言った。

節子は依頼人と連絡が付いた事です少し「ほっ」として、ついでにその場で利谷の携帯に連絡を入れた。

利谷はすぐに出て、節ちゃんは連絡がつきにくいなあ、と言った。

もう、バカ

利谷はアクアラインの海の下だから、後四十分もすれば病院に着くという。

全てが順調に進み、歯車が回転し始めたようであった。

心の負担が順序に軽くなつていくのを、節子は感じていた。加害者を除く関係者全員が集まれば、いい知恵も出ようし、対策も容易のはずだった。

けれど節子は、帰りの車の中で利谷に言われなければならなかった。

「クライアントの住所くらいは把握しておけよ」

節子はションボリしている。

八時間待って、夜の十時になったのだが、宮下一郎は勝野外科病院

に つい に 現 れ な っ た の で あ る 。

二人を乗せたクレストはアクアラインを走っている。背の高い道路灯が一直線に東京湾の沖へ向かって連なっている。奥にある光の固まりはサービスエリアの「海ほたる」だろう。右手遠く、商船が浮かんでおり、その向こうに東京の夜景が広がっている。

節子は、マーちゃんだって判っている事といえば、車で競馬新聞を読んでいたら追突されて、慌てて外に出たら殴られた、という事だけだ、と言った。

「・・・？」

利谷にもさっぱり訳が判らない。

それよりも、利谷は自分がした処置が正しかったかどうかを考える。現れなかった依頼者のために、ちよつとした齟齬が生じているのだ。利谷が病院に着いたのが二時前だった。そして一時間ほどして刑事が来た時には、利谷は既に方針を決定していて、石黒に嘘を言わせた。

尾行の事や宮下の事、つまり仕事に関する事には一切触れず、ただ単に車を止めていたら追突され、因縁をつけられて見知らぬ駐車場に連れ込まれ、殴られた、という事にした。

しかしそれは、宮下というクライアントに会って、善後策を練る為の時間稼ぎになるはずだったのだ。それが、宮下が現れなかった為、構想が崩れた。事態が、複雑化してしまっている。

助手席に座って溜息を吐き、時どき思い出したかのように

「ごめんねえ」

と、節子は誰にもなく呟いている。

節子に詳しく話を聞くと、宮下とは連絡が取れないのだ、と言う。

「だってさあ、二百万円の料金先払いでよ、経費分として別途、百万円分預かっているんだもの・・・」

毎日の連絡はメールでしており、電話は宮下一郎と名乗った男の方

から二日に一度の割でして来るだけ、という事になっているが、別段怪しいとも思わなかった、と言う。

利谷は、その宮下という男の容姿や特徴を節子に聞くと、痩せてた、と答えてから

「眼鏡を掛けてた」と言う。

眼鏡を掛けた男なんか

「うじゃうじゃ居るじゃねえか」

と言い返すと、節子は少し考える様子だったが、違う、と言う。

「あんな感じで、似合う」

そういう人間は余りいない、だからそれが特徴だと、わけの判らないことを言う。

「あれは冷たい、って言うのじゃないなあ。何かなあ・・・ヒアイって言うじゃない。あれって、そう言うもんじゃないのかなあ」

利谷は手掛かりを失った。

こうなれば千葉恒産社長、榎 圭次に自分が直接会う以外、方法はないだろう。そこからこの問題の突破口を見つけよう。

浮島インターを出て湾岸線を走っている。前方にベイブリッジが見えている。点滅を繰り返している飛行警告灯が、本来は華やかな彩りなのであるが、今の節子の目にはもの悲し気に映る。いつもの香水も消え失せていた。

「利ちゃん、今日疲れちゃったね」

「そうだな。また明日だな」

「ねえ、利ちゃん。近頃さあ、わたし独りで生きていく事に限界を感じてるみたい・・・」

節子はポツリと、独白のようにして呟いた。

翌朝十時、利谷は、追突されて警察に預けられている節子の会社の車を引き取るために、真田を連れて千葉東署に行った。刑事に一時間ほどいろんなことを聞かれた後、真田に、受け取った車を節子に

渡すよう頼み、別れた。

利谷は一人、クレストを駆ってそのまま千葉恒産へ向かった。大きなビルとビルの間挟まれた、敷地四十坪ほどの細長いビルが建っており、それが千葉恒産の本社ビルだという。土曜日だが、やっているようだ。

ここか

一棟置いた隣に、二階建ての駐車場が建っており、灰色のプレジデントが停まっているのが見える。石黒はあの車を見張っていたのであろう。

利谷はビルの中に入った。

受付で来意を告げたが、榎 圭次に会うことは出来なかった。面会はしない、と言うのである。

利谷はこっちが警察に内密にしている以上、主導権はこっちが持っていると思っていた。だから、石黒の怪我のことを匂わせ、相談があると言えばすぐに面会は出来ると思っていた。それが

「お引取り下さい。それが、社長よりの伝言です」

という受付の娘の言葉を聞いて

カアッ

と、頭に血が上った。

百五十名の訪販営業マンを束ねていた利谷である。

受付嬢の手元にある電話機を無言で取り上げ、コードを引きちぎり

「榎の部屋はどこだ？」

と、その錆のある声を一段と鎮めて言った。

受付に座っていた二十歳になるかならないかの細面の娘は、利谷の豹変に棒立ちになって、両手を口に当てたまま無言である。

「答える！」

利谷が迫ったその時だった。右前方の階段から三人の男が降りてくるのが見えた。

五年前の利谷ではない。この場で大立回りを演ずる阿保さ加減は抜けている。

腹の中で瞬時に計算をし、三人の男たちを睨め回して言った。

「ようし、榎に伝える。俺は利谷だ。これからはこの俺が相手だ」

「・・・」

「腹からズックリいくから、その覚悟で居ろ。いくときゃあ、いくぜ」

そう言つて身を翻し、ムウツとした熱気が充満する外界へ出てからベツ

と、唾を吐き棄て、後ろも振り向かず車に乗った。

興奮の余韻がまだ残った頭で、利谷は変だな、と考え事をしていた。今の三人は写真で見た三人とは違つようだ。石黒の言つ三人ともどこか違つ。

隠したな

石黒は三人組の特徴を利谷に話す時、その中心人物と見られる運転手の一人について、かなり詳細な事を言っているのである。

「身長は百九十センチを超えていて、相撲取りのような体格をしている。一目見れば必ず判ります。とにかく、額が狭くて頭が尖つた、三角形のおにぎりですから」 調査の時にたくさん写真に撮りましたから・・・」

先ほど利谷の前に現れた三人の中に、それと覚しき人物は見当たらなかつた。そうなると、利谷を追い払つた事実と考え合わせると答えは出る。

警察に行くなら行け、という事が

一体、千葉恒産とは如何なる会社なのか？

利谷は昨日の石黒の話を反芻してみた。石黒は私刑を受ける時、いろんなことを聞かれたといい、それを要約すれば次の五つになると言つた。

- 1、 どの誰なのか
- 2、 何故、榎を尾行するのか
- 3、 尾行して、何が判つたのか

4、誰かに頼まれたのか、そうならそいつの名は

5、脅迫状は、お前か

石黒はそれらの問いに、全て知らぬ存ぜぬで押し通し、その為にあのような仕打ちを受けることになったのである。

五番目の脅迫状は含蓄が深いが、しかしどちらにしろ石黒の言うことから千葉恒産の内実は判らない。

よし、こうなれば謄本を挙げるところから始めるか、そう利谷は思い、車を法務局へ向わせようと思ったのだが、土曜日であることを思い出した。

携帯で節子呼び出し、千葉恒産の謄本関係を問いただすと、事務所にあるから香保さんに聞いてと言い

「店長の車、まだ着かないわ」

と、真田のことを心配していた。

事務所に電話をいれ、高木香保に口頭で千葉恒産の履歴などを聞くと、どうやら千葉恒産は建築を主とする不動産と金融の会社らしかった。

土建屋か

そんなことまで知らなかったのである。

しかし履歴を聞くと、榎圭次は平成十五年九月に取締役から代表取締役になっているという。四年前のことである。

「・・・？」

それ以前の代表取締役は、田代耕一となっており、その人物は現在は役員欄に名前が記載されているという。

相談役にでもなったのか？

株の移動は謄本からは判らないが、この田代耕一をまずは訪ねてみようと思った。

抹消登録のため黒線が引かれた時の田代耕一の住所は、若葉区の黒砂台だという。

車で飛ばせば三・四十分であろう。

利谷はメモを取ってから、田代の家へ向かって車を走らせた。途中

にビルの工事現場があつたので、ここで五十センチほどの鉄パイプを一本手に入れ、助手席の足元に忍ばせた。

利谷は、自分を駆り立てているのが、石黒の怪我のせいでも不愉快な千葉恒産の対応のせいでもない事を、よく知っている。

そういうものが直接の契機であることは否定出来ないが、根底には一昨日夜、東京で会った野田社長の問題がある。

「現役に復帰しないか？」

今度はマンション販売をするという野田社長の要請は、利谷の内面の何かを、グラグラ揺するのだ。

別れ際に、専務のポストを用意して待っている、と野田社長は言った。

「考えさせてください……」

そう言つて別れたのだが、以来、地殻変動が起きたかのように、胸の中がフツフツとして、やり場のない怒りのようなものを抱えているのだ。

沈んだ表情をして車を走らせる利谷の回りを、小学生の子供たちが三々五々歩いている。

夏休みが始まつているのだ。

黒砂台の外れにある田代の家は、寄棟造りの本家普請の家であつた。敷地は裏山の雑木林の一角を含むと思われるが、三・四百坪の大きさである。

庭が広い。

利谷は人気のない団地の坂道沿いに車を止めた。ここからだ、田代の家の庭が見える。利谷は通行人を装い、田代の家の周りを歩いてみた。太陽が真上から照りつけるため、日陰がなく、暑い。汗だくになる。

庭の横から家の裏へと続く雑木林は、部分的に一メートルほどの擁壁が設けられているが、庭と渾然一体となつている部分の方がはるかに多い。全面道路に面した所は二メートルほどのブロック塀の上

に、スチール製の外柵が設けてあり、おまけに赤外線探知機が設置されている。

すごい警備だ。

それに比べて背後は、余りに無用心な感じがする。

どうなっている？

町の区画を大きく迂回して、裏庭から続く雑木林の反対側へ行くと、二メートルほどの擁壁の上に、更に五メートルほど、地肌のむき出した断崖になっている。

ほう、すげえな

これでは進入は無理だ。

利谷は車に戻り、エンジンを掛けエアコンを入れた。汗だくになっている。

しばらく体を冷やしてから、田代の家の玄関へ行き、インターホンのボタンを押した。

誰も出ない。

横の大きな駐車場には一台クラウンが置いてあるが、まだ二台ほどのスペースが空いている。

留守か？

雑木林から蝉の声がし、人気のない町は炎天下に茹だっている様に見える。

時計を見ると、二時四十分を指している。

利谷は、石黒を見舞いに行こうと思った。

昼食をどこかで済ませ、石黒のところへ行き、その後でもう一度ここへ来てみよう、そう思った。

利谷はのんびりそんな事を考えている。

事態が急迫しているのだが、利谷には判らない。

## 第1章 その4 出会い

その日、七月二十日の天気は午後三時を過ぎてから急激に崩れ始め、

四時には本格的な雨になった。七つ下がりの雨、である。

利谷は石黒の病室からその雨を眺めて、うつとうしい雨になった、と思っただけである。

節子から真田が車を届けてくれたという連絡があつて、そちらは順調のようだった。

沖合いに浮かぶアクアラインの人工島、海ほたるが雨に煙っている。まさか、この雨によって計画の頓挫をきたした人間たちがいて、そのトバッチリを自分が受けるとは、まだ夢想だにしていない。

六時に野田社長に連絡を取ったことを詫びる石黒を残し、勝野病院を後にした。雨のために、暗くなり始めている木更津の街を抜け、千葉若葉区区黒砂台に向かう。

途中ガソリンを入れ、七時四十五分、昼間と同じ坂道の上に車を止めてライトを消した。

雨が、降っている。

ワイパーが、規則正しく、フロント硝子を流れる水滴を取り除いている。駐車場には昼間と同じクラウンだけが止まっている。まだ帰宅していないようだ。

エアコンの音が、時どき強くなったりしている。

利谷の乗った車と、田代の家の玄関までの距離は六十メートルくらい。道の右側に街路灯が一本。

田代の家の庭と雑木林の間には三本の水銀灯が建っていて、青白色の光を放ち、雨脚が鈍くなっている空間を通して、百坪はあるであろう庭を照らしている。

その時、傘を差した一人の男が横道から出て来て田代の家の玄関へ行き、立ち止まりそんな気配を見せながら、通り過ぎ、右側の暗い道筋へと消えた。

「・・・？」

傘で顔は見えないが、ずい分大柄な男である。

男が去って、五分ほどしたであろうか、一台の外車、ジャガーが田代の家の前で止まり、後部座席から一人の男が降り立った。

小柄で、ユラツとしている。

男は傘もささず、車をそのままにして玄関の扉を開け、中へ入って行った。

扉が閉まる。

細かい雨が、降っている。

「・・・？」

見張っていたのだろうか、右側の道路から先ほどの大柄な男が現れ、ゆっくりとした足取りでジャガーに近づいて行く。

嫌な、胸騒ぎがする。

利谷は我知らず助手席の鉄パイプに手を伸ばし、膝に取り上げて握りしめた。

と、その時であった。

ジャガーの運転席から、大男が、大声を上げて飛び出して来たのである。

傘を差して立っている男と喧嘩になる、と、とつさに利谷は判断した。

ところが、ジャガーから飛び出した大男は、車に近づく大柄な男など眼中にないのか、小柄な男が消えた玄関の門扉に向かって、大声を張り上げ体当たりをし始めたのである。

二度三度と、鉄製の門扉に体当たりをしている。それを、五・六メートル離れた所から、傘をさした大柄な男が不思議そうに眺めている。

利谷は、鉄パイプを右手にしっかりと握りしめ、小雨の降りしきる車の外に出て歩き始めた。

野郎・・・

門扉に体当たりをしている男は、石黒の言う「オムスビ頭の相撲取り」なのである。間違いはない。

こんなところに隠れてやがって

オムスビ頭は体当たりが無駄なことを悟ったのか、後ずさりして周囲を窺い、ブロック塀によじ登り始めた。

利谷は顔面に当たる雨に目を細め、いつの間にか駆け足になった。この男の駆け足はここから始まる。

利谷は坂道を走りながら、オムスビ頭が庭に飛び降りるのを確認したが、オムスビ頭の死角になっている雑木林に向かって、田代の家の裏側から二人の人影が走るのを、奇異の思いを抱いて眺めた。

どうなっている？

頭の隅をそんな思いが横切るが、身体は下り坂を思いっきり走っている。

ビーッビーッ

警報音が静寂をつんざき、鳴り響き始めた。塀の上の赤外線探知機のせいらしい。

すると、それまで部外者のように、そこで展開されている光景を見ていた大柄な男が、何を、どう思ったのか、弾かれたように傘を投げ捨て、ブロック塀をよじ登り始め、塀の向こう側へ飛び降りた。身のこなしが軽い。

「・・・？」

利谷は理由の判らないまま、とにかく駆けた。今更、立ち止まることなんか出来ない。心身ともに弾みがついてしまっているのだ。

ままよ

利谷は鉄パイプを背中へのベルトに差込み、ブロック塀に取り付いた。ビーッビーッ

警報音を遮るようにして、庭から怒号が聞こえる。

「貴様、だれだ！」

「どけ！」

利谷が、エイッと身体をブロック塀に預け、上の柵に手をかけて庭の中を眺めてみると、七・八メートル先の水銀灯の下で、オムスビ頭が大柄な男を投げ飛ばしたところであった。

投げ飛ばされた男も大きかったが、投げ飛ばしたオムスビ頭は、石黒が言う特徴をそっくり備えていて、自分が投げ飛ばした男に二次攻撃を加えるべく、突進する体制に移行している。

しかし、投げ飛ばされた男は、すでに身を翻すが如く立ち上がった。いた。

利谷が、おっ、と目を見張るほど身のこなしが鮮やかで、美しくさえ見える。

「どけ！」

と、立ち上がった男が叫ぶ。

オムスビ頭は突進体制のまま吠える。

「貴様あ、何をした！」

利谷は声もなく外柵をまたいだ。

その時、先ほど雑木林に向かった人影が、何か事情が発生したのか、引き返して来て、今度は玄関に向かつて走って行く。人影は、二人の男だった。

その動きを目の隅に入れながら、利谷は庭に飛び降り、オムスビ頭めがけて走った。そして背中から鉄パイプを引き抜き、無言でオムスビ頭の顔を狙って振り下ろした。

ガスツとも、ゴギツとも聞こえるような、異様な音がする。

オムスビ頭の大男は、腹から搾り出すような声を張り上げて、後ろへもんどり打って倒れた。倒れざまにごろりと転がって四つんばいになり、泥の付いた左手で顔面を押さえると、血がポトポト手の甲を伝って地面に滴る。

野郎！

利谷に容赦はない。

この男は、やる時にはやる、という「絶対の哲学」を持っている男なのだ。

しゃがみ込んでいるオムスビ頭の背中へ、二度鉄パイプをぶちかました後、悲鳴を上げること忘れて唸りながら、命終の蛇のようになつて泥の中をのたうち回るオムスビ頭の、腰とはいわず脚とはいわず、十数回は鉄パイプを振り下ろした。

下半身くらいはカタワになるかも知れん。あるいは死ぬ事もあるだろう。そうならお前も俺も運が悪かった。それだけの事だ。

そう思っている。

背後で何やら女の悲鳴がするのを機に、打ち据えるのを止めて、肩で激しく息をしながら辺りを見回した。雨が降っている。

ビーッビーッと、相変わらず警報音が鳴り響いている。

そして、誰もいなくなっている。

逃げる

利谷はいつの間にか開け放たれている玄関の門扉に向かって走った。門扉を出て車に向かおうとすると、道路脇に、先ほどオムスビ頭に投げ飛ばされた男が、ズタズタに裂かれたワイシャツ姿のまま泥にまみれて立っていた。ネクタイがひん曲がっている。

小雨の降りしきる中、左手に続く道の彼方の闇を、呆然と見つめて立っている。

何だ、この男は？

利谷は無視して走り過ぎようとした。

が、雨に打たれて立ち尽くすその男の、こつこつという場面にそぐわない、何ともいえぬ寂寥感が利谷の心を打った。

「・・・おい、こつちだ。捕まるぞ」

と、利谷は声をかけ、目で合図を送った。

男は、はっと我に返ったようであった。

そして、今度は利谷の後を追うように連れ立ち、車に向かって走りかけた。が、二・三メートル走って、急に男は立ち止まり、反対に後方へ引き返した。

「・・・？」

利谷は無視して車に向かい、走った。

道路上に、近くの住人なのであるうか、二人三人、こちらを見ている人影が見える。

走りながら利谷が、引き返した男を肩越しに見ると、男はブロック塀の上の外柵をワイシャツで拭っている。

指紋・・・か？

利谷は車に飛び込むや、ライトも点けず急発進し、フェンスから飛び降り、傘を拾ってこちらに走ってくる男の横に車を止めた。男が助手席に転がりこんで来る。  
又もや急発進。

田代の家のブロック塀に沿うように左にハンドルを切り、もう一度左に入る脇道にハンドルをとってからライトを点け、後は盲目滅法走った。

タイヤの軋みが響くー

激しい息遣いがするだけで、二人の男は互いに何も言わない。

二人とも、顔には雨なのか汗なのか、水滴が流れている。

五・六分もして住宅街を抜け、商店街に入る頃、遠くパトカーのサイレンが聞こえた。

車の列に割り込みながら

「おい、そのワイシャツ脱げよ。目立つぜ」

と、利谷は言った。まだまだ息が荒い。

「ああ、すまない」

男は水滴を手で拭っている。

「・・・後ろの紙バツクの中にジャケットがあるだろう。それと、バスタオルがある。お前、身体中泥だらけだぞ・・・それからダッシュボードに絆創膏が入っているはずだ。眉毛のところから血が出てるぜ。・・・おい、バスタオルは俺が先だ」

男は無言で利谷に指示に従っている。

大柄な体格の割には機敏な動作だったが、車に入ってからはずんずんしている。ワイシャツを脱いで、ジャケットを羽織る時も幾度か着直した。石黒のやつなので、窮屈そうである。

「・・・小さいのは我慢しな」

「ああ・・・」

街中の人混みとネオンが、やたら暖かく懐かしく感じる。

前方からサイレンを鳴らして救急車が走ってきた。

二人とも、何も言わない。

やり過ぎしてから、利谷は言った。

「大丈夫か？」

「ああ・・・」

「お前、ああばかりじゃなく、何か言えよ」

「ああ・・・そうですね・・・ありがとう」

「ふむ」

互いに相手を量るようになっている、口数の少ない二人の男を乗せ、車は国道十六号線に出て、東関東自動車道の千葉北インターへ向かう。

こんな場合、利谷はアクアラインのように、自由が利かない道路を走る気はない。九時少し前であるが、雨のためなのか混雑が激しい。途中、節子から携帯に何時に帰るのかという問い合わせがあり、利谷はそれを機にコンビに車を止めて缶コーヒーを買ってきた。

男に渡ししながら、車を発進させ、利谷は聞いた。

「弁当持ちか？」

助手席の男は驚いたのか、横を振り向いて運転している利谷の顔を見た。利谷は続ける。

「指紋を拭いてくれて、ありがとうよ」

利谷は相手の動揺を確かめ、凶星か、と思っている。

弁当持ち、つまり、執行猶予中、あるいは仮釈放中かと聞いたのだが、その隠語に反応を示すということは、その通りという事なのである。

「名前は？」

「・・・」

男は少し考える様子であったが、何も言わない。

「言いたくないってか？」

「いや、そういう訳でもないんだが・・・」

男はそう言っつて、コーヒーを一口飲んだ。

「お前、はつきりしねえ男だなあ」

「いや・・・ちよっと考え事があるって・・・まとまらなくて・・・」

前方に千葉北インターが見えてきた。

利谷は自分が拾って来たこの又ボーツとした男を、どうしたものかと考えている。  
後悔していた。

このまま別れるか

おにぎり頭と闘った時の動作は、驚くほど俊敏だったが、それだけの男のようだ。口ぶりからしても、頭がよさそうにも見えない。こんな、図体だけが大きい男は、足手まといになる。買いかぶり過ぎたようだ。このまま別れても、自分の足が付くような事にはならな  
いだらう。お互い、名前なんか知らない方がいい。

「お前、どこで降りる」

「・・・どこでも良い・・・けれど、しかし・・・」

「ふん。 雨降りの道路端では嫌か」

インターに入ると横浜まで行かなくてはならない。その前に降るそう。しかし、釘だけは刺しておかなければならない。

「もう少し行ったら、お前には降りてもらおう。しかし、さっき現場で見た事は誰にも言うな。お互い、その方が良さそうだから。判  
つてるだらう」

利谷がそう言う

「・・・そうですね・・・」

と、相変わらずの優柔不断振りを示しながら、男は大きく息を吸った。そして

「二人だけの胸に納めておく、という考えには賛成です」

と、今度はいやに明瞭に言うてから、考え事がまとまったのか一点を凝視するようにして、不意に

「利谷さん」

と呼びかけた。

「・・・えっ！」

利谷は、危うくブレーキを踏みそうになった。

「しかしね、利谷さん、私たちはこのまま簡単に別れる訳にはいかないんじゃないかな。少なくとも後二・三時間は一緒にいなくてはいけないと思う。先ほどの現場での出来事の意味が、あなたにも私にも、まだ判っていない面がある。」

家の中で何があったのかー？ ひよつとすると警察が本格的に動くような出来事があったかも知れない・・・そうでなければ良いんだがー」

利谷は、隣の男の横顔をまじまじと見た。

「もし警察が本格的に動くなら、二人で協力しなくてはいけない事が沢山出て来るかも知れない」

利谷の驚きと、その視線を能面のように受け止めて、男は静かに言った。

「私の名前は、有本です」

青いメガホン（前書き）

利谷と省二郎は不思議な形であったのだが・・・

## 青いメガホン

### 第2章 青いメガホン

#### 第2章 その1 奈美江

有本省二郎が何故、田代耕一郎に現れたのか、それを知るためには柏木奈美江が昨日、すなわち十九日夜、帰りがけのフルーツショップでスイカを買うところから話を始めた方がよさそうである。

奈美江がJR総武線の本八幡駅北口を出て、パティオの前を通り、右折してそのまま斜めに商店街を歩いて行くと、フルーツショップ「フジ」の親父に声を掛けられた。

「奥さん、いいスイカ入ってるよ」

奈美江は自分の生家が三浦半島の高円坊の農家だった事もあって、子供の頃から、夏にはスイカと決めている。わけでもないのだが、スイカが好きで帰りに「フジ」でよくスイカを買った。

奥さんと呼ばれると面映いけど、店主に誘われるまま奈美江はスイカを買った。そして店内から通りに出ると、自分を見ている男がいる。目が合った。

「・・・」

雑踏の中に有本省二郎が立っていて、奈美江に向かって深深と頭を下げている。

十九日の夕刻、六時半近くの事であった。

省二郎は今日を遡ること四日前の十六日、勤め先の星野電機を早退し、千葉恒産社長・榎圭次を訪ねた。

千葉恒産が省二郎の前に立ち現れたのは、成田市にある巽ヶ丘の調査をしている時だった。

省二郎は星野電機に勤める傍ら、ゆっくりと西岡たちの影を追った。

具体的には土日を利用して図書館へ行き、自分の事件は勿論、佐橋から聞いた宮古事件、姫路における白壁の放火、そして洞貝と金森に関する事件等、とにかく西岡に繋がる可能性のある事柄を、当時の新聞、雑誌、活字になつてゐるものを片っ端から調べた。

氣になつてゐた荒川区のコンクリート詰め死体遺棄事件はその二年後に、田所新二の自首と言つて結末を迎えていた。

そのように事実関係を把握する事、それに重点を置いたのだ。ネットの調査では、限界がある。

その点、図書館は使い方では最高の情報の宝庫である。

調べれば、事件の起きた地方の新聞には、佐橋が言つてゐた事を裏書するような事が書かれている。

過去において、事件はそれぞれの性格を持つて、確かに発生してゐたのだ。

省二郎が知りたいもの。それは、個々ばらばらに発生した事件が、必ず収斂される何か、それが事件なのか何か判らないが、必ず何かがある筈なのである。

そこに、白壁と西岡、そしてもう一人の男が立っている筈なのだ。

省二郎が図書館などを使って粗方な確認を済ませた後、次にやらなくてはならない事が六つ残つた。

1、 狛江の「すし鉄」の親父に会うこと

理由 自分を見たという親父の証言によつて自分の全ての証言は虚構と見なされたから

2、 行方不明になつてゐる洞貝の妻に会うこと

理由 洞貝の行方を知つてゐるかも知れないし、洞貝は西岡を知つてゐる可能性が高い

3、 出所してゐるであろう、金森に会うこと

理由 2に同じ。ただし、佐橋刑事には知らないと言つてゐるが・

4、 成田市の巽ヶ丘を調べること

理由 白壁が理香と一緒にいる前、浅井という名を名乗っていた時、巽ヶ丘のパンフレットや謄本を持っていたと言っから

5、 白壁夫婦の最後の住居である名古屋の「波寄荘」と勤め先である「金龍」へ行くこと

理由 名古屋以後の二人の移転先に関して、何らかの示唆するものがある可能性があるから

6、 明子の実家、及び典子に会うこと

理由 明子こそ、全ての鍵を握る人物の可能性が高いから

以上六項目であるが、省二郎はまず巽ヶ丘の造成地から調べる事にした。何故なら、他の五項目と違って人間が出てこないし、事件の核心から一番遠そうに見えたからである。

本当はこういう場合、何が何でも核心を突かなければならないのだが、省二郎は出所してまだ四ヶ月、監獄ボケが治っていないのだ。

だから、外堀を埋める要領で、ゆっくり西岡に接近する心算なのである。

しかし考えても見よ、姫路の街の炎に哭いた白壁が、一年余の後、億単位の金と巽ヶ丘のパンフレットを持って東京に姿を現したのだ。何かある、と思わねばならない。

巽ヶ丘は、成田市東部に拓いた新興住宅地であるが、調べた限りでは開発に関して事件も何も無い。白壁が巽ヶ丘に関心を持っていた時期は、平成十年から十一年にかけてである。となれば、山林を造成している最中のはずである。

省二郎は千葉県庁の土木課に保管されている、開発登録簿を閲覧した。

開発主体が「株式会社千葉恒産」となっていた。

そこで、ついでだと思い、その帰りに千葉恒産本社に立ち寄り、社長、榎 圭次に面会を求めたのである。

手ぶらではない。雑誌などからコピーした白壁と西岡の写真を添え

てである。軽い気持ちだった。

受付の細面の娘が内線電話をしてから五分もすると、秘書と名乗る三十歳前半の神経質そうな女性が現れ、省二郎から写真を受け取って「しばらくお待ち下さい」

と、硬い口調で半分も言ったか、言わないかのうちに、写真を見つめ

「浅井さん・・・！」

と、省二郎にも聞き取れるような声を出し、改めて省二郎を見直し「・・・ちよつとお待ち下さい」

と言つて、駆け足でエレベーターへ消えた。

省二郎は、うろたえた。うろたえた、どころか逃げ出したくなった。無防備のまま敵の真つ只中に飛び込んでしまったような、後悔とも焦燥とも付かない念に駆られた。まさかこんなところで、いとも簡単に浅井の名を聞くなどと、夢想だにしていなかったのだ。

しかし、省二郎は長い間待たされた挙句、社長はこの方を存じておりませんので、という断り文句で追い払われたのであった。

省二郎は帰る間際に、受付の娘に秘書の名前を聞いた。

「柏木奈美江さんです」

それから三日間、省二郎は迷いに迷った末、十九日の夕方、退社する柏木奈美江の後を尾行、本八幡の八百屋・・・看板はフルーツシヨップであるが、でスイカを買って出て来た彼女の前に立ち、頭を下げたのである。

奈美江は当たり前だが、非常に迷惑そうにしていた。

しかし、省二郎が二度三度頭を下げ

「プライベートな事なんです。僕はどうしても彼の事を知らなければならぬ、義務があるんです。お願いします」

と、言うと、クスツと笑つて言った。

「義務なんですか？」

そして省二郎がお茶でもと言うと、仕方ないわね、と言って通りの二階にある殺風景な喫茶店に案内した。

奈美江はソバージュにした黒髪を、時どき両手でぼんぼん叩きながら、話をした。

「私では駄目よ」

私はスケジュール秘書だからと、奈美江は二度三度言って笑ったが、それでも省二郎は本当に有難かった。

奈美江は自分で言う通り、余り会社の実態は知らないようだったが、自分の会社の事を「強姦会社」と、突き放して言う位の認識は持っていた。

十年ほど前までは、子会社を作っては倒産させていたのだと言い、当時はね

「私も若かったのよね」

それが悪の華である事が判らなかつたのだと言う。

「榎 社長になつてずい分落ち着いたみたいね。だけど私も、今度ボーナスもらつたら辞める心算」

そんな事を話していて、アイスティーのストローを口にくわえ、省二郎の顔を盗み見るようにして言った。

「浅井さんて、敵ながら天晴れだと思つたわ。・・・彼つて、凄い人よ」

奈美江の言うところの「凄い人」の起こした事件、というものを、次に要約してみよう。

平成十年六月、梅雨の晴れ間の紫陽花がきれいな日であつたという一人の男が当時の社長、田代耕一に会いに来た。当然アポイントを取つてからの面会であり、奈美江の記憶では東京の不動産屋の紹介であつたと言う。

男は、浅井修一と名乗り、現在、成田市巽ヶ丘で造成中の区画の五

分の一、三千坪ほどを購入したい、という申し出であった。

日本経済がバブルの底を打ち、ようやく立ち直りを見せていた頃の事である。現状有姿で坪十七万円、整地済みなら坪三十万円前後といえ、ごく普通の単価といえた。

その土地を、三千坪である。

坪二十五万円で計算しても七億を超える。

浅井は当該物件に銀行の抵当権が付いていることを知っており、整地が終わるまではそれに加筆するだけで良い、という、間の抜けたような条件で購入を希望した。

ただし、当面は予約の仮登記であり、浅井方は頭金として二十％を支払った。当然、資金証明を添付している。

都市計画法第四十一条は、開発行為の青田売りに関する前渡金の保全措置を細かく規定している条項であるが、これと別途のところ、公正証書を根拠にした裁判所の判決をもらい、差し押さえをしまう。

単純な訴訟詐欺である。といって、これを実行するにはまとまった資金と、準備と、姿を消さなければならぬ人間が最低一人はいるいや、二人と言ったほうがいい。そして何よりも、度胸がなければ出来ない。

奈美江は、続ける。

「完璧に内の社長の負けね。気が付いたら頭金の二億円が残っただけで、三千坪の土地が塩付け。解除に四億円も使ったのよ」

「浅井は一人でやったんだろうか・・・？」

「一人？ それは無理でしょう。ただ、うちの会社に来る時はいつも一人だったわ。それにね、田代会長・・・当時は社長だったけど、その社長が言っていたもの、あいつ俺に返ししやがったって

ー」

店内は若者の溜り場になっているのか、いつの間にか甲高い嬌声が

あがったり、ゲーム機の電子音がしている。

「あいつが、仕返し……」

省二郎の胸に響く、何かがあった。省二郎はテーブルの上に西岡と写真を出して聞いた。

「この人に記憶は？」

奈美江は頭を横に振った。

「田代さんを恨んでいる人は居るの？」

と、省二郎が訊くと、奈美江は身体をのけ反らしせ、口を押さえて笑い

「居すぎるわよ」

と言った。

「あなた、何も判っていないのね。私、あなたの事、好きになりそう」

「茶化すなよ」

「ううん、本当よ。会社に現れてあんな事をして、今度は私の前に突然現れて……怖いものなしなんだから……」

「……」

「私はともかく、会社にあんな形で来て無事に帰れただけでも、あなたは幸運だわ」

「……」

「あそこはね、ややこしい人がいつも二階に詰めてるの。フロント企業なのよ。」

そこへ浅井さんの写真だもの……それにね」

榎社長は、二週間ほど前からピリピリしている、という。

「だってね、脅迫状が届いたらしいのよ」

それ自体は珍しい事でもないのだが、どうもその内容が

「特定の人しか知らない事が書いてあったみたいね」

それに続けて

「社長を尾行してる人が居てね。誰だか判ないけど、二階のメンバーの話し振りでは、あなたが来た前の日に、きつと痛い目に合っ

たんじやないかな」

だからそれ以上のゴタゴタを避けるために

「あの時あなたは無事だったわけ。判った？」

と、奈美江は長々とやって、喋りすぎている自分に嫌悪を感じているのか、もう出ましようかと、辺りを見回した。

実際、奈美江は自分で自分が不思議でならない。どちらかと言えば、自分は無口なほうだし、初対面に人間に「実は・・・」などと知つたか振りをするような悪趣味は持ち合わせていない。対座しているこの男にしても、質問はしても強制さは全くない。

どうかしているな

奈美江が自問していると

「いや、もう少し聞きたい事があるんだ。田代さんを恨んでいた人の中に、金縁の眼鏡を掛けた人は居なかつただろうか？・・・古い話だと思っけど・・・」

「金縁眼鏡　？・・・さあ？」

と、奈美江は考えている。

「自殺した人だって三・四人いるのよ。その中に眼鏡を掛けた人も居たかも知れないけど、覚えていないなあ。それにね、ほとんど会社の倒産に絡んでいるわけだし、倒産したのは子会社だからねえ・・・とても間接的なんだもの・・・」

と、そこまで喋ってから、ずい分長い間を置いて

「・・・山崎さんの事かな」

と言った。

奈美江は、山崎という人が千葉恒産とどういう関係か知らない、と言った。

眼鏡にしても、金縁かどうか知らない。だって会った事もないし、自分の入社以前の事だしね、と言った。

「だけど田代社長がね、ダンプカーで寝込みを襲われて、猟銃で乱射された事があるらしいの。私が入社した年だから十三年前のこと

よー。その時、田代社長は背中に散弾を二・三発打ち込まれてね、十日くらい入院したんだってー」

自分が入社する三ヶ月ほど前のことで、まだ事件が会社にも生じなかった。

「その時、何かの折に、山崎と言う名が出てたのよねー」

あの眼鏡野郎って、そう言っていた記憶があると言う。

猟銃・・・

確信は、段々と鮮明な形を整えていく。

「だけど、山崎という人がどういう人か、今から調べるのは難しいのじゃないかな？ だって事件は迷宮入りですもんね」

結局、どうしても山崎某の事が知りたいのなら、現在の田代会長を直接訪ねて会う以外ない、という奈美江の意見であった。

奈美江は

「明日は土曜日だけど、会社はあんのよ。だからそうねえ、二時か三時には会長の住所を調べて、電話してあげるわ」

と言ってから、やはり今日の自分はどうかしている、と思った。

本来自分は排他的で、攻撃精神に富んでいる。だから今日まで、あんな会社の、飾り物とはいえ秘書を勤めることが出来たのだ。それが・・・

いけない

奈美江は、この有本という不躰な男に危険なものを感じた。

怖いとか、危害が加わるとかではなく、引きずり込まれてしまう自分を感ずるのである。女が、何とかしてあげたくなるような、そんな切ないような雰囲気を持っているのだ。

## 第2章 その2 赤松たち

約束どおり奈美江から電話があったのは、翌二十日の土曜日、三時前であった。携帯の番号は教えなくなかったので、部屋の固定電話にかかってきたのだ。

その日省二郎は、いつものように茅ヶ崎海岸で早朝のジョギングを行い、その後は上場関係の規則集を読んで過した。

星野電機は来年後半、上場をする。

省二郎はそれが自分の直接の仕事ではなかったが、経理一課がそれを軸にして動くことを見越し、自分なりに予習でもあり復習でもある勉強をしているのである。

ただ上場の手続きを再確認しているのではない。上場に当たっての星野一族の資産の切り離しと、その運営会社のタックスヘイブン先そして十数社ある子会社の再編成と資本の移動を金融工学的に処理しなければならぬのだ。

全てが闇の監獄で、ひとつの灯りを求めるように、勉強だけは続けた。

今、それが活きている。

主要各国の税務体系や会計処理などはほとんど頭に入っている。

しかし、奈美江の電話がある三時間ほど前に、会社の同僚である高科美佐子と鈴村ひとみを連れて、上役である藤木三郎と赤松剛が訪ねてきた。

同僚、上役といってもこのメンバーは全員が独身で、藤木だけが省二郎より二つ年上の三十四歳で、後はみんな二十歳代である。

ゴルフに行っていたのだが、あまりの暑さにハーフで切り上げ、帰る途中、近くを通りかかったので、という理由であった。同じ独身という気安さでここへ来たのであろう。

省二郎は今、国道百三十四号線から一本裏に入った「ラフィナス湘南」という賃貸マンションの二階に住んでいる。隣の家の大屋根越しに防砂林である松林があり、その向こうに湘南の海が見える。借りる時、万が一にも西岡が現れた場合、襲われるのに都合がいいと思っこの部屋を借りた。省二郎としては襲われたいのである。

入室などのセキュリティは問題がないが、隣の家の大屋根がベラ

ンダの下に来ているのだ。しかし、襲われるのに都合が良いとは、逃げるにも都合が良いわけだが、省二郎は省二郎でその辺りは計算していた。

その二LDKの部屋に四人で押しかけて来て、昼食に行こうと誘われた。

「赤松さんがパスタの美味しいお店を見つけたんですってー」

「いやあ、部屋を空けられないんだ」

「誰か来るの？」

「誰も来ないけど・・・」

じゃあここで食事をしよう、という事になり赤松が弁当を買いに行つた。

省二郎は机の上に広げてあつた上場関係の書籍などを素早く片付け、冷蔵庫からコーラを持ってこようとすると、鈴村ひとみか

「私がやりませす」

と、明るい声を上げた。

その間、残る二人は窓辺で海を見ながら何かを話しているようであったが、藤木三郎の方は二つの書庫にビッシリ並んでいる本が気になるのか、時どき視線が横にずれた。本と言っても会計の本ばかりであり、それも英文の本が半分近くを占めている。

二十分もして赤松と鈴村が帰って来てから、五人で弁当を食べたが、五人分の椅子がないため十畳の部屋で車座になって食べた。

「遠足みたいね」

と、鈴村ひとみかはしゃいだ声で言ったりした。

そして食べ終わるや、四人とも

「おじゃまさまあ」

と言ひ残して、来た時と同じように賑やかに帰って行つた。

省二郎は、まぶしかった。

素直で、明るい生活がある

その後は本を読む意欲も萎えて、ベッドに横になり、どんよりと張り出し始めた雨雲を見ていた。

うとうとしていると、電話が鳴り、それが奈美江だった。

奈美江は田代の住所を教えた後

「あなたの知りたがっている浅井さんとは関係ないかも知れないけど、今日ね、利谷っていう人が来たわよ」

「トシタニー？」

「何でも、怪我をした人の事で来たって言うんだけど、それを社長が追い払ったわけ。そしたら栗原さん、受付の娘だけど、その娘が言うにはよ、会社のガードマンたちに、俺は利谷だって凄んだんですってー」

「俺は利谷だー？」

「ええ、それがね、それだけの事で会社の連中ったら、震え上がったらしいのよ。見ものだったってー」

「そう・・・」

「有本さん」

「え？」

「あなたには、もう会う事も話す事もないでしょうけど、頑張んなさい。あなた、素敵よ」

「・・・？」

## 第2章 その3 雨

省二郎はポツリポツリと降り出した雨の中を、奈美江に聞いた千葉黒砂台に向かった。

千葉駅でお茶を飲んで時間を潰し、タクシーに乗って田代の家に着いたのは六時半近くである。

辺りはすでに暗く、雨が降り出していた。

省二郎はインターホンを押した。返答がない。

左上方に監視カメラが備えてある。

玄関の灯りも点いているし、庭の水銀灯も点いている。

玄関の門扉を透かし、家の引き戸の奥にも明かりが垣間見える。

「・・・？」

駐車場にクラウンが止まっているが、まだスペースが二台ほど空いているところを見れば、まだ帰宅していないのだろうか？

あるいは返事がないところを見れば、家族全員が外出しているのか？省二郎は雨の中、田代の家の周りを歩いてみる事にした。

ずい分歩いて、裏山の崖も見た。

一時間近く経ったが、まだ誰も帰ってこない。

往ったり来たりしていると、玄関前にジャガーが止まり人の降りるのが見えた。玄関に入って行く。

どう言つて声を掛けたいのかと、思案しながらジャガーのそばに近寄った。

雨が降っている。

「ビイイ・・・ビイイ」という鈍い音響がジャガーの中から聞こえた、と思うやジャガーのドアが突然開き、大男が飛び出して来て奇声を発し、玄関の門扉に体当たりをし始めたのである。

省二郎は余りに突然の事なので、何がどうなっているのか、さっぱり判らなかつた。道端で突然犬に吠えかけられたような、驚きがあるだけだ。

見ていると、門扉に体当たりしていた大男が、門扉を破壊するのは諦めたのか、門扉に続くブロック塀によじ登って向こう側へと消えた。省二郎は大男のその後の様子を見ようと、何気なく門扉を透かして庭へ視線を移した。

「・・・！」

大男の背後遠く、二人の人間の影が、雑木林に向かって走っている。と、

ビーツビーツ

警報音が辺りに響き始めた。

逃げよう

仮釈放の身だ。下手をしたら、また刑務所だ。

しかし、省二郎の身体は傘を放り出して、意識とは反対にブロック

塀に突進した。

間違いはない。水銀灯に照らし出された二つの影は、西岡と眼鏡だ！塀をよじ登り、ステンレスの外柵を跨ぎ、庭に飛び降りた。そして雑木林に向かつて走ろうとすると、大男が行く手を遮り怒鳴った。

「貴様かあ！」

「知らん。どけ！」

省二郎は大男など眼中にない。脇をすり抜けて雑木林に向かおうとした時、大男の左脚が腹に炸裂した。

「ウツ」

つんのめるようにして、横の馬酔木の茂みに倒れ込んだ。

泥が飛び散る。

左眉の辺りを木の枝で擦ったのか、痛い、という遠い意識があったが、それは後で思い出した事である。

省二郎は起き上がった、またも大男の脇を走り抜けようとした。

西岡を追わなければ・・・その事だけで身体中が熱くなっている。すると今度は、身体の重心が奇妙な動き方をした。

あれ、投げられてるのかな？

家が変な形に傾いて見える。

肩の辺りに衝撃が走る。

「オウツ」

省二郎は右手を軸にして起き上がり、大男と初めて向き合った。

「どけ！」

「貴様あ、何をした！」

大男が怒鳴り返した。

馬鹿野郎、そんな事知るか、と思っている省二郎の目に、大男の右後方を走る二人の影がある。

家の向こう側だ、遠い。

追わなければ、という思いと同時に、どうして戻って来たのだろう、という疑問が頭を掠める。

その時、誰かが対峙している大男の横へ走って来たと思うや、木刀

のような物を大男の顔面に振り下ろした。  
ギョオツ!

というような絶叫を発して大男が後ろへぶっ倒れるのを、チラッと横目で見て、省二郎は玄関へ向かって走った。西岡を追って、走った。

門扉が開いている。

誰もいない。

道路に飛び出すと、三叉路である。

たたらを踏んで立ち止まり、耳を澄ませたが「ピーッ」という警報音が断続的に鳴り響いているだけで、何も聞こえない。

後ろのほうで、この野郎、と、誰かが怒鳴っている。

「……!」

小雨が、降っている。

遅かったか……

道路の彼方には、彼等の姿はない。どこかの物陰か、横道か……  
何処かへ、消えてしまっている。

省二郎は、呆然と立ち尽くしている。

家の中から、今ごろになって女の助けを求める声がする。  
するとそこへ一人の男が後ろから走って来て

「おい、こっちだ!」

と言つて、ズタズタになっている省二郎のワイシャツを引っ張った。ハッと我に立ち返り、周りを見ると、近所の家から四・五人の人が出て来てこちらを見ている。窓から見ている人もいるようだ。

仮釈放、の三文字が頭を横切る。

緻密な計算も、大胆な行動も、今は何の役にもたたない。ただ、その場その場の瞬時の判断があるのみだ。

逃げなければ!

省二郎はわけも判らないまま、先を走る男に続いて走り始めたが、あっと気がついた。

インターホンにも外柵にも指紋が付いている。監視カメラはどうす

る？傘はどこだ？

やれるだけの事はやって、現場を離脱しなければならない。

急げ！

監視カメラを始末するのは諦めたが、後は全部片付け、男が遠く車に乗るのを見ながら、その車めがけて、雨の中を省二郎は走った。

## 断章 調書

昨日、平成十九年七月二十一日午後十時半ごろ、私、神成栄子と主人である神成茂雄とで、自宅の一階居間でテレビを見ておりましたところ庭で物音がしたような気がしましたので、私が窓から見てみました。雨が降っているだけで何事ありませんでした。その時は主人は猫ではないかと言っていました。

夕方七時過ぎから主人と二人で夕食をとりましたが、アルコール類は主人と二人でビールを一本空け、私はコップに一杯飲んだだけです。

私たちはその前、午後の三時二十分からエアコンを入れた居間でテレビをつけていました。その為なのか救急車やパトカーのサイレンは一度も聞こえませんでした。

テレビを見ておりましたが、十一時まではニュースを見なかったの。で私の家の近くで強盗事件が起きた事は知りませんでした。その時は庭の物音の事もすっかり忘れていて、主人が先に風呂に入り、続けて私が入りました。

十二時少し前に、主人と二人で二階の寝室へ行き電気を消して寝ましたが、十分もするとまた庭で物音がしました。

注意しないと聞こえないような音でしたが、何かが唸っているような感じの音でした。それが、二分間隔くらいで聞こえたり聞こえなかつたりしました。主人は眠っていましたので起こしたのですが、寝入りばなで怒って「気になるならお前が見て来い」と言います。

私は怖かったです。電気を点けないようにして階段を下り、台所

へ行つて窓を五センチくらい開けました。

そこからですと居間から見ると違って、斜めから庭を見ることになりませんがそうやって見てみますと、庭の南西の椿と柘植の木との間に人間が二人いるのが判りました。道路にある街路灯のために逆光になり、影しか判りませんでした。間違ひなく二人の人間の形で動いていました。男か女かは判りません。年齢も判りません。しかし間違ひなく一人が屈んで、一人が横になっていました。

うめき声は動き方からして横になっている人間で、屈んでいる人間は背中か腕か判りませんが、さすっているような動き方でした。

見ていたのは二分くらいだったと思います。私はその後、物音を立てないようにして二階へ戻り、主人を起こして、二階から主人の携帯で警察に電話をしたのです。

警察が来る間に、主人がそつと見に行きましたが、その時、七月二十二日午前零時二十五分ころには姿がありませんでした。

平成十九年七月二十二日

千葉県若葉区黒砂台三丁目

××××

神成栄子 押印

## 第2章 その4 星野電機製作所

仕事をこなすとは、人間関係をこなす事でもある。

仕事の出来る人間は、必ず人の窺い知れないところで、上下の、あるいは同僚との人間関係を巧みに処理している。

辻課長は、有本が不思議な人間に見えて仕方がない。

仕事に関しては文句の付けようがないのだが、人付き合いが余り良いとはいえないのである。何を考えているのか、判らない時がある。だから、右のような理屈に従うなら、有本はみんなから白眼視され

るような型の男のはずだ。そもそも、入社の仕方からして嫌われる要素の多い男のはずなのである。

それなのに、どうした事なのだろう、有本は人望といえれば大げさだが、人気がある。

辻はある時、省二郎の教育係りである藤木に、有本はどうかと、漠然と聞いてみた。

藤木はしばらく考えてから、言った。

「私のほうが教育されているような気がしますね」

藤木三郎は辛口の男である。その彼からして、そうであった。どこで覚えたのか、会計にも精通しているという。

辻は考え込まざるを得ない。

それと言うのも、次のような人事の動きがあるからである。

先月末に決算が終わり、例年なら今頃の経理一課は少し気の緩んだところがあるのだが、今回はちよつと事情が違った。

来年末には東証上場を予定しており、経理一課十七名の中からリーダーを入れて四名の陣容で、準備チームを組むという、その人選が遅れているのである。

事が事だけに室賀常務を筆頭とした経理課の意向を尊重する、というのは表面上だけの事であろう。

会社上層部の意向もあるであろうが、オーナー社長である星野一族の資産に直接タッチする事になるため、星野社長の息子である星野常務からも人事課に要請が来ているという話である。

準備室メンバーは現社長の星野健太郎が室長になり、室賀常務がその補佐、辻課長がリーダーで後の三人を実働部隊とするのであるが、その実働部隊の人選が面倒だった。

しかし、室賀常務と辻を加えた二人の課長の協議の末、経理一課から推挙した三人のメンバーの内、内諾を得たのは高科美佐子と内田悟だけだった。残る一人は有本省二郎を当てるといふ、経営会議からの内々の報告であった。

高科美佐子は星野一族の縁者であり、アメリカ留学から帰国して企

業診断士の資格まで取得しているという経歴からしても外しようがなかった。すると、経理課の意向は二人の内一人だけという事になる。

辻は不愉快であった。

何の資格もない、経歴もはっきりしない、入社したてのそんな男が何故なんだ。

どうしても辻の、省二郎を見る目は険しくなる。

が、その有本省二郎が一仕事終えて、自分の前に立ち

「これで宜しいでしょうか？」

と、監査証跡の明細を示し、欠番管理ファイルの取り消し理由を手短かに話すと、その仕事の明晰さに惚れ惚れしてしまう辻であった。

有本省二郎に関してだけ辻は、そういう、右とも左ともつかない不透明な中にいる。

社内食堂での昼食を終え、省二郎は陽差しの強い構内グラウンドの楠木の木陰に歩いて行き、芝の上に座った。

今日はあれから四日経ち、すでに二十三日火曜日である。

青い芝がチクチクと気持ち良い。

グラウンドの向こうの社屋の陰で、五・六人がキャッチボールをし、その周りの木陰やベンチには、昼休みのひと時を過す社員が、あちらこちらと固まっている。

ふっと、千葉刑務所の昼休みを、痛い疼きと共に思い出す。

腕を枕にして仰向けになり、空を見た。

雲が流れている。

空ばかり見ていたなあ

出所して半年にもならないのに、遠い過去のような気がする。目をつぶると、遠くでキャッチボールの音がする。

利谷の方はどうなっているんだろう？

軽い焦燥感が湧いてくる。

会社に出社している場合か、攻撃に移らないと又、後手を踏む事になるんじゃないのか。

耳元で、誰かが自分の名前を呼んだ、ような気がする。

「……？」

「有本さん」

「……どうしたんだよ？」

いつのまに高科美佐子が隣に座っていた。

「寝てらしたんですか？ 何度か呼んだんですけど……」

「そう、いやあ悪かった」

省二郎は上半身を起き上がらせながら、美佐子に目を移した。

「辻課長さんがずい分と探していたみたいですよ」

「辻さんが……何だろうな」

「何って、課長さんに頼まれていたんでしょう？」

「連結決算の、固定資産のことかな」

「頼んだ事スツポカして何処へ行ったんだってー」

「コード別にして机の上に置いておいたんだけど、足りないものもあつたのかな？ バンコク工場の分は計算方法が違うんで、その事かな？」

「良いんですか？」

「良いって、何が？」

美佐子は癖なのか、クスツと笑い

「有本さんて、おかしな方ですね」

と言った。

そう言われれば、省二郎には苦笑する以外に方法はない。

そうかも知れない

あの空白の五年間が、自分の内面の何かを変えてしまい、漂白された部分が天性の性格のようになって残っているのだ。

美佐子は、何気なくそれを指摘しているのである。

「だって、課長が探してらっしゃるて言うのに、平然としているんですものー」

「そうでもないんだがなあ」

グラウンド寄りの、少し離れた所にあるメタセコイアの木から油蟬の鳴き声が聞こえる。

「どうかしたんですか？」

美佐子が、省二郎の左眉を見て言った。

「うん、ちよつとね」

左眉のところにバンドエイドが貼ってあるのだが、まさか、四日前の事を話すわけにもいかない。田代耕一が帰宅して強盗に出くわし、日本刀で刺されて重傷を負ったニュースが大きく報道された直後だ。あの影は、間違いなく西岡たちだった・・・

西岡たちがあの家にいたのなら、監視カメラで自分を認めたはずだが・・・その後、警察からも何も言っただけで来ないという事は、彼らがデータを持って行ったのか？ おそらく、そうであろう。

「・・・有本さん？」

「えっ何？」

「もう、嫌だあー」

「何が・・・？」

「何がって、私二回も有本さんの名前呼んだんですよ」

「・・・いつ？」

「今ですよ。目をどうかしたんですか？って聞いたら、ちよつとねって言っただけ、キヤッチボールばかり見ているんですもの」

「　　そうかな？」

「そうですよ」

そう美佐子は言っただけ、またクスツと笑った。

「泳ぎに行きますか？」

「泳ぎにー？」

「ええ、今度の土曜日にみんなで行くんです」

今度の土曜日に先日のゴルフメンバーに後三人加えて、サザンビーチに行くのだが、一緒に行かないかと言う。

省二郎が返答に窮していると

「美佐」

と、背後で美佐子を呼ぶ声がある。鈴村ひとみである。

「わあ、有本さんも一緒だ」

と言って、美佐子の隣に座ってから

「デートだった？」

と、おどけた調子で言った。

「ううん。今度の海水浴、一緒にどうですかって聞いていたのー」

「もち？」

「さあ、まだ返事は聞いていないから・・・」

美佐子が答えると、ひとみはヒョイと省二郎を見て

「有本さん、行きましようね」

と、歌うようにして言った。

省二郎は、返事はもう少し待って欲しいと言い

「まだ四・五日あるからー」

と言うと、ひとみは

「へええ・・・」

と、まじまじと省二郎を見返して、興味深そうに頷きながら

「信じられないじゃん」

と言った。

時計を見ると、十二時四十五分である。そこで、そろそろ事務所に

戻ろうかと思ひ、省二郎が立とうとすると

「有本さん」

とひとみが呼び止めて言った。

「藤木さんがこぼしていましたよ」

ひとみが言うには、省二郎の教育係りになっている藤木が、有本君から何の相談もないし、飲みに行こうか、と誘ってもいつも断られるばかりで、自分は指導係り失格かなあと、そんなことを言っていると言うのである。

「あ、そう」

と、省二郎が答えると、ひとみはケタケタと声を上げて笑い

「私、言ってあげたんですよ。有本さんに悪意なんてありませんよ」

「悪意？」

「藤木さんね、自分に相談がないから、嫌われたと思っているんですよ」

「判った。」

と省二郎は答えてから、自分は今それどころではないのだが、押さえるところだけは押さえておかないといけないなと思った。

「ありがとう」

省二郎がそう言うと、ひとみは被せるようにして言った。

「わあ、その笑顔、すっごく評判がいいんですよ」

## 第2章 その5 ナイター

その日、七月二十三日の火曜日の事であるが、省二郎は仕事が終わるや、その足で横浜に向かった。

茅ヶ崎から横浜の関内までは、JR線で三十分ほどである。

六時四十分過ぎに、利谷との待ち合わせ場所である横浜スタジアムのライト側入り口から入って、指定された外野席の場所に着いたが、利谷が見つからない。

指定席でもないこんな所で、この人混みの中で待ち合わせて相手が識別出来るのだろうか？

携帯で呼び出すと、ここだ、ここだと人混みの方を指定する。見ると、下方の中段の所に利谷が立って青いメガホンを振っている。

人混みをかき分けて利谷の所へ行くと、席が一つ確保してあった。

「座れよ」

「やあ」

「いい試合になりそうなんだが、どうも歩が悪い。今年の中日は強いぜ。森野の活躍が利いている。その点、わがベイスターズは寂しいね。またBクラスだな・・・おい、まだ聞いてなかったな、お前、

どこのファンなんだ？」

そう利谷は言って、隣の席の女性からビールを受け取り、それを省二郎に渡した。

照明が人工芝を炙り出すように浮かび上がらせ、鮮やかな緑が美しい。

スコアボードを見ると試合は三回の裏の途中で、ベイスターズが攻撃をしているようである。

「ジャイアンツに決まってるじゃない。・・・生まれる前からだ」「そんな顔だな」

と利谷は言って、隣の女性を振り返り、紹介しておこう、と続けた。「車の持ち主で、横井節子って言うんだ。美人だからって、手を出

すなよ。とりあえずは今、俺が交渉中なんだからな」

利谷はそんな風にして、淡いピンクの半袖ブラウスを着ている節子を紹介したあと、おもむろに

「警察が来たぜ」

と言った。

節子の所に警察が来た。

ある程度は予期した事である。とはいえ、動きが早い。あの騒動だ、住民の誰かが車のナンバーを控えていたのかも知れない。

省二郎は身の竦むような思いに駆られる。

「それで・・・」

と省二郎が話を促すと、利谷は

「大丈夫だ」

と答えた。

車のナンバーは特定されている訳ではない。部分的に判明しているだけのようだ。

しかし警察はしつこいであろう。二人の人間が重傷を負っており、間接的とはいえ、俺は利谷だと、千葉恒産で名前を吠えているのだ。しかも、省二郎は奈美江に電話番号まで教えている。

「心配はいらん。若しもの時でも、俺はお前の名前は出さん」と、利谷は言うが、個人の善意を超えて、何処でどんなとんでん返しがあるか、判ったものではない。

「さあ、どうするね。これから・・・」

と、利谷はセカンドの野中のプレーに声援を送りながら、他人事のように言うが、その思慮の前提を、少し話さなければならぬ。

あの日、省二郎は、事態がここまで来た以上、利谷という男に自分を賭けなければならぬものを感じ、差し障りない範囲で自分があそこに居た理由を話した。

そして、二人は利谷のホテルで、夜明け近くまで協議した。

利谷にしる省二郎にしる、どちらかといえば一匹狼のような立場である。しかし、お互いがお互いを必要とする場合があるかも知れない、という事では一致した。

テレビ、あるいは新聞での報道によると、二十日の土曜日、午前二時に田代耕一の家、裏山の雑木林の崖を登攀して強盗が侵入したというのである。ところが、強盗はそのまま家人三人を監禁し、同日午後八時まで、計十八時間に亘って同家に居続け、妾宅から帰宅した田代耕一を日本刀で刺し、家にあつた六百万円の現金を盗って逃走した。逃走を助けるため、仲間二人が車で迎えに来たが救出に失敗し、ばらばらで逃げた。という事になっている。しかも、崖の向こうの空き地には、別途、逃走用に用意したと思われる盗難車が二日後に発見されている。

そして逃走途中、取り押さえようとした田代の警備員の犬飼 蔵太を、手助けをしに来た仲間が庭で滅多打ちにした。という事にもなっている。

逃走後、三時間以上経過した後、庭に潜んでいるところを付近の住民に目撃された男二人がいるが、この正犯らしい二人の男もそこから更に逃走を繰り返し行方を絶った。

監禁されていた田代の妻、操によれば、犯人たち二人は金の話ばかり

りして、田代耕一に危害を加えるのが目的であったとは思えない、という事になっているが、それは何かの誤りであろう。操が警察か、どちらかが、何らかの目的を持って嘘を言っている。しかし、これだけ計画的な犯行に及んだ犯人たちも、予期せぬ雨によって一頓挫をきたしている。

翌朝、雑木林に続く崖にロープ等が散乱しているのが発見されたが、それは逃走時に崖を降りるための物らしかった。が、折からの雨である。

犯人たちはロープを持ったまま、夜の闇の中で雨の降りしきる崖の上に立ち尽くし、そこからの逃走を断念。別途、仲間が用意した車で逃走を図ったのだが、何らかの事情が発生し、二手に分かれてそれぞれ別系統で逃走した。

最初から迎えに来た車で逃げればいいじゃないか？

警察も苦慮しているのだろう。

犯人は二人だった。が、どうも外部から二人の仲間が手助けに来たようだ。庭の靴跡から見て、そう判断できる。

しかし、そうなら何故、一緒に逃げなかったのだ？ 仲間割れか？ 騒動に参加した省二郎にもわけが判らなかつたのだ。警察はなお更、わけが判らないだろう。

試合は速いスピードで進んでいる。

八時を過ぎて、昼間の熱気が冷め、涼しげな風が球場を包み始めたころ、ドラゴonzの三番荒木が、ベ이스ターズのピッチャー秦からツーランを放った。

六回表で0-3である。

「ハタあ！しつかりせんか！」

利谷がメガホンを口に当て大声を出したが、周りの喧騒にかき消されて、目立たない。

「よしなさいよ。暑くなるじゃない。恥ずかしいし」

節子がポップコーンを頬ばりながら言った。

「そうかな。本人は暑気払いのつもりだ」

と、利谷は言い、下方を歩いている売り子に向かってメガホンを口に当て

「おい、ビール」

と叫んだ。

三杯目のビールを省二郎に渡し

「逃げようがなくなってきたぜ。どうする？」  
と言った。

その意味は、省二郎に、こうなれば全てを話さない以上有効な手は打てない、だから全部を話すか、それともお互い自分勝手にやるか、どちらかにしろ、と、選択を迫っているのである。

先日、利谷のホテルでは、余り深い話しはしていない。

「どうする？」

「・・・」

「言え。どんな理由で奴らを追っている。そもそも、お前は何か。何者だ？」

周りの雑音も歓声も消えてしまい、照明に照らされたダイヤモンドの中のライトブルーのユニフォームが、やけに大きく感じられる。

利谷を信用しよう。いつか、どこかで垣根は超えなければならぬ。

「・・・西岡を見たんだ」

「ニシオカー？」

「田代を襲った人間だよ」

「お前、犯人が判つてんのか？」

利谷は省二郎の顔を覗きこんだ。

省二郎はゲームを目で追いながら、五年前の事件をポツリポツリと話した。

利谷はホエールズに声援を送りながら、肝心なところなどでは質問を挟んだりして、目立たないように聞いている。

節子も気になるのか、利谷に身体を預けるようにして聞き入っている。

話が省二郎の逮捕に及び、佳境に入ったころには、利谷も大声を出すのも忘れて聞き入っていた。時として大声を張り上げても、間が抜けていて、反対に目立ってしまう具合であった。

「とすると、今回の事件に対して、お前は全く別の見解を持っているわけだ」

試合は七回裏に進行していて、四対三の接戦になっていた。

「心配か？」

「彼らが私の存在を確認していたら、近じか、必ず私の身辺で何かが起きる」

「その心配はあるまい。奴らも逃げるのが精一杯だったと思うぜ」

「いや、玄関の監視カメラで、彼らは私を確認したはずだ。その後は庭で見かけたただけだが、その時はどうだったのかな・・・？ 私は、声を上げたかな？」

省二郎が頭を傾げると、利谷は言った。

「いや、俺が知っている限りお前は、どけて叫んだだけだな。あとは投げられていただけだろう」

「・・・」

ファウルボールが近くまで飛んで来たため、省二郎も利谷もボールを避けるように身体を傾けてその行方を追う。

省二郎が

「私は、この事件を見ていて思うのだが・・・」  
と言いかけると、利谷がそれを遮り

「待ちなよ、話を進めるな。その前に、俺はお前に石黒のことを話さなければならん」と言った。

「イシグロー？」

「よし、話の続きは飲みながらだ」

そう利谷は言い、節子を振り向いた。

「俺たち、今からクリスタルに行くけど、一緒に行くかい？」

「もう八回じゃん。1点差だしさあ。終わったら行くから、先に行つてよ」

「りようかい」

利谷はメガホンを節子に渡し、立ち上がった。

## 第2章 その6 グレンリベット

クリスタルの窓から見えるベイブリッジの、いつもながらの飛行警告灯を横目に、マツカランのロックを一くち喉に流し込んで

「榎 圭次は囮にされたんだ」

と、省二郎は言った。

西岡たちは田代耕一を襲うため、まず千葉恒産社長、榎圭次に脅迫状を出した。

内容は不明ながら、柏木奈美江の言うことから推しても、榎の弱点をすどく衝くものであったに相違ない。

榎は、動揺した。

そこに、そうとも知らず石黒達治は、宮本と名乗る眼鏡の男に依頼されて尾行を開始した。それも、ほとんど素人のこれ見よがしの尾行であり、依頼に忠実に写真を撮りまくった。

榎のガードは固くなり、石黒は襲われる羽目になった。

その榎の焦りを待っていたかのように、西岡たちはガードの薄くなつた田代を襲つたのだ。

そうすれば、全ての説明がつく。

利谷もその考え方に異存がないらしく、つまみのピーナッツを口に放り込んで、難しい顔をしながら頷いた。

そして、ジントニクのグラスを持ち上げて、指でぴんぴんさせながら省二郎に言った。

「しかし、宮下・・・山崎なのかな、奴と最後の連絡が取れたのが十九日の午後1時くらいだ。翌日の午前二時に田代に家に押し入つたのだから一日半でやつらはあそこまでの事をやった事になる。準備は万全、石黒が襲われるのを待って居やがったわけだ」

「・・・」

「しかし、お前が言うように凄まじい行動力だな」

「そう、彼らはそういう男たちだ」

「ふーん。ところで西岡たちは、田代を殺すつもりだったと思うか？」

「いや、殺すつもりはなかったと思う。自分たちの存在を知らしめ、いつでも殺すことが出来る事を証明出来さえすれば、それで良かったのじゃないかな」

利谷はジントニック飲むわけでもなく、グラスを口に当てたまま、しばし考えに耽っている。

その時ドアが開いて、青いメガホンを持った節子が店に現れた。そして利谷を見つけると横に来て腰を下ろし

「疲れちゃった」

と言って、利谷にメガホンを渡してから

「何飲んでるの？」

と聞いて、返事も待たずにカウンターに向かって言った。

「亜紀ちゃん、ウイスキーの水割りね。喉が渴いてるから薄くしてよね」

亜紀ちゃんと呼ばれた娘が軽い返事をした。

利谷が、遅かったじゃないかと言うと

「負けちゃった」

と言って、天井を仰いだ。

「もうクルーンしたら不甲斐ないんだからあ」

九回裏に代打種田のホームランで同点になり延長戦になったのだが、十回の表でクルーンが代打立浪に二塁適時打を浴び、これが決勝点になってバイスターズが負けたと言う。

店の女の娘が水割りを節子の前に置くと、一息で飲み干し、ふうと息を吐いて

「亜紀ちゃん、もう一杯ね。今度は普通の」

と、カウンターに向かって言った。そして、小声で

「ねえ、利ちゃん、明日にも刑事がまた来ると思うのよ。どうしょ

う?」

と言った。

節子が心配しているのは、石黒の怪我と、今回の事件とを警察が結びつけて考えるのではないか、という事である。その点を警察に問い詰められると、節子としては答えられない。

しかし、それはないであろう、と言つのが利谷と省二郎の意見である。

千葉東署と木更津署とでは、同じ千葉県警といってもそこまでの連絡はないし、広域捜査となっても石黒と千葉恒産を結びつけるものは、横浜節子探偵事務所だけである。こちらから申告しない限り、判りっこない。

が、しかし、何らかの事情が絡んで、警察が千葉恒産を暴力団系のフロント企業であるとの先入観を廃し、本気で動き出せば、必ず焦点は横浜節子探偵事務所に絞られて来るであろう。

「それにしても、田代なり榎なりは犯人を知っているのではないか? 面識があると思うが・・・」

もしそうなら、何故、彼らは犯人が誰であるのかを警察に言わないのか? と言つのが利谷に疑問であり

「言えないのじゃないかな」

と言つのが、省二郎の答えである。

我われには判らない、何らかの複雑な事情があるのだ。それも、十数年前から続いている事情が・・・

山崎という眼鏡の男の、ダンプカーを使った猟銃事件を手短に話すと、利谷は難解な顔をして、入り組んでいるな、と言った。

一時間半近くそんな話をしている時計を見ると、十一時を回っている。

店内は客が十人を超えて、ざわめいている。

難しい話をしているのが判るのか、気を使ってマスターも三人のボックスには声を掛けない。

「ねえ、そいでこれからどうすんの?」

と、緑色のアイシャドーに彩られた目元をパチクリさせて節子が言った。

「うーん、警察が本気で動くかどうか、境目のようだな。今の状態が続いたまま、警察が本気で動けば我われ雑魚は拳げられ、西岡たちは蚊帳の外という凶式だな」

「そのようですね・・・」

「しかし有本、お前も間抜けだな。お前が雨に打たれて田代の家の周りをうろついていた時、お前が捜し求めている西岡たちはその家の中にいたわけだ。美味しい物でも食べて、お前をカメラで見っていたんだ」

そういう具合に利谷に言われると、暗い想念を抱いて雨の中を歩いていた自分が、禅画の中の蛙のように見えてしまう。

省二郎が苦笑をしていると、利谷は節子から紙とボールペンを借りてさらさらと何やら書き始め、省二郎に渡してどうだと言った。

シナリオ1 このまま何も変化がなかった場合

利谷、有本、双方ともお互いのことは一切忘れる

シナリオ2 おにぎり頭が所属し、千葉恒産の暗部を担当するという笹山連合が、利谷に報復を試みた場合。あるいは、西岡たちが有本に攻撃をしてきた場合

利谷、有本、双方はお互いに対して如何なる責任も負わず、個人として一切を引き受け解決する。

シナリオ3 公権力が利谷、有本、あるいは横浜節子探偵事務所  
に、何らかの理由で的を絞ってきた場合

三者はお互い、自己の利益に拘泥する事なく、共同利益が全てに優先する事を遅疑せず、協力して闘う。

要領よくまとめである。ま、そんなところであろう。省二郎にも異存はない。利谷が飲みかけのジントニックを一息で飲み干し、カウンターに向かって言った。

「亜紀ちゃん、グレンリベットのセラーコレクション持ってきてよ。ストレートグラス三個・・・いや四個だな」

亜紀ちゃんと呼ばれたバーテンダーがわざわざテーブルまで来て「何か良いことがあつたんですか？」

と言いながら腰を落とし、セラーコレクションとカットグラスを三個並べた。そして残る一つは自分の手に持っている。

「凄いですね。これの封を切るなんて勇気が要りますよ」  
「まーな。この時のためにとっておいたんだ」

「利谷さん・・・約束ですよ」

亜紀が利谷を見て顔を傾ける。

利谷はにやつと笑う。

「判ってるよ。一杯だけだぜ」

「やったー！ わたし、どうしてもこれの味を舌に残しておきたかったの」

利谷がコレクションの封を切る。

ふたを回してキャップを切り、三個のグラスと、残る一つのグラスにコレクションを注ぐ。そして、目の高さまで持ち上げ言った。

「じゃあ」

省二郎と節子、そして亜紀もそれに倣う。

「じゃあ」

三人と一人のグラスがカチンと合わさった。

「乾杯」

と、小さい声で節子と亜紀が言った。

節子の腕の、トリプルになった銀のブレスレットが、澄んだ光を放った。

## 第2章 その7 襲撃

利谷たちと別れて、タクシーでマンションに着いたのは、午前一時近かった。あの後すぐ帰るつもりだったのだが、ラーメンでも食べに行こうという事になり、それに付き合っていたので少し遅くなったのである。

裏の家の塀に沿った道でタクシーを降り、先日から習慣になっているようにしてマンションの裏から三階の自分の部屋を、ベランダ越しに確認した。

辺りは暗い。遠くの街路灯の回りを、虫が飛び交っている。

「・・・！」

カーテンが、ずれている。そして、揺れている。

よく見れば、掃出し窓の鍵の部分が、拳大に割られている。

来たのか・・・？

省二郎は田代邸のことがあって以来、必ず西岡たちは自分を襲って来ると確信していた。人に言っても判らないであろうが、彼らは、そういう男たちなのだ。省二郎には痛いほど判る。

どこで、如何なる攻撃があるか判らなかったが、帰宅するのを待ち伏せている可能性が一番高いと思い、用心をしていたのだ。

それが、的中している。

ゴクリと、唾を飲み込んだ。

酔いが、一瞬にして消し飛ぶ。

塀の影に隠れるようにして迂回し、裏横の松林に足を踏み入れた。目を上げれば正面三階に、自分の部屋が見える。

神経が研ぎ澄まされる。

奴がこんなに簡単に罠に掛かるとは、思ってもいなかった。

ブルツと、腹の底からの武者震いが、省二郎を襲う。

ゆるく、風が吹いている。

靴を脱いだ。ついでに、靴下も脱ぐ。

素足のまま一足、一足とゆっくり脚を進めるのだが、踏みしだかれる松の葉の音が神経に障る。聞こえない事は判っている。・・・しかし・・・

省二郎はマンションの下に立ち、身を屈めて、先日隠しておいた短い金属バットを手にした。戦闘の用意は、出来ている。

そして、音の立たないよう気遣いながら、隣の家の塀によじ登り、二階の下屋に身体を移した。

先日一度、シュミレートはしてある。大丈夫だ。

風が、省二郎を捉える。

心臓が、高鳴る。

自分の部屋のベランダまで二メートル弱。跳び付けば、跳び移れる距離である。が、音が怖くて、それは出来ない。

省二郎は樋に手をかけ、霧除けに身体の重心を移してから、大屋根に登った。

息詰まる。

瓦が陶器瓦のため、滑りやすく、不安定だ。

しかし、体重を移動させて、そっと、ベランダに足を忍ばせる。

電気が消えた部屋に人気はないが、自分を襲おうとして、西岡が息を潜めているに違いない。

砕けた硝子が不用意に落ちないように、窓硝子にガムテープが米印に貼ってある。

身体をビルの壁にピッタリ付けて隠し、割られた掃出し窓の棧に手をかけ、そっと押してみる。

開く。

次に顔を窓枠に近づけ、中を覗く。

カーテンが邪魔だが、少し背を伸ばすようにすると、暗い室内が見える。

どこに潜んでいるかは、不明だ。が、大丈夫、潜む場所は玄関ドア

ーの左側にある梁の陰か、あるいは隣の部屋の納戸の横だ。息を潜めて吸ったり吐いたりしているためか、動悸が頭まで伝わる。汗が、流れる。

金属バットを持つ手も、汗で濡れている。再度、中を窺う。

この部屋には居ないようだ。

息を大きく吸い込み、少しづつ硝子戸を押しやる。

音はしない。

戸が半分ほど開いた。カーテンが揺れる。

左脚を中に入れる。

床に落ちた硝子の破片を踏めば、音がする。フローリングの床に、注意して脚を下ろす。硝子破片はない。

ゆっくりと、身体を室内に移す。

息を殺して、爪先立ち、隣の部屋との仕切戸のところまで歩く。

ゆっくり・・・ゆっくり・・・

この仕切戸の向こうがダイニングキッチンだ。その右辺に納戸があり、その陰に西岡がいるはずだ。

目は、闇に慣れてきている。

汗が、耳の下を流れ、顎を伝わっている。

ようし！

左手を仕切戸にかけた。

そして、一気に、開けた。

身体を移動させ、金属バットを振り上げ、そこにいる人影に向かって振り下ろそうとした。

が、誰もいない。

とっさに横にある電源スイッチを押し、辺りを見回す。

誰もいない。

納戸を開ける。いない。

風呂場を開けた。誰もいない。

洗面所にも、いない。トイレにもいない。次の部屋の押入れにもい

ない。洋服ダンスの中にも、ベッドの下、これは覗こうとしたが空  
間がなかった。

誰もいない……

省二郎はベッドに腰を投げ下ろした。

汗が、どっと吹き出る。

ひとり相撲かー　しかし、どうなっているのだろうか？

息が乱れている。

五分ほどそうしていた。何がなんだか、わけが判らない。

「ふうっ」

省二郎は足の裏のごみを振り払って立ち上がり、エアコンのスイッ  
チを入れてから洗面所へ行った。

汗でグツシヨリである。顔と手をまず洗ってから、もう少し考えて  
みよう。まさか、時限爆弾を仕掛けたわけでもあるまい。

蛇口をひねって、なま暖かい水で顔を洗った。そして、洗面所の大  
型化粧鏡に写った自分の顔を見ようとして顔を上げ、そのまま、省  
二郎は後ろへのけ反った。

「……！」

声にならない叫びが、省二郎の口から飛び出る。

化粧鏡には、太く、赤黒い血文字が書きなぐられている。

ておひけ

生臭い臭いでも漂ってきそうな、不揃いな筆致であった。

## 海（前書き）

西岡たちへの手掛かりは見つけられるのだろうか？

## 海

熱気と喧騒の夏

あるいは喪失の青空

### 第1章 海

#### 第1章 その1 プレスレット

省二郎はどうしたらいいのか、判断に苦しんだ。

西岡たちの動きのど真ん中に、偶然とはいえ遭遇してしまい、拳銃に刺激的な警告までされてしまった。

臍を噛みたいような気もするし、逃げ出したいような気にもなる。

しかし、勇気を持って、身を晒したまま立ち向かう以外、為す術はない。

とは言ってみたところで、勝つか負けるかの全面攻撃に打って出るには、まだ機が熟しているとは思えない。

反対に、事件というものに敏感になっている省二郎は

ここは一旦、退くべきだ。

と思っっている。

利谷の言うところの「シナリオ2」に、かなり近い状態になっている訳であったが、今後の情勢次第ではどう変化するか判らない。発展するなら戦わなければならないだろうし、うやむやの内に収束するなら、それに越したことはないのだ。

焦る必要はない。半年もしてほとぼりが冷めてから、計画通り明子を探し、洞貝に会い、一つひとつ外堀を埋めるようにして彼らに迫っていかればいいのだ。

一時小休止して、事態の推移を見守ろう。

今度の土曜日には、高科美佐子たちと一緒に海へでも泳ぎに行こう。

ところが、横浜球場で利谷にあつてから三日目の二十六日金曜日、ようやく西岡の刺激的な警告による動揺も遠のき、日常の流れを取り戻し始めていた省二郎に、午後二時過ぎ、一本の電話があつた。省二郎の部門は、勤務時間中の私用携帯電話が禁止であつたため、会社に直接電話があつた。

受け継いだのは藤木である。  
「有本君、電話だよ」  
誰なのか、何の予感もなかつた。  
受話器を受け取ると

「俺だ」  
と、利谷の錆びた声が響いた。

「節子が、警察に挙げられたぜ」  
「・・・えっ？」

利谷の話の結果から言えば、挙げられたという言葉の意味は、正しくはなかつた。事情聴収のために千葉県警東署の刑事に任意同行を求められて、出頭した、という意味であつた。

「打つ手はない。どうするかは節子が帰ってきてからの事だ。しかし、覚悟はしといた方がいいだろう。　　今晚は早く帰って、どこへも行くな。会わなければならんかも知れん。必ず、連絡をする」  
利谷は言うことだけを言つて、電話を切つた。

「・・・」  
警察の動きが、早い。  
最悪の事態になりそうな雲行きだ。

省二郎がゆつくり受話器を元に戻すと、高科美佐子が机の前に立っていた。

「課長がお呼びです」  
「僕をー？」

「ええ、私もですけど・・・」

二人で応接室に来るように、という伝言であると言い、肩をすばめた。

言われた通り二人で応接室に行くと、辻課長の前に他班の内田 悟がすでに座っており、二人を見て軽く会釈をした。

辻課長に促されて、高科美佐子を間にして座ると、吸いかけの煙草を消して

「実は君たちも、もう知っていると思うが・・・」

と、辻課長は用件を切り出した。月曜日に正式な辞令が降りるが、上場準備室のメンバーに君たちが選ばれた、というのである。

内田は既に伝えられているのか、表情を変えず、有難うございます、と言ってから

「あのう、チーフはどなたになるんでしょうか？」

と、心配そうに聞いた。「名目上の室長は社長だけれど、実行部隊の責任者は私になると思う」

辻課長はそう言ってから、正式な辞令までは他言をしないようにと注意をした。

そして  
「どう、今晚 。前祝ということで、軽くいくかね？」

と、砕けた調子で言った。「はっお供させて頂きます」

と、内田は言いながら中腰になり、煙草を取り出した辻課長の手元へ素早くライターを差し出した。

辻課長は一服してから  
「何か疑問でもあるかね？」

と、怪訝な表情をしている省二郎に向かって言った。  
「いえ、別に・・・」

「それなら良いが、何だか浮かぬ顔をしているように思えたのでね。」

けれど、もし心配事があるなら僕に言いたまえ。君の場合、立場が立場だから、まあ判らんでもないが、僕は悪いようにはしない心算だ」

辻課長は鷹揚に言つて、一・二度うなずいた。

節子がカサブランカに姿を現したのは、八時過ぎであつた。

南二局で利谷が親、三本場の局面であつた。

節子が警察に出頭している時、それも己の運命というか、状況というか、そういうものが一つの転機に差しかかつていて、切羽詰つている状態の時、雀荘で牌を摘んでいる男、というものは、普通の人には理解し兼ねるであろう。しかし利谷は、別段、奇を衒つてそうしているのではなく、これがこの男の「地」なのである。

利谷は軽く流局させ、真田にピンチ（代打）を頼んで、カウンターに寄りかかっている節子のところへ行つた。

一応、携帯でざあつとした事は聞いてはいるが、挨拶代わりのように利谷は言つた。

「どうだつた？」

節子は上目づかいに利谷を見て、ため息を吐き、首を左右に振つた。そして、出よう、と利谷を促し、外に停めてあつたクレストタに乗り込んでから

「利ちゃん、逃げたほうが良いわ」

と、助手席の利谷を見て言つた。

警察は田代の怪我は勿論、石黒の怪我の事も、犬飼の怪我也一連の事件として掴んでいる模様だと言ひ

「私、依頼者は誰だとか、車は誰に貸したんだとかつて、ずいぶん聞かれたのよ。怖かつたわ。嘘だつたらどうなるか判つているだろつて、脅すんだもの。申込用紙も証拠物件として持つていたし……」

節子は、全てを宮下一郎のせいにして、利谷と省二郎の名前は出さ

なかったと言う。

「すまない……」

「うっん、元はといえば私だもの……」

そう言つて、節子は軽く目頭を押さえた。

利谷は気になつていたことを聞いた。

「おにぎり頭の犬飼つて奴は、ひどい怪我なのか？」

「ええ、顎を複雑骨折して、歯が半分くらい折れてるつて。それに、脚の肉離れが凄いらしいわ」

利谷は少し考える振りをしてから、もう決めていたのであろう

「節ちゃん、節ちゃんは何も心配しないでいい。俺は今から姿を消すから、明日から刑事が来たら本当のことを話すんだ。有本の事以外は、本当のことを話すんだ。いいかい、利谷幸一に車を貸したつて言うんだぞ」

と、一気に言つた。

「……私、そんなことは嫌だ。逃げるなら、一緒に逃げようよ」

「馬鹿、なに考えてる」

と、笑顔を作つて言つと

「だって、一人じゃ寂しいじゃん」

と、他人事を話すような口調で言つた。

「今はそんな場合じゃなからう」

利谷はそう言いながら、先日からそれとなく心を寄せるような発言を繰り返している節子の、哀しい心を思った。

しかし、やらなければならぬ事が起きたのだ。逃げる訳にはいかない。

「じゃあ、どんな場合だったら良いの？」

「……そうだなあ。そういう話はさ、とにかくこのゴタゴタが収まつてからにしよう」

「収まるつて、いつよ。　そんなもの、いつか判ないじゃん」

利谷は節子の言葉を聞くと、少し考えてから言つた。

「……十日間だ」

「十日・・・？」

「まあ、そんなところだろう」

利谷としては十分な自信がある。警察が追っているのは田代を刺した人間であって、やくざの組員である犬飼を殴った人間ではない。その辺りが警察としても今ひとつ判らないため、とりあえず捜査線上に浮かんだ車の借主を捕まえよう、という事であろう。

「だったら良いけど・・・」

と、節子は少し考えて、妥協的な言い方をした。

「その間、石黒のことは頼むよ。顔が出せないからな」

「うん。付添婦さんには十分な心づけをしているから、大丈夫だと思っよ」

「連絡はお互い、メールで毎日入れる事にしよう」

利谷はその後、節子から警察での取り調べの様子を細かく聞き、自分の考えを補強したあと、節子の運転でレンタカー屋へ行きトヨタクラウンを借りた。

そこで節子とは別れたが、別れ際節子は

「これ、持っててー」

と、トリプルの銀のブレスレットを外して利谷に渡した。そして

「十日後には返してね」

と言って、小指を差し出した。

利谷は、判った、判ったと答えながら、何か別の世界でもあるかのような、愛しい感情が湧いて来るのに戸惑った。節子の、緑のアイシャドーがこんなにも美しく思えたのは、初めての事だ。

利谷はその足でホテルに帰り、フロントの愛子に二週間ほど留守にするが、荷物はそのままにしておいてくれるよう頼み、一ト月間の部屋代をデポジットした。

車に戻ってシートに深深と身を沈ませ、パネルの隅で蛍光を放つデジタル時計を見ると、九時四十分を示している。

省二郎に電話をかけた。

留守電になっている。

必ず電話をするから待機をしておけと言ったのに、どうしたんだろ  
うと思いつながら、折り返し電話をするよう留守録をした。

まさか辻課長たちと前祝をしているとは、思ってもいない。

次に、真田に電話を入れた。

真田は、先ほどの精算金を六千円ほど預かっていることを告げたが、  
利谷が四・五日付き合ってくれと言つと、その意味がとっさに理解  
出来ないのか

「私と打ちたい、という事ですか？」

と、トンチンカンな事を聞き返した。

そうではない、と利谷は言い、仕事を休んで俺に付き合つて欲しい  
事があるんだ、と重ねて言つと、しばらく考えてから言つた。

「いいですよ。いつからです？」

「今から迎えに行くから、十分後からだな」

「着替えなんかは？」

「金さえあれば、何とかなるさ」

「無茶だなあ・・・けど、了解です。下で待ってますよ」

利谷は電話をかけながら、車を発進させている。ネオンや街路灯の  
光が目飛び込んで来るが、車や人の往来は少なくなつて来ている。

朝には着く

東北自動車道の盛岡インターまで六時間、そこから国道百六号線を  
東走して一時間もすれば区界峠、更にそこから二時間かけて下つて  
行けば、魚の臭いの立ち込める宮古市である。

利谷の考えに拠れば、有本省二郎の語る西岡為三なる人物を捕捉す  
れば、自分に向けられている矛先は雨散霧消するはずなのである。  
あながち間違いではないが、そういう具合に、一人で勝手に 思っ  
ている。

俺は、利谷だ

彫りの深い横顔から愁愁さが掻き消え、傲岸ともいえる彼本来の戦

鬨的な面持ちになった。

この時点から数日間、利谷の行動と省二郎の思惑は、違った色彩を放って推移することになる。

## 断章 記事

二十五日午前十一時ごろ、御前崎南方五キロの沖合いで、四十歳から六十歳の間と思われる男性の死体を発見した。発見したのは、相良漁協所属の遊漁船、第二大神丸（船長、高沢亮平、四十九歳）で、死体は青いシートに包まれていた。発表では死後一週間から十日経過しているとの事。発見当時は海面も穏やかで、見通しも良かったという。警察は事故、事件の両面で捜査の方針。

## 第2章 その2 椰子の実

七月二十七日の日曜日、省二郎は高科美佐子たちとの約束どおり、サザンビーチへ海水浴へ行った。マンションへ帰り着いたのは、四時近かった。しかも、一人ではなく、藤木と赤松、そして美佐子とひとみも一緒である。

どうしても赤松が見つけたという、パスタの店に行こうという事になり、省二郎が断れる雰囲気ではなかった。それならば、すぐ裏手にある省二郎のマンションでシャワーを浴びてからにしよう、という事になり、みんなが省二郎の部屋に集まった。

省二郎は後二時間くらいしか時間がなかった。利谷が金曜日の夜、宮古へ向かったと連絡があり、今日朝、現地を出発してこちらへ向かっているという。途中どこかに寄って

「遅くとも六時半には着く。とにかく、会おう」という事だった。

シャワーの順番は男たちから、という事になり、最初に藤木が椰子

の実を持って浴室に向かった。

椰子の実？ うーん・・・ビーチで遊んでいる時みんな椰子ジュースを飲んだのだがひとつ余ってしまい、それを赤松が抱えていたのだが省二郎の所へ来る途中で砂の中に落とすため、シャワー室へ行くついでに藤木がそれを受け取って洗おうと思っっているのだ。車の中に置いてくればいいものを、赤松は椰子の実の手触りが気に入っているのか手放さない。

ひとみは勝手に冷蔵庫を開けてジュースを取り出し、鼻歌交じりで皆の分をコップに注いでいる。

省二郎は玄関横の物陰に行き、携帯メールを見る。

菊池 隆司に会った。どこへも行くな。話がある

利谷の動きを見てみると、事態が急展開を見せ始めているような予感が胸にこみ上げ、焦燥感が募る。

「有本さん、オレンジジュース飲まない」

美佐子の呼び声が聞こえる。  
「ありがとう、と答えて歓声が挙がっているみんなの所へ行き、腰を下ろす。」

「有本さんだって、あんなポートなんか興味ありませんよね」

と、ひとみが澄ました顔をして言った。すると、シャワーを浴びて部屋へ入ってきた藤木が、赤松に椰子の実を渡しながら

「いやあ、それは美佐ちゃんが例外なんだよ。誰だって一度は乗ってみたいものさ、男なら特にそうだよなあ」

と、省二郎に相槌を求めた。

「そうですね。一度くらいは・・・」

と、省二郎が笑って答えると、すかさず

「いじわる」

とひとみが言い返した。

話は、昼間沖合いを通った七十フィートはある大型クルーザーの話であるが、ブルーラインと命名されたそのポートに、本来なら今日、高科美佐子が乗船していたはずなのだ、と、ひとみが披瀝したため

に、その話がまた話題に上がっているようだった。

船の持ち主は横浜の九品寺孝蔵なのだが、今日は上海から帰国している星野常務が九品寺家の招待に預かり、パートナーとして美佐子が誘われたのだ。けれど、先約があるからと断った、というのである。

藤木が言った。

「美佐ちゃんは僕たちと住む世界が違うもんなあ。けれど、これからのセレブとしては失格じゃない。働く必要もないのに働いたりして、いい奥さんになれないかもな」

美佐子が長い髪を後ろへ振り返らし、ジュースを飲みながら答えて言う。

「何だか誤解されてるみたいですけど、その前に独身貴族として失格なのよね。・・・だけど、いいんだ私は」

「そうだよねえ。好きな人がいるもんね」

と、顔を傾けて言った。

「ばか」

と、美佐子が強い視線をひとみに向けると

「だれだあ、そんな奴は？」

赤松が浴室から姿を現し、省二郎にバスタオルを渡して言った。そして、初めて気が付いたのか、ベランダに続く窓を見て

「どうしたの？」

と、省二郎に聞いた。

全員の視線が、割れた硝子に向かう。

拳大の穴やひび割れを塞ぐために、ガムテープが蜘蛛の巣のように貼ってある。

省二郎が、割っちゃったんだ、と答えて浴室に姿を消すと、みんなその話題は忘れたようにまた他愛もない賑やかな会話に戻った。みんな陽に焼けて、健康そうな赤い顔をしている。

三十分ほどして全員がシャワーを終え、赤松推薦のパスタの店に行

く事になった。

四時半である。

省二郎はあと一時間半後には、戻って来なければならぬ。

ぞろぞろと部屋を出て、駐車場へ行き、赤松が車のドアを開けて椰子の実をリヤ フロントに飾ろうとしている時、濃紺のトヨタクラウンが滑るようにして省二郎たちの前へ来て停まった。

全員が見守る中、助手席からサングラスを掛けた利谷が降り立った。麻で出来た、白いジャケットを腕に掛けている。

早いな・・・拙い。

サングラスを外して、険しい顔をした利谷が一歩進み出ると、省二郎以外全員、それにつられた様に後ずさる。

利谷が省二郎を認めて言った。

「何やってんだ、お前・・・」

利谷の、錆のある、容赦のない言葉が飛んでくる。

「遊んでる場合じゃねえぞ」

省二郎は利谷を手で制してから、藤木に向かって言った。

「すみません。急用が出来たので・・・」

会社の人々に目配せをして、そのまま利谷を促し、トヨタクラウンに乗った。

省二郎が後部座席に乗り込むと

「お前、いつも遊んでばかりで、何やってる。お前自身の問題なんだぜ」

と、強い口調で注意し、間をおいて

「宮古へ行ってきた」

と、重く言った。

省二郎が、改めてその意味を考えていると

「どこへ行きます？」

と、運転席の男が言った。

「予定に変更はない。大阪だ」

車は来た時と同じように滑るように走り出し、うだるような暑さの

中、茅ヶ崎市内を通り越し、左富士を見ながら厚木インターへ向かった。

三浦半島方面に張り出した積乱雲の層の薄い部分が、オレンジ色に輝き始めている。この分でいけば、あと一時間もすれば見事な夕焼けになりそうである。

利谷は省二郎のこの二・三日の動きについて何も聞かず、おもむろに「戦闘開始だ。お前、うかうかしてると又、刑務所だぜ」と言った。

「もう少し確認したほうが良いのじゃないか？」

「ばか、お前も懲りない奴だな。何を確認する？・・・お前の考えは判っている。しかし奴らの世界は、量子の世界と同じだ。確認したり、測定出来た時には遅いんだ」

「・・・」

「眠らされて、気が付いたら殺人犯だった？　いいか、そんな甘えは俺には通用せん。今勝つ奴が永遠に勝つ。攻撃あるのみだ。どんなに頭が良くなったって、先手を取らんでどうする」

そんな激しい言葉を吐いた後で

「菊池隆司に会って来たよ」と言った。

宮古事件の、西岡の相手である。

「どうだったと思う？」

「・・・」

「確かお前の話では、似非右翼の親玉という事だったな」

しかし、今は違う、と言って

「あれは負け犬だな。奴は生涯人の顔色を窺がってしか生きられない人間になっている。その理由が判るか？」

と、省二郎を見て口をつぐんだ。

車は東名高速に乗り、二宮を通っている。車外に見える丹沢の山塊が、予想通り真っ赤に染まり始めている。

時刻は六時を回っている。

「奴は、片脚の案山子になっていやがった。右脚の大腿部を真二つに切断だ」

「・・・？」

「夜釣りに行って海へ落ち、船外機のスクリューで切ったそうだが、ありゃあ嘘だ」

利谷はそう言ってから

「事件があつたんだ」

と言った。

「 事件？」

「下らん事件だが、見方によつたら面白い」

その面白い事件、というのは平成十一年暮れより十二年初旬に掛けて発生した、缶詰工場誘致に関わる詐欺事件である。

県議・菊池隆司は表向き保守系無所属と勝手に名乗っていたが、その素性の悪さから政治の世界では孤立しており、本人自身、どこかの組織に所属したがつていた。

その菊池隆司の経営する海産物卸商、株式会社「菊栄」に、平成十一年晩秋、一人の男が宮古港に隣接する、菊栄所有の土地二千坪ほどを売って欲しいと言って現れたのである。

男は東京の品川に本社を持つ、株式会社シンカンの代取・飯田剛造と名乗り、缶詰工場を作りたいと言っているのである。

紹介者は自由民主党青年部、某人の紹介状を携え、公庫の資金が十五億円、補助金が三億円余り使えるというのである。そして、この事業の立ち上げに際しては入党も考慮すると。

おかしい

誰でもそう思う。

二千坪の宅地といつても、時価換算すれば四・五億円にしかならな  
いし、それを目途に無理な借入を繰り返している。その土地を担保  
に十五億の資金を用意するという。本体に余ほどの資金があるか、

信用力があるか、政治力があるに違いない。

菊池隆司は東京の知人を介して、株式会社シンカンを調査した。信用情報は、ずば抜けた成績を示した。

菊池隆司は、蜘蛛の巣にかかった蝶を絡め取るように、シンカンに接した。

ところが、シンカンは菊池のそういう態度に辟易したのか、大船渡にある別の土地に工場を建てるといっているのである。

菊池にとっては、思う壺であった。

そこから本当の話だ、と思っている人間である。

今まで信用して動いていた自分の立場を、どう始末するつもりだ、という脅しが始まり、結局、菊栄の土地をシンカンは買わなければならぬ羽目になった。

シンカンの事情もあり、支払い条件はシンカン振出の百二十日の手形という事になり、予約の仮登記だけして名義書き換えは手形決済日に連動する事になったが、菊栄の要請もあり、別途、二億円の融通手形がお互い百二十日サイトで切られた。

そして決済、ならびに融資実行日でもある平成十二年三月某日朝、東京より出張してホテルに泊まっている飯田剛造に会うべく家を出た菊池は、飯田の部屋に入ったまま、ホテルのロビーで待つ菊池の部下たちの目にも触れず、忽然と掻き消えたのである。

しかも後で判ったことであるが、シンカンの手形はレースの組んである、いわゆるポン手、レース手形であった。

「夜釣りに行って、海に落ちた？ 馬鹿言っちゃいかん。やられたんだ」

どういう思惑が重なってやられたかは知らんが

「奴が失ったものは、判っているだけで片脚と二億円の負債だ」

「・・・」

「死ななかつたのが、せめてもの幸いかな。よほど怖い目にあった

ようだ」

「やはり西岡たちだろうか？ 彼らは政治家とは縁がないように思うが……？」

省二郎は話の進展についていけない自分を感じる。

「おい、怒るぞ。お前、完璧に監獄ボケだな。いいか、可能性を考えるのはいい。しかし、それは行動に移す前にしろ。戦闘は開始されているんだ。これと思い定めて突き進む以外、奴らを捕捉出来ん」

利谷は険しい顔を後ろの省二郎に振り向けて言った。

そして、節子の事務所は勿論、運転をしている真田の店であるカサブランカにも、もっといえばバー、クリスタルにも刑事は来ているのだ、と言い

「俺が捕まってみろ、お前だって無事というわけにはいかん。いいか、俺も節子もお前の名前は出さん。がだ、どこにどんな陥穽が待ち構えているか、そこまでは責任が持てん。お前は仮釈の身だぜ。あの現場にいたというだけで、刑務所へ逆戻りだ。私は何もしていません、と言つて、通用するか？」

利谷の目は依然として険しい。

「しかし利谷さん。あなたが殴った男、あの男があなたにやられた、と言ええば、それで終わってしまう訳でしょう。そう考えたら、西岡を追ったところで無意味だと思うが……？」

そう省二郎が問うと、利谷は省二郎をチラッと見て、ニヤリと笑った。すると運転している真田が

「その件はもう片付きましたよ」と、ぼそりと言った。

「そんな変な顔すんなよ。今日昼、お前のマンションに行く前に、予定を変更させて奴の病院へ行って、話をつけて来た。奴だって石黒を同じ目に遇わせている。これで、チャラだ」

「……チャラったって、怪我の度合いも違うし、何よりも警察がそれで済ませますか？」

「奴は前科があるが、石黒にも俺にも傷害の前科はない。・・・なに、警察、そんなもんは、お互いが違うと言えば警察もどうしようもあるまい。いずれにしろ、捕まらない内に終わらせるのが最善だ」  
利谷はそう言ってから、ここは何処だろうと、真田に訊いた。  
時刻は七時を回り、走っている車はトラックが多くなり始めている。  
外は山間部なのか灯りが見えない。

「三ヶ日の辺りでしょう。さつき浜名湖が見えてましたから」

利谷は、そうかという風にうなずき、これからが本番だと言った。

「これからなんだ、本番はー 今日はこちらから白壁が最後に勤めていた中華屋へ行く」

「・・・」

「心配するな、来る途中で連絡はしてある。そして明日中に大阪のヤクザだかチンピラだか知らんが、白壁の女房を犯ったという二人の男に会う。そうすれば・・・」

そうすれば必ず、西岡たちの影が浮かぶはずだと言い

「居場所を突き止めてやる！」

と、決意に近いようなことを言った。そして省二郎にノートを渡し

「今のうちに訊いておこう。大阪の奴らの住所を教えてください」と言った。

省二郎は住所までは判らなかつた。そこで村井組という組名と、その組の住所を書いて渡した。

「判った」

と、利谷が言うところを見ると、それで充分なのである。

「もう一度、白壁夫婦と奴らとの経緯を詳しく話してくれ」

利谷はそう言つて腕を組み、目を瞑った。

省二郎は、明子と、それにまとわり付いて離れなかつた洞貝たちの行動を語り、しかし平成九年三月頃から洞貝の行方が判らなくなっている事、そして金森の方は一昨年、金沢刑務所を出所しているらしい事を話した。

利谷は利谷でその話の筋道から、自分が次にとる行動を決めている

ようであった。

やがて思案がまとまったのか

「急げ！」

と、運転している真田に向かって言った。

伏見にある「金竜」の姫野という親父は、時間帯が忙しい事もあったのか、あるいは古い事なのでもう興味が薄れたのか、夕食をしながらの話に余り乗ってこなかった。質問には答えるが、おざなりである。

余り重要な話もなさそうでもあり、すぐに別れた。

店を出て、利谷が省二郎に尋ねた。

「有本、お前どうする？」

省二郎は時計を確かめてから、ここで別れましょう、と言った。

「どうするんだ？」

「明日は月曜日です」

「だから？」

「会社へ行かなければなりません。人事異動の発表がある」

そう言つて微笑むと、利谷は理解し難い生き物でも見るようにして言った。

「お前がそういう考えなら仕方がない。しかし俺はお前のために動いている訳ではないにしろ、結果的にはお前のためになっている事をしている訳だ。それは判つてんだらう？」

「ええ、充分」

「だったら会社へ行つてる暇などなかるう？」

「いいえ、会社は会社、事件は事件です」

「俺たちは今から大阪へ向かうんだぜ。俺たちが必死になっている時に、自分だけ会社だあ？」

「私は茅ヶ崎でこの問題を解決します」

「・・・？」

「そういう事です」

「俺はお前が理解できん」

利谷はそう言つて顔を左右に振つた。

省二郎は追っかけるように

「節子さんに仕事を頼んでも良いですか？」

と、そう言つて破顔し、車のところで怪訝そうに立っている利谷に「お金貸して下さい。持つて来なかつた」と言つた。

省二郎はそこで利谷たちと別れ、少し考えてから、伏見の地下鉄に向かつて歩きながら精一叔父に電話を入れた。長い電話だった。

次に地下鉄の公衆電話のところへ行つて電話帳を広げた。

そして波石悟郎の自宅へ電話を入れ、今から行くが会えるかを尋ね、了解をもらつて電話を切つた。

地下鉄に揺られ、金山駅に向かいながら、利谷の激しい行動力を思つた。

思わぬ事で、同じように西岡を追うようになってしまつたが、ああいう形で追っかけても無理な気がする。

どこかに人知れぬ彼らだけの情報網があつて、それに引つかかる気がするのだ。宮古へ行ったのはいい。しかしそれにして無防備すぎるのではないか？西岡は宮古という土地の出身者である。利谷は役所にも行つたであろうし、菊池にも会つたという事は、彼の過去に繋がる人たちと会つたはずである。それが、その人間が西岡の縁者でないと、何故わかる？

いかなる形で西岡たちに通報するか知れないのだ。

西岡を甘く見てはいけない。

しかも今度は出所して間もない金森に会うと言う。そればかりか利谷の口ぶりでは、それでも西岡たちの影が掴めないなら、その足で岡山の明子の実家まで行くと言う。

危険すぎる

狼の棲む巢穴に、やみ雲に手を入れるべきではない。

省二郎は利谷の出現によって、予期せぬ形で強引に引きずられる自分を感ずる。

いたし方のない面もあれ、こうなればゆっくり西岡を追うなどとは言っていない。

不本意ではあっても不意をつく形で、核心に迫らなければならない。

金山駅で降りて、波石に言われたように歩いていくと、波石悟郎と書かれた大きな門灯のある家があった。

家の中に入る前に、自分の服装を新ためて見てみると、薄茶の半ズボンに赤いＴシャツ、それにビーチサンダルを履いている。

あんな場面で、唐突として浚われた格好なので仕方がないと言えばそうなのだが、まだ見たこともない波石悟郎と言う人物は、この姿を見たらどう思うだろう？

まあ、そういう事もあるだろう

深呼吸をして、奥へ行くごとく一・二歩踏み出すと、躰になった二本の足に草が当たった。

見ると、大きく育った萩の枝が枝垂れていた。

### 第1章 その3 トンチンカン

「ねえ、ねえ、お味噌汁の具はお豆腐よ」

万里子はそう言って。心配そうな顔を省二郎に向けた。

豆腐の味噌汁が欲しい

省二郎はそう思っている。

窓の向こうにタスマニアの海が広がっていて、波が静かだ。

万里子は急にそわそわ落ち着かない顔をして

「財布がない・・・財布がない」

と、二度ほど呟いた。

そして省二郎を見上げて、何か訴えるような顔をしている。

もう良いのに

省二郎はそう思いながら、急に悲しくなった。

「省二郎さん、危ない」

万里子は叫ぶともなくそんな事を言って、省二郎の傍らまで歩いて来た。

ショートカットの髪が、風に吹かれて輝いて見える。

何があぶないんだろう？

しかし万里子は自分が何を言ったか忘れたのか、省二郎の腕を取って頭を肩に押し当ててきた。

万里子の匂いが、身体いっぱいに広がるのを感じる。

この匂いを、自分はずっと待っていたんだ。ずうっと・・・

どうして気が付かなかったんだろう？

万里子は省二郎の顔を見上げ

「赤ちゃんが出来たの・・・だけど財布がないわ」

そう言つて、悲しそうな顔を見せた。

赤ちゃん？ そうだ、お袋に会わなきゃいけない

汗ぐっしよりなつて、目が覚めた。

寝苦しかったのだろう、エアコンが切れている。

時計を見ると五時前である。

頭の中に、万里子の声が残っている。

エアコンのスイッチを入れてから冷蔵庫へ行き、缶ビールを取り出して窓辺に行つてカーテンを開けた。

松林を透して、白々と明け行く空の下に、青く広がる海が見える。

「・・・万里子・・・」

声に出して呟いてみた。

五年前の冬、東京拘置所での寒々とした接見室で、最後の面会をした時を思い出す。

「ごめんなさい・・・」

と言つて涙をぼろぼろ流して泣いた万里子。

あれが最後の言葉だった。

どうしてこんな夢を見たのか、省二郎には判っている。

一昨日の早朝に名古屋から横浜に着き、午後からは図書館に行ったりして過ごした。

翌朝会社へ入社すると人事異動の発表があり、夜、星野社長主催の発会式があった。

上場準備関係者だけのささやかな発会式だったが、その帰途、高科美佐子が二人きりになるのを待っていたかのように省二郎の腕を取り、このまま少し歩きたいと言った。

利谷からは金森などに関するメールが断片的に入っており、省二郎はそれどころではない精神状態で少し戸惑ったが、断るのも可笑しなものなので、宵闇の街の中をそうやって二人、一時間ほど歩いた。省二郎とて木石ではない。いや、五年前までは女遊びに明け暮れていた省二郎である。久しぶりに女性の髪の毛の匂いをかいで、理性が混乱しそうになった。

十間坂の料理屋から中海岸のマンションまでの、わずか二キロに満たない道のりをぶらぶら歩いた。

別れ際、どちらからともなく唇を合わせた。

先日からどこかに、そうなるような予感があるにはあったのだ。

そういったことが夢の原因であるのだろう。

美佐子と少し距離を置くようにしないといけない。

そうだ、東京のセルリアンタワーの最上階で、ためらいがちに差し出したあの指輪以外、どんな指輪が自分に残っているというのだろうか。

省二郎はビールをあおって椅子に座った。

そして遠く広がる海を見ていて、ふと、久しぶりに白壁の事を思った。

白壁が理香と一緒に住み始めても理香を籍に入れる事が出来なかった心情が、今の省二郎には明瞭すぎるほど明瞭な事として受け入れる事が出来る。

理香が押しかけ女房のようにして白壁に接近した時の、白壁の心の

陰影が手に取るように判る。

あの頃の自分の、なんと幼なかつた事か―

白壁が何故、化粧品卸会社をやっていたのか？ それは明子を捜すためであつたに違いない。理香は白壁が業界紙などに宣伝を出したり、ダイレクトメールを出すのが異常に多い事をぼやいていた。自分も注意をした。しかし、あれは違う。あれは、白壁から明子へのメッセージだつたのだ。

俺はここにいるよ、お前は何処にいるんだ、という悲しいメッセージだつたのだ・・・

届く当てのない、メッセージだつた・・・

時計を見ると六時になっている。ジョギングの時間だ。今日は七月三十日火曜日である。一昨日はあんな情況だつたので早朝のジョギングが出来なかつた。しかし昨日からは又生活にリズムをつけるためにジョギングを始めている。一日休んだだけだ。

省二郎が立ち上がつてタオルを取りに行こうとすると、携帯のコールが鳴つた。こんなに朝早く誰だろうと思つと、利谷である。

「お前、夜はいつも何やつてるんだ？」

と、あきれたような利谷の声が響いた。そうか、美佐子と歩いている時などは携帯を切つておいた。

そういえば昨日、日曜日に洞貝の女房とかに会つて洞貝の行方不明を確認したと言つていた。そして昨日は金森の女に会つと言つていたが・・・

「金森も殺されてるぜ」

利谷はそう言つて、明子の実家の住所を教えろ、と続けた。

省二郎は住所を教えてから、金森の事をもう少し知りたいと言つと、奴の情婦に会つたんだ、と言つた。

「フィリピンの女だつたがね。その女から確かめたんだ。一昨年の六月にヤクザの抗争があたんだそうだが、その時に二人組みの男にヤサから攫われて以来行方不明だ」

「抗争？」

「ああ、抗争に紛れ込んで西岡と眼鏡がやったに違いない。ヤクザがあんな用意周到な事するか。洞貝と一緒にだ。奴ら、復讐の鬼だぜ。義理堅い奴らだ」

「義理堅い？」

「金森も洞貝も白壁の女房を犯った奴らだろう。白壁なんかとつくにあの世だぜ。普通、死んだ人間に義理立てするか？」

「言うてから」

俺にはお前

「節っちゃんにホテルの調査を頼んだんだった？」

「何をしようとしているのか、さっぱり判らんよ」

「と、そんな事を言うてから電話を切った。二十分近く経っていた。省二郎は時計を見て、ため息をついた。今日は早く出社しなくてはならない事を思うと、この時間では中途半端で今日のジョギングも出来そうもなかった。」

会社に着くと八時を回ったところだった。

昨日までの経理一課ではなく、三階に新たに設けられた準備室に行くと、すでに辻課長、いや辻バイスマネージャーが出社していて、省二郎を見るなり

「早いじゃないか」

と言った。

軽く会釈をして、早く起きてしまったから、と当たり障りのない言い方をしたが、本当はシュミレーションとして連結決算短信を配布する場合に備えて、子会社である中国工場とバンコク工場の記載事項にもう一度目を通しておきたかったのである。この二工場は連結決算対象になるので、その辺りの把握が悪いと、第三者割り当ての決定が日程に上った時、前後すると、狂った比率のまま決定することになり兼ねない。

しかし辻バイスマネージャーはそうは捕らえず、

「誰でもこういう責任の重い仕事を与えられると、自然と早く目が

覚めてしまうものだなあ」

と、座って書類を広げ、パソコンのスリットにカードを差し入れている省二郎の所に来て言った。そして、今気が付いたとでもいうように続けて言う。

「そういえば有本君、昨夜の社長の話では、君のお父さんは会長の命の恩人なんだって？」

「はあ、いや、どうなんでしょう」

「戦争中の話ではなさそうだし、何だか捕虜になったとか言ってたけど、何があっただい？」

「はあ、私も余り知らないんですが・・・」

省二郎にとっては嫌な話題である。精一叔父からも詳しく聞いたことがないし、省二郎自身、カンボジアの事なんて意識的に尋ねたことはない。

省二郎の曖昧な返答に気が付いていないのか、辻バイスマネージャが何かを言いかけた時、机上の電話が鳴った。六番ランプが点滅している。省二郎への直通電話だ。

省二郎が受話器を取り上げると、節子の声飛び込んで来た。

その日、準備室の仕事開始日は打ち合わせなどの合間を縫って、省二郎の机の上の直通電話が鳴りっぱなしの日だった。

節子からの電話に始まり、精一叔父からの電話が二回、千葉県税局から一回、そして昼近くには成田税務署から三回入った後に、佐倉市の住吉会計事務所の住吉所長から

「恐らく・・・」

と言う電話が入った。

「あなたがお尋ねの人物は、山崎栄次郎君じゃないかな。税務のほうはうちでやっていましたよ。彼の経営していた設計会社が連鎖倒産に巻き込まれてずいぶん借金を抱えたまま倒産しましてね。九十年でたしね。平成で言えば四年ですか。・・・うちにも相談に来

られたが、自己破産を勧めるのが精々でしたな」

聞けば、それに関連して家族が心中事件を起こしたという。

「房江さん、奥さんの事ですが、お子さんを連れてね。まあ、本人だけは助かったんだが・・・」

そして、殺人という事で刑に服したと言う。

「相手が間違っているような気がするんだが・・・」

土曜日の夜、省二郎が名古屋に行った折、精一叔父に依頼した件の結果であった。

省二郎は精一叔父を巻き込むには抵抗があつたのだが、ここまで来ると好き嫌いの問題ではないと思ひ、国税の方面から山崎を追つたのである。

省二郎は自分が捜し求める眼鏡の男かも知れぬ、その山崎栄次郎の写真があれば送って欲しいと言うと

「確か、蔵王に行ったときの写真が家にあつたと思うが・・・」  
あれば送っておきましょう、と言つた。

省二郎への私用電話ばかり掛かつて来るので、何をやっているんだ、というようなみんなの非難の視線を感じていると、昼休みのチャイムが鳴つた。そうすると、昼食に行くついでと言つ感じて内田悟が省二郎の隣に来て

「有本君、少しは仕事中の私用電話を慎みたまえ。何のために携帯電話が禁止になつているのか、君は判つているのか。常識を弁えたまえ」

と、みんなに聞こえるような声で、ずけりと言つた。

「午後からは入江監査法人の方と菱洋証券の方も来られる。朝からの君のような態度では困るよ」

省二郎は、返す言葉がなかつた。

昼食を早々に済ませて、いつものように構内グラウンドの木陰に行き、横になつた。

近頃は陽射しが真上に来るようになり、日陰が少ないのでキャッチボールの音もしない。

みんなのように本当は建物の中にいた方が、エアコンが効いていて汗もかかず涼しいのだが、省二郎は昼休みにはいつもここへ来る。ここに寝転がっている時が、一番心が休まり、思考が進む。

今ごろ利谷と真田は岡山にいるだろう　　利谷の考え方は、一面正しい。洞貝や金森が西岡を知っている可能性は高いし、明子を探せば、これもおそらく西岡を知っているであろう。

省二郎は西岡をゆくり追うという構想は、利谷の出現によってとつくに崩れてしまったと思う。こうなったら、一刻も早く西岡の所在を突き止めなければならぬ。

そう思って、行動を開始し始めている。節子への依頼もその一環だ。しかし、利谷の行動は不首尾に終わるであろう。

洞貝が行方不明で、金森までが消えてしまっている、というように、岡山へ行ったところで明子の消息は掴めないであろう。そう、思う。省二郎は、今朝電話があった節子の事を思う。

「あの親父、不愉快ねえ」

と「すし鉄」の親父のことを言ってから

「あの日の団体客、名古屋から来ていたんですって。言葉遣いから間違いないようね。総勢十八名。後は彼らが泊まっていたホテルを捜せば良いわけね」

と言って、造作もない感じで言っていたが、今ごろ四苦八苦しているだろう。

狛江近辺の宿泊施設だけでも十や二十はある。もしその団体客が、一つの意志の基に操られて行動していたとなれば、少なくとも半徑一時間で来れる広域な宿泊施設を捜さなければならぬ。そうならば、東名沿いの川崎、横浜と範囲は広がり、搜索箇所は天文学的な数字になるであろう。

ポイントがあるはずだ。ポイントが・・・

省二郎は、波石悟郎の事を思い出す。

癖なのか、禿げた額をぴしゃぴしゃやりながら

「そのあとの事といつても、何も無いよ。刑事さんが二度来ただけで、奥さんからも連絡はないし・・・」

と、雲を掴むような話をしただけであった。

白壁夫婦は、あれからどうしたろう？

相変わらず、その後には繋がる手掛かりがない。

省二郎がそんな取りとめもない事を考えていると。隣に誰かが座る気配がした。目を開けると、美佐子が省二郎の顔を覗き込むようにして

「・・・何を考えていらつしやるの？」  
と言った。

省二郎は昨夜の出来事を思い出して、何となく気恥ずかしい。

真夏の強い陽射しが木の葉の間から洩れて来ていて、美佐子の薄いオフホワイトのブラウスの上に落ちてている。

「内田さんの言った事、気にしていらつしやるんでしょう？」

「・・・そうでもない」

「私、内田さんて苦手だなあ。目下の者に対しては全くの命令口調ですものね」

そう言つて芝をむしり、足元へ投げた。

「伯父さまももう少し考えて下されば良いのに・・・女の娘も私人だし、私、父の会社に行きたくなくなつちゅうわ」

伯父さま、というのは星野八郎会長の事で、父の会社というのは子会社の星菱工機の事であるが、普段は絶対そういう言葉遣いはしない娘なのに、どういふわけか省二郎と二人の時にはそんな言葉遣いをする。

そういえば、誰かが言っていたが、美佐子はどうして働いているのだらう？ 裕福な家庭の子女であるのだ。

・・・？

美佐子が省二郎を見ている。真つ黒な瞳が、何処までも透き通つて

いるような目だ。形のいい目。

・・・?

何かが、胸の扉を叩く。

美佐子は不意に視線をずらし、話題を変えて、週末にパーティーがある、と言った。

「週末にー？」

「ええ、招待したら来てくださる？」

「僕がー？」

「誕生日なの」

兄の誕生日だと言って、家で内輪だけのパーティーがあるのだと言った。

「お邪魔でしょう？」

と言うと、友人も来るし、何よりも

「兄のフィアンセが来るから・・・」

と、はなはだ要領を得ない、的外れな言い方をした。

遠く、相模湾上空に積乱雲が張り出していて、真っ青な空に白の濃淡を見せている。こうしてじっとしていても汗ばむのを覚える。今日は土用の丑の日なのだ。

「来てくださる？」

・・・?

先ほどから、胸の奥に何かしこりがある。

省二郎はトンチンカンな事を言った。

「さつき、何を言ったんだっけ？」

「・・・？ 私が？」

美佐子が怪訝な表情をする。

「だから、働いているんだよねえ。働いて・・・」

美佐子はますます怪訝な表情をし、その後その表情を曇り気のない笑顔に代えて、くすすと笑った。

「省二郎さんて、不思議な方ね」

長い黒髪が風に揺れている。

省二郎はすつくと立ち上がった。

「昼から休むから、辻さんに伝えておいてー　　そうか、忘れてた」  
省二郎は、小走りに走り始めた。

## 第1章　その4　浜松

東経34度39分、北緯133度55分にある街を答える、と言われてすぐさま「岡山市！」と手を挙げられる人間は、よほどの変わり者である。

しかしながらその岡山という街自体は瀬戸内の穏やかな陽光に晒された、太陽の落とし児のような街である。

その市外の西部を流れる吉井川は、水量の多い、これまた豊かな川である。

その川を跨いで岡山ブルーハイウェイが走っているが、その西大寺大橋の橋脚の建つ川原の影に一台の車が停まっている。

中を覗くと一人の男が椅子を倒して寝ており、ときいきびきが聞こえる。

川原もこの辺りまで来るとコンクリートで固められている箇所が目立つが、十メートルほど離れたそんな護岸コンクリートの上に、もう一人サングラスを掛けた男が腰を下ろしていた。

川面に波紋が広がっているのは、石でも投げたのであろう。

「ちえっ」

男は舌打ちをしてサングラスを外した。  
利谷である。

七月二十六日の夜から三十日の今日まで、宮古に始まり名古屋、大阪、姫路、倉敷、岡山と、西岡の影を追ったが、それは文字通り影でしかなかった。

未だに現在に繋がる手掛かりは何もない。

節子に十日間で片をつけると言ったが、自信がなくなっている。

あの後も警察が何度かホテルやカサブランカに姿を見せられているらしい、このままでは指名手配になる可能性も捨て切れない。自信がぐらつくとともに有本への疑念が湧いてくる。自分がこんなになって西岡を捉えようと活動している時、有本は会社に出社しているというのだ。

奴の話に嘘があるのか？

しかしこの五日間に探し出し、会った人間たちの証言は、有本の話が本当の話である事を証明はしているのだ。

先ほど別れた、典子という明子の妹にしたところで、作り話をしていないとは思えない。また、明子の居場所を隠しているとも思えない。  
「・・・」

橋脚に西日が当たって長い影を引き、川面には残光が注いで白い光の破片が利谷を包んでいる。

「馬鹿野郎」

と、自嘲気味に呟いて小石を投げる。波紋が広がる。こうなれば大分にある白壁の実家に行くか、有本が節子に依頼したという寿司屋の団体客でも洗うか、二つに一つである。

時計を見ると、六時前であった。

コンビニを探す途中、ここへ車を停めてから二時間ほどになる。

真田も疲れ切っているのか、車の中で寝たまま起きない。

利谷はもう一度、小さな舌打ちをして車に戻った。

助手席に座ると真田が目を覚まし

「行きますかあ」

と、寝ぼけた声を出した。

「うん、行こう」

車は動き出し、十分もすると車の群がる国道二号線に出た。

「どこへ行きます？」

右折すれば神戸、左折すれば広島を経て下関である。

「・・・大分」

「大分って、あの大分ですか？」

「・・・うん」

「ようし、毒を食らわば何とかだ」

利谷は真田を連れ回している事に対して、申し訳ない、などという感情はない。その代わり、この騒動が一段落し、自分の身の振り方を決める時にはこの男を陽の当たる場所へ連れ出してやろう、そう思っている。

旭川を渡った時、真田が

「電話しましょうか？」

と言ったのは、左手前方にあるバス亭の傍らに電話ボックスを見つけたからであった。

朝から電話ばかりしていて二人とも携帯の電池が切れており、簡易ソケットを買おうとコンビニを探している間に、吉井川の河川敷に紛れ込んでしまった経緯があったため、真田が気を利かしたのだった。

利谷としては何だか疲れてしまって、そんな事はどうでも良い気分になっている。

車を停めて電話を掛けに行っている真田が、手招きで利谷を呼んだ。

「有本さんから電話が入っているそうですよ」

何だろうと思いい電話を替わると、いつもながらの落ち着いた高木香保の声がした。

有本さんから電話があつて、今日中にもう一度自分の方から連絡をする、携帯の電池が切れているので自分と連絡がつかない時は浜松のコンコルドホテルに来てくれ、という伝言だと言つ。

あいつもか。しかし何で・・・？

「浜松？」

「ええ、明日の朝十時には来てくれって、そう仰っていましたけど・・・連絡してみてください。繋がらないと思いますけど・・・」

浜松という街は、静岡県を静岡市と二分する街である。

経済的には浜松市が名古屋を中心とする東海エリア、静岡市は関東エリアとやはり二つに分かれる。

歴史的には駿府と呼ばれた静岡市に一步譲るところがあるが、進取の気性やその積極性としては遙かに静岡市を凌駕する。

その浜松のシンボルとも言うべき浜松城、というより曳馬城と言ったほうが納まりが良いが、その北東にコンコルドという十八階建てのホテルが建っており、その一階グリルで、利谷は省二郎と会っていた。

七月三十一日午前十時である。

二人の男は難しそうな顔をしてコーヒーを飲んでいるのだが、もう一人の男、真田は洋ランチのスクランブルエッグをフォークで掬っている。

「それを俺に手伝えてのか？」

と、近頃一段と荒っぽい言葉を吐くようになってきている利谷が、無精ひげを生やした顔をのけ反らせるようにして言っているのは、説明が要る。

昨日の昼、省二郎は美佐子と話をしている、不意に思い当たる事があり、飛ぶようにして名古屋に来た。

忘れていたのは、明子の仕事の事である。それがすっぱり抜けていた。

波寄町に白壁夫婦がいたのは平成八年一月より同年七月に至る半年間であるが、その間白壁は「金龍」という中華料理屋で働いていたが、明子はどうしていた？

働いていたはずだ。

省二郎はそれに思い当たり、美佐子に二・三日休むと言って飛ぶようにして名古屋に来た。

しかし省二郎の意気込みには我関せずと、波石悟郎はその件は知らぬと言った。省二郎が落胆していると、その脇にいた二十七・八歳の娘が、それなら知っているとつい

「ダイアナ」

という美容院の名を言った。

闇の中に消えて行く、糸の端を掴んだ。

省二郎がその美容院を訪れると、その店の派手な五十年配の女将が、確かに白壁明子は店にいた、と言って

「突然来なくなつてね。その後というと・・・十月頃だったか、ご主人さんが来たわよ」

保険証を取りに来たと言う。

「明ちゃんの私物を取りに来ただけど・・・その中に保険証があるって」

「その折、白壁さんは何か言っていますでした？ 何処にいるとか、何をしているとか？」

「車の運転手していたのじゃないかなあ」

「と、言うと・・・」

明子の給金の未払い金があり、それを渡そうと後ろを追っかけて行く

「あの人、トラックに乗り込みましたから」

「トラック・・・？ ナンバーなんか覚えてませんか？」

「そりゃあ気になって見たわよ。浜松ナンバーだった・・・えっ特徴？ 派手な車だったわよ。緑色の車体に赤い横線が二本走ってるの」

省二郎はようやくにして西岡たちに近づく第一歩を踏み出したのだ

それだけの特徴があるなら、すぐに判るだろう、と言う利谷の意見に対して省二郎は言う。

「浜松ナンバーといっても、東は御前崎市から北は榛原郡川根本町に至る広大な面積です。しかも保険証を取りに来たというのなら、国保と想像できます。つまり、社会保険のない小さな会社です。そう考えれば、簡単には見付けられない事が判るでしょう」

更に、と省二郎は続ける。

「運送会社かどうか、それは本当のところ判りません。どこかの会社の社用車かも知れないわけですから。ただ単にトラックというだけです。それに、もう十年も前の事ですよ」

「・・・」

利谷はその車の所属した会社を捜す事の困難さと同時に、それが判明した時の重大な意味が、省二郎と話をしている間に徐々に判ってきた。

別に省二郎の熱意が伝染した訳でもなかったが、その会社にこそ、おそらくは西岡と山崎と白壁の「交差の点」があるのだ。

目の前に座って思慮深く話す有本省二郎に、自分の行動に行き詰まりを感じていた利谷は、態度とは裏腹に言い知れぬ信頼を覚えていく。

眼鏡の男を「山崎栄次郎」と特定した手並みといい、自分とは全くタイプの違う「男」を感じていた。

そこで省二郎の提案による役割分担とは、確保してあるホテルの一室から、一人が電話によって運送会社等に該当する車の有無について問い合わせをする。

残る二人は運送会社やタクシーなど、ドライバーを職とする人たちに直接話を聞く。というものだった。

「よし、それで行こう」

という事になり、省二郎が残って電話、利谷と真田組が聞き込み、という具合に別れたのであった。

が、しかし、戦果は何もなかった。

夜九時近く省二郎が疲れ切ってベッドに横になっていると、利谷たちが帰って来て省二郎と目を合わせ、お互い、首を左右に振った。

「判るもんか。盲滅法走り回ったて仕方ねえや」

と、利谷はベッドに腰を下ろした。

真田は椅子に座って、サンドイッチなんかの食べ残しが散らかるテ

ーブルに足を乗せ

「こんなやり方じゃあ駄目だ。もう少しこう目標がはっきりしないとねえ」

と言っでぐったりしている。

この男はどうした訳か、定まりのない生活を一週間も続けているのに、トレードマークにしている口ひげの手入れが行き届いている。

省二郎が冷蔵庫から缶ビールを取り出し、二人に渡して

「まいったなあ」

と、アームバンドがしてある腕で頭を抱える。

何か良い方法なり、地域を特定するような目安はないものだろうか？  
利谷が缶ビールを一息で飲み干して、代わりの缶ビールを冷蔵庫から取り出しながら言った。

「節子がさ、判らねえつてよ。彼女、調査員には任せられないつて自分で走り回っているらしいけど、ホテルだけでも何百つであるらしいぜ」

そうだろうなあ、と思いつながら省二郎は聞いている。

「俺たちと一緒にだ。取り止めがねえんだ。あつちは五年前、こつちは十年前だ！」

どうしたら良いのか、省二郎にも判らない。

平ボディーのトラックー 緑の車体に二本の赤い帯

「・・・」

省二郎は窓辺に立って外を見た。曳馬城がライトアップされて森の中に鎮まっている。

思い空気が室内を満たしている。誰も何も言わない。

しばらくそうしていると真田が溜息をつき

「明日は何処を回ろうかなあ」

と言っで缶ビールと残飯を冷蔵庫の上に置き、テーブルに地図を広げた。

「何処を回ってきたんです？」

省二郎は何気なく地図を覗き込んだ。

静岡県全図がそこに示されている。

「今日は二こと二二」

と真田が言い、指でさした。

「・・・！」

省二郎は雷に打たれたように、違う、と叫んだ。

「違う！　ここは、浜松だ！」

もう一度、叫んだ。

「浜松だ！」

翌日は朝から三人が地域の分担を決め、電話を掛け続けた。

闇雲に電話をしているのではない。

そんな事したら浜松ナンバーを持つ運送業者だけで四百以上ある。それを運送業に限定しなれば何万、何十万になる。そんな無茶な事で緑地に赤の二本線など間の抜けたことを言っても、所詮無理がある。

しかし昨夜、真田の広げた地図を見て、全ての謎、たとえば大げさだが、ある事柄が頭を掠めた。

試しに、ここに浜松ナンバーを管理する陸運支局浜松支所の領域である静岡西部の地図を広げてみよう。

湖西、浜松、磐田、袋井、掛川、御前崎と、さまざまな市町村があると思えば、浜名湖があり天竜川がある。

しかし、いかなる地図であれその下辺は海になっている。

#### 遠州灘

しかも、その海浜は一つの砂丘としては鳥取砂丘に次ぐ規模を誇る中田島砂丘に始まり、そこから御前崎までの四十数キロ余にわたって、断続的に砂丘が連なる。その中でも御前崎より西方二十数キロの浜岡砂丘を中心とした地域は南遠大砂丘と総称される日本最大の砂丘地帯なのだ。

「緑化技術は日本が一番進んでいる」

あの西岡の言葉は、この大砂丘地帯を背景にした言葉なのではないか。

そう、ここは浜松である。浜辺と松の土地、遠州の中心地なのだ。そこで国道百五十号線沿いの市町村に的を絞り、三人で地域を分担して電話を掛けている。

昼食をして三十分もした時

「判ったぜ」

と言って、利谷が省二郎の部屋に入って来た。

「三笠梱包運輸株式会社」

現住所、御前崎市浜岡××××

旧住所、小笠郡浜岡町塩原新田××××

メモ用紙に書かれたその会社がそうだという。

「詳しい話は車の中だ」

と言ってサングラスを掛け、後を追うようにして入って来た真田の肩をポンと叩いた。

## 砂丘（前書き）

愛情とは何か？

省一郎は考え込まざるを得ない。

## 砂丘

### 第2章 砂丘にて

#### 第2章 その1 寮

三笠梱包運輸は車両三十台を擁する中規模な運送会社であるが、それは現在の話であって、十年前はその半分ほどの規模だったという。「今は違う」

と、国道百五十号線を走るクラウンの中で利谷が言っているのは、車体の色の事である。

「昔はそんな色の時もあったそうだ」

車は福田町を過ぎて大須賀町に向かっているが、この辺りから黒松を中心とした防砂林が多く、かつ広域を占めるようになり、偏形した磯馴松が所どころに見受けられるようになる。

なるほど、見渡す限りに真夏の太陽の下、松林が続いて潮風を受け松籟の音が清々しい。

時折り行き交う車も大半がサーフボードをルーフレックに取り付けている。

右手の海岸沿いは切れ目なく松林が続いているが、あの向こうには延々と砂丘が続いているのであろう。

空が青い。

九年前、彼らはここにいた

省二郎はどうしても確認したい。

珍しく運転している利谷は、彼なりに何か思うところがあるのか、口数が少ない。

真田は後部座席で寝ている。

そんな男三人を乗せた車が大東町に入った時だった。

「そうか！」

と、利谷が頓狂な声を上げた。

そして省二郎に「すし鉄」の団体客の事を根掘り葉掘り聞いて、言った。

「　　という事は、その名古屋からという十五人の団体客は、お前のアリバイを崩すために雇われた、あるいは本人たちは知らなくとも、誰かによってそのように使われた。だからその団体客がどの誰だか判れば、西岡か山崎の身元が浮かび上がる。そう考えているんだな」

省二郎は笑って答える。

「そうですね・・・だけど突き止めるのは至難の業ですよ」

利谷もサングラスを外して笑い、しかし、自信あり気に言う。

「三日間で捜し出してやるよ」

そして、もう一度確認をしておくが、と言った。

「いいか、人数は十五名、そしてお前が鎌倉へ電話をしてから丸三日目の事だな。時間にすれば八十時間弱だ。　　間違いないか？」

省二郎は利谷が何を考えているのか判らなかつたが

「その通りだ」

と答えた。

利谷はサングラスを目に当てながら、口元を緩め

「そちらは俺が引き受けた。　　節子では無理だろう」

と言つてしばらく考え、三日間で大丈夫だ、と断定的に言った。

敷地五百坪ほどの三笠梱包運輸に着いたのは、四時半ばであった。

四トントラックが四・五台と、トレーラーヘッドが二・三台、午後の油のような光は差し込むプラットホームに停まっている。

蝉がうるさい。

入り口のプラットホームに続く二階建ての白い建物が本社らしい。

クラウンを社屋の前に着け、一呼吸おいてから

「　　行くか」

と、利谷が省二郎に言った。

しかし二人の対応に出た津野という総務課長の話に、二人は失望とも落胆ともつかぬ気持ちを味あわねばならなかった。

「ほいね、うちが権利を買い取ったんは七・八年前だかんのう。ほい、判らんじゃんねえ」

と、西岡と白壁の写真を見比べて言うのである。

運送業には運送業の、何らかの権利でもあるのだらう。津野という眼鏡を掛けた三十歳くらいの男が言うには、権利を買い取ったという「三笠運輸」の車の車体こそ緑地に二本の赤線というのだが、今は全員辞めたというのである。

そこで旧三笠運輸の社長に会うにはどうしたら良いのか、と訊くと「亡くなったからさ、奥さんが売りに出したんじゃんねえ」と言う。

「じゃあ、その頃の事を知っている人って、誰かいませんか？」

というと、顔を撫で回してから

「ええつと・・・誰もいないやあ」

と小声で言い、ちょっと待っていてくれと面倒くさそうに席を立ち奥にある自分の席に戻って行った。

利谷は惘然とした態度で煙草を吸っている。

ここで諦めるわけにはいかない

もしここで埒が明かないようであれば、今日はこの辺りに泊まって旧三笠運輸に勤めていた人を捜さなければならぬ。

奥のほうで三人の事務員と話をしていた津野が、頷きながら席に戻って来て

「古川君がやあ、知つとるらしんよ」

と言った。

古川勝也。五十六歳、出戻りだという。

この会社に入社したのは三年前だが、旧三笠運輸に勤めていたと言う。

「古川君なあ、今日は岐阜の高山に行ってるのさねえ。・・・ほい、八時か九時には帰るよ」

利谷が携帯の電話番号を教えてくれ、と言つと、個人の番号は教えられないと言つて

「代わりに掛けてあげるよう」

と、玄関口まで立つて行き、案内用の電話から古川の携帯に電話をして利谷を呼んだ。

利谷も立つて津野の所まで行き何やら話していた。やがて帰つて来て

「待つててくれつてさ」

と、省二郎に言つた。

食堂で時間を潰して、八時からプラットホームの所で待つたのだが、九時を過ぎても古川は現れなかった。

時折、節子から連絡が利谷に入る。いつの間にか、節子の報告を利谷が受けるような格好になっている。

その内リフトに乗つて構内作業をしている男が、十時になったら閉門するからと言いに来て

「あんたら、古川君を待つなら寮の方が良いんじゃない」

と言つ。

「寮　？」

目の前の百五十号線を浜岡原発のほうに折れ、一キロほど行くと砂地試験場があり、それを通り越して更に一キロも行けば右手の松林の中にあると言ひ、遅くなつたら

「古川君はそちらに直行するよ」

と言つた。

「馬鹿野郎、初めからそれを言え」

と、車に乗つたあと利谷は毒づいて憤つていたが、とにかく車をそちらに走らせた。

右手前方にある原発の照明灯を遠く見ながら走つていくと、砂地試験場と書かれた県立農業試験場の看板があり、それを越えて更に行くと闇の中に、言われたような二階建てのアパートのような建物があった。

ただっ広い駐車場に車を止め、ライトを消すと真田が車から降りて右側の明かりが点いている部屋へ走って行き、中の人と何やら話をしていたが、やがて走って帰って来て

「あの真ん中の部屋」

と言って二階の中ほどの部屋を指でさした。

松林で囲まれた寮である。

暗い

窓を開けてエンジンを止めると、松籟の音に混じって遠く海の音がしている。

時刻は十一時になった。

既に真田は軽い寝息をたてている。

## 第2章 その2 浜昼顔

「おい、有本」

と、静まり返った車の、暗闇の中で利谷が言った。

「あと何日で西岡を捕まえられる？」

「・・・無理でしょう・・・」

「ふむ、しかし俺も約束した手前があるしなあ。

それにだ、

もし団体客の身元が割れたら？」

省二郎は返答に窮する。

「・・・判りますかね？」

「ああ、おそろくな」

「反撃もなしに？」

「反撃？」

利谷は暗闇の中で意外な事を聞く、といった顔をさせている。

省二郎は利谷が無鉄砲な形で西岡たちの影を追っている事の危惧感を述べた。すると利谷は

「お前え」

と言ってから声を立てて笑い、言う。

「俺は道具にされていたらわけか」

「・・・だけど現れなかった。警告はされたけどね」

省二郎も声こそ出さなかったが、笑った。

「馬鹿野郎、お前の考えはだ、俺が動き回っていれば危機感を持った奴らが襲いに来る。そこを捕らえようという魂胆だったんだろ。だからお前はマンションに戻り、会社に出勤していたわけだ」

そして省二郎を見て、首を左右に振り

「俺を道具扱いにするとは、お前も大したもんだぜ。

いや、

こりゃあ参ったよ」

と言つて、また声を立てて笑った。

その時、二人の顔をライトが走った。

こちらへトラックが近づいて来る。

やがて五メートルほど離れた所にトラックが停まったが、凄い砂埃である。

ライトが消え、男が一人降り立った。

利谷と省二郎は車を降り、男に近づいた。

砂埃と暗さではつきりしないが、男は自分に近づく二つの影を認めたのか、立ち止まってこちらを見ている。

「古川さん？」

「・・・そうだけど・・・あんた達かい？」

省二郎が手短かに用件を話すと

「いいよ」

と言つて、すたすたと寮の方へ歩いて行き、振り返つて

「何してるの？」

と言う。付いて来いという意味らしかった。

古川という五十路の男は、気さくとか、開けっぴろげとかを通り越した、何と言うのか、自分と他人との境目がないような男だった。半分以上白髪になっている髪の毛をぼりぼりやりながら、二人を家

具がほとんど無いにも拘らず屑籠のようになってる部屋に招じ入れた後、窓を開け放し、冷蔵庫から発泡酒のロング缶を二本持って来てグラスを・・・いやコップを、飯台代わりになっているコタツ板の上に三個並べた。

心なしか、何か腐った臭いがする、ような気がする。

「竹輪しかないやあ」

そう言い、皿に十本ほどの竹輪を盛って来て、醤油を垂らした、というか、ぶっ掛けた。爪は黒く、手は垢で縞々になったように見える。

そしてそれで満足したのか、汗がそのままシミになったような顔を歪めてニツと笑った。

「俺、ちよつと水かぶってくるでー」

そう言つて古川は浴室に消えた。

いつも小うるさく、近頃は険のある顔をする事が多い利谷も、毒気を抜かれたのか、汚い畳の上に胡坐をかいて、顎に手をやり

「ほうー」

と感心している。

六畳の部屋に座っているのであるが、ベランダに続く掃出し窓の横にぺちゃんこになった布団が一組二つ折りにして置かれており、寝る時はおそらくそれを伸ばして使うのである。

とにかく室内は、菓子袋、雑誌、新聞、広告、衣類、ビニール袋と、散らかし放題に散らかっている。

利谷が汚れて半透明になったコップを持ち上げ

「では馳走になるうか、ご同輩」

と、わざと強張った顔をして発泡酒を二つのコップに注いだ。古川に当てられているのか、利谷には珍しい冗談を言った。

やがて古川がパンツ姿で浴室から出て来て、薄汚れたタオルで頭を拭きながら二つ折りの布団を引き寄せ、その上に座ると、利谷が古川の前のコップに発泡酒を注いだ。

古川は片手を上げて、やっやっやっやっと言い、美味そうに発泡酒を飲

み乾し

「何い・・・三笠運輸の何が知りたいって？」

と、皺の多い顔を省二郎に向けた。

利谷がまた発泡酒を注いでいる。

省二郎は十年近く前の話だが、と断って白壁と西岡の写真を並べ、知っているだろうかと尋ねた。

すると西岡の写真を手に取り

「為ちゃんやな」

と言ってから白壁の写真を手にし、迷いながら言っ

「この仁は・・・ええっと、なんて言っただかやあ。明子さんの旦那さん何やけど・・・」

「白壁」

「せや、せや・・・白さんや、ははあ」

と言って、歯の抜けた口を開いて懐かしそうに微笑んでから、不意に立ち上がった。そして冷蔵庫へ行つてまた二本発泡酒を持って来てコタツ板の上に並べ

「写真なら儂も持つとるで」

と言った。

冷蔵庫の横にある筆筒の引き出しを開けて、何やらごくごくそしていたかと思うとアルバムを持って戻つて来て

「これに写っているやろ」

と、コタツ板の上に広げた。

省二郎は、写真に見入った。

「それは柏崎の帰りの時の写真やな」

と懐かしそうに言う。

「・・・柏崎？」

「大きな仕事があつてんさ。会社の車全部で、ここの発電所から柏崎へ荷物を運んだんだよ。3日間ぐらいその仕事ばかりやったねえ。その帰りに、全員で一泊したんよ。社長も写ってるやろ」

思い出の写真でもあるのか、十枚近いスナップ写真が並んでいる。

白壁が写っている、西岡も写っている、山崎も・・・みんな笑っている。

その中に一枚、巍巍とした黒岩を背景に、十八人の人間が写っている写真が省二郎を惹きつける。あの時は単なる団体の固まりに見えるが、今は一人ひとりの表情が省二郎の胸を締め付ける。

五年前、理香が省二郎に見せたあの一枚も、焼き増ししたのであるう、その中にある。

この一枚の写真が、裏に書かれていた電話番号と共に、三人の男たちの接点に繋がる写真だったのだ。

彼らは、どうしてもこの写真が取り返したかったに違いない。

偽刑事に扮した山崎が、この写真をどうしても警察に渡すわけにはいかないと決心した理由が、今にして判る。

省二郎が一枚の写真を指して

「・・・この人の名前は？」

と聞くと、蚊が飛んでいるのか、団扇でぱたぱたと身体を煽っていた古川がどれどれといった感じで首を伸ばした。

「ああ、山ちゃんやな。・・・ええつと、山崎・・・何って言ったっけ、忘れちゃったよ」

「　　栄次郎？」

「そうか、そうだったかねえ。山崎栄次郎って言ったかねえ」

その後、省二郎は気を落ち着かせて、一つ一つ丹念に聞いた。

三人はいつ頃入社したのか？

そして退社したのか？

今はどうしているのか？

会社にいた時はどんなふうだったのか？

そんな事を時間をかけて一つ一つ聞いた。

古川は発泡酒がなくなると焼酎を持ち出してきて、二人に勧め、自分もそれに氷を入れて飲み、遠い記憶を手繰るようによく喋った。聞けば、入社も退社もこの三人の男はばらばらであった。

正確な記憶ではないが、山崎は二人が入社するより二年も前からここに勤めており、次に西岡、そして半年ほど後に白壁が入社したと言う。

逆算すれば、白壁が姫路から姿を消した平成七年七月頃に白壁は入社した事になりそれより半年前に西岡が入社したのであれば、宮城刑務所を出所した三月頃に西岡は入社したのであるう。

「白壁さんが入社した時、女の人を連れていませんでした？ 明子という彼の奥さんなんですすが？」

古川は、明子さんの事ならようく憶えていると言い

「きれいな人やったし・・・問題ばかり起こしていたからねえ」と言った。

「来てから一ヶ月ほど後やったから、十月の初め頃やったかいなあ」救急車で運ばれた、と言う。

「救急車？」

「うん、手を切ったんや」

と、古川が語るところに拠れば、当時はまだ古川の女房も生きており、又このアパートも平屋の長屋が三棟建っているだけの侘しい物であったが、ある朝、みんなが出勤した後で、明子は手首を切ったという。

「・・・」

「儂あ、それだけでもびっくりしたんやがー」

二・三週間後に、傷が癒えて長屋に戻って来て二日目

「今度は海に身投げやでー」

死を願う人間が本当にいる事に驚いたという。あんな人間は最初にして最後だとー

「・・・死んだ？」

「いいやあ、生きとつたよ」

そもそもこの辺りの海は、見かけによらず海流の流れが激しいのである。一度巻き込まれたら海底に引きずり込まれ、なかなか浮かび上がらず、多くは御前崎の沖まで流されて駿河湾に溺死体となって

晒される。

「夜やってんなあ。白ちゃんが寝てる間に抜け出して、海に入ったんやろうねえ・・・朝早かったから」

明子は十一月の冷たい朝陽の射す浜辺に、打ち上げられていたという。

「僕も見に行ったよ・・・」

あの光景は忘れられないと言い、毛布が被せてあって、白い透けたような顔に黒い髪が幾筋もまとわり付いて

「怒られるかも知れんけど、美しいと思っただよ」  
けれど

「白ちゃんが大声で泣きよるし、もう大変やったわ」と言っつて、ニツと笑った。

網戸を通して潮風が入って来ており、利谷が吸う煙草の煙を一定方向へ流している。

潮騒が、遠く聞こえる。

省二郎は尋ねる。

「それで？」

「どうもないよ、また病院へ運ばれて行ったけど、そのまんま三日ほどして消えたらしいから」

「消えた？」

「白ちゃん、房江さんと一緒に会社休んで捜し回っていたけど・・・まあ、あれや、逃げられたんやろ」

「・・・房江さん？」

「山ちゃんの奥さんや」

聞けば山崎の奥さんで、ちょうどあの頃ここに居たと言う。何でも二年間くらい病院に入院していたとかで、退院して帰って来たたと。

「暗い奥さんやったねえ。うちの女房とは親しかったんやけど、付き合いのない人やったよ」

けれど隣に住む明子とは気が合うのか、よく明子を抱きかかえるよ

うにして歩いていたと言う。

そうかも知れない

「するとその後、白壁さんは・・・？」

「いやあ、あの後すぐ辞めたねえ」

古川はそう言って焼酎をグビツと飲んで、団扇で足元をばたばたやっている。

そしてコタツ板の上に広げてあるアルバムの、一枚の写真を指して

「これや、房江さんや」

見ると女性が二人並んでいる。

目元の涼し気な、半そで姿の女性が写っている。

この人も笑っている

「こちらの人は？」

省二郎がもう一人の女性の指して言うと、古川はしばらく黙っていたが

「俺の女房や」

と、ぼつりと言った。

利谷が言う。

「西岡つてのに奥さんのような人はいなかったのかい？」

「うん、為ちゃんは堅物だったからな」

と言って、あの人はと続けた。

「あの人は何も喋らんし、近寄り難い雰囲気やったしねえ。気色が悪くて、怖かったしなあ」

「怖い？」

山崎のように気さくに挨拶する訳でもなし、仕事でも誰とも同乗したがいなかったと言って

「いつも木刀持ってたさ、浜で素振りしてんのよ・・・あの頃、儂、犬飼うてたやる。それで毎朝散歩に行くとな、海に向かって木刀振ってたんのよ。あれは身体を鍛えてるといふ訳でもなさそうだし、気色悪かったなあ」

けれど、別な意味で山崎も気持ちのいい人間ではなかったと言

「獵銃持つてさ」

見た事があると言う。

「そうするとこの三人は親しかった訳じゃないの？」

利谷が煙草の煙を吐きながらそう言うと、古川は少し考えてから言った。

「・・・どうかなあ。浜でさ、浜だったってあんた砂丘だけどね。そこで為ちゃんが素振りしている時なんか、山ちゃんが膝抱えてはよく海を見ていたけどなあ」

そんな印象が残っていると行って、しかしと、古川勝也は言う。

二人はともかく、白壁は女房同士ほどには親しくなかった、と。ここに居たのも三ヶ月くらいだったと。

しかし、傍目には如何に見えようとも、あるいは期間が如何に短かろうと、三人の「交差の点」はここである事に間違いはない。

時刻は三時を回っている。

省二郎が時計を気にすると、自分は明日は遅番だからと言って立ち上がり、また冷蔵庫に行つて氷を持ち出して三人のコップに放り込み、焼酎を注いだ。

そして記憶が次第に鮮明になって来たのか、酔いの回った舌で

「明子さんやろ、あのなあ、来た当初この人は何やるうて思ったよ。身体の具合が悪かったんやろうと思うでえ、家の前を通るといつも唸り声が聞こえてねえ」

最初は昼間からようやるわと噂をしていたと言う。

「だって、そっくりな声やもん」

しかしそれは病気であつたらしく、それを隣に住んでいて、ちょうど退院して来た山崎の奥さんである房江さんが、いつの頃からか看病していた記憶があると言う。

「せや、せや、ほいで二週間もしてから抱いて歩いていたんやな」

古川は一人合点して頷いている。

ヤク漬けにされた身体なのだ。それを出所して間もない房江が、秘かに看病していたのであろう。

その時、この二人の女性の間には如何なる会話がなされたのであるう？

「今はどうしているんでしょう？」

「さあなあ、誰も知らんやろう」

古川の話によると、平成七年の終わりに白壁が退社し、その後山崎が半年ほどして会社を辞めたという。そして、その半年後、西岡がここを去ったのだと――

省二郎の頭はフル回転している。

その間、三人の男たちは連絡を取り合っていて、一つの企画の元に一人ずつ、誰にも知られる事なくここを去って行ったのだ。

何故なら、西岡が旧三笠運送を最後に退社したという平成九年二月こそ、白壁が浅井という名になって、しかも億という金を持って、千葉恒産の巽ヶ丘詐欺事件を起こす準備をすべく名東荘を借りた時なのだ。

更にその一月後には洞貝が行方不明になり、それに加えて更に、その年六月にはついに巽ヶ丘の詐欺事件が表面に浮かんで来る。

それを考えれば、この飛砂防備保安林に囲まれた、今はなき三軒長屋こそ三人の男たちの暗い合意が形成された場所なのだ。

そう、そして時が経ちそれぞれの立場が出来て、白壁は殺されたのだ。

蚊が何匹か飛んでいるが、誰も気にしなくなっている。

窓を見ると、空が白みがかっている。

時刻は四時半である。

古川は眠そうな目を瞬かせている。

利谷が省二郎に目配せをしている。もうこれ以上聞く事はない。しかし、省二郎は、最後にと言って尋ねた。

「どついう男たちだったんです？」

「はあ・・・？」

省二郎の言っている意味が判らないのか、古川は省二郎を見て不思議そうな顔つきをする。

省二郎も自分の質問の余りな漠然さに、苦笑した。

「いや、山崎という人なんかは、リーダーシップがありそうに思えるんですけどね」

古川は顔を傾けて

「リーダー・・・シップ・・・そんなもんは知らんよ・・・どんな男たちって聞かれて・・・判らんよ。冬なんかあんなに寒いのにさ、いつも海ばかり見てて・・・水平線に何かあったんじゃない」  
そう言った。

くどいようだが、追い込まれた母を焼身自殺で亡くし、そのために人を斬り殺して刑務所に入った男と、三角商法に拠る偽装倒産に巻き込まれて財産を失い、そのために子供が死に、妻が刑務所に入らざるを得なかった男と、暴走族に付きまとわれて最愛の妻が面白半分に陵辱の限りを尽くされた男と、その三人が期せずして十数年前にここにあったという、三軒長屋で顔を合わせたのである。

#### 暗い合意に形成

秘かなる意図がここで生まれたのだ。誰にも理解されず、されようともしない暗い意図が生まれたのだ。こういう人たちは、自分の喜びや悲しみを、埋火のように埋もれさせて生きて行くものなのだろう。

「・・・」

黙り込んでいる省二郎に、利谷が言った。

「行くか？」

「ああ・・・」

古川は焦点の合わなくなっている目で二人を見比べていたが、やがて「泊まって行けよ」  
と言った。

部屋の外に出て車の所へ行くと、真田が口を開けてだらしなく寝ている。

利谷と省二郎はどちらからともなく顔を見合わせ、どちらからともなく足を海へ向けた。

寮の横から細い道が一本、薄暗い松林の中に続いている。緩やかなその坂道を四・五十メートル登って行くと潮騒が徐々に大きく響くようになり、やがて藍色の海が見え、それに呼応するかのように純白の砂浜が見えた。

砂浜と言うより、これは砂丘であろう。

海に至るまでには百メートルほどの幅があり、その間隔を保って起伏の緩やかな砂山が御前崎まで、見はるかす続いている。いや右側、反対の砂山を見れば遠く浜松の中田島砂丘まで続いているのだ。

陽が上ったのであるうか、御前崎の前方の海が真っ白で目に痛い。彼方に二つほどテントが見えるのは、若者がキャンプでも張っているのである。

朝早いというのに足元の風紋の描かれた砂地に、淡い桜色の昼顔が咲いて、潮風に吹かれて揺れている。

利谷が靴を脱ぎ、それを手に持って砂丘の中を歩いて行く。途中で立ち止まり、振り向いて省二郎を呼んでいる。

省二郎は手で合図を送り、二十メートルほど遅れて歩く。やがて利谷に追いつき、海に出たが、海は凪いでいなかった。

近くまで来ると、穏やかに見えた波が一メートルほどの高低を持っており、次から次へと押し寄せている。

潮風が気持ち良い。

砂山で立ったまま海を見ていた利谷が、服を脱いでいる省二郎を見て

「何やってんだ？」

と聞いた。

「泳ぐのさ」

勝手にしろ、という仕草をして、利谷は視線を海に戻した。

省二郎はパンツ一枚になって海へ身体を浸し、沖へ向かって泳いだ。冷たかった。

ずいぶん遠くまで泳いだ心算だったが、後ろを見ると煙草を啜えた

利谷が案外近くに見える。

辻さん、怒っているだろうなあ

空を見ると、星が三つほど、薄明かりの中に瞬いていた。

## 第2章 その3 縮小版

静岡市立中央図書館は、浅間神社の大きな鳥居の前を北へ向かって五百メートルほど行った、右側にある二階建ての建物である。

と書けば、簡単に行けるように思えるが、その説明だけで行く人は、おそらく運転免許試験場に通じる県道二十七号線に入ってしまうであろう。

真田が運転するクラウンもそうであった。

八月三日の炎天下の中を、行きつ戻りつしてようやく着いた時には十一時を回っていた。

ぐっすり寝込んでいた省二郎は、そこで起こされ利谷たちと別れた。四日前に会社に出勤して、そのまま名古屋に向かつて現在に至っている訳であったから、格好としてはスーツ姿であったが、ネクタイは外して下着類を入れた紙袋の中に入れていた。

省二郎はこの図書館で、平成八年に起こった静岡県内の事件を調べてみる心算である。

彼らが旧三笠運輸を退社したのは、概ねであるが白壁が前年十二月、西岡が同年六月、山崎が同年十二月、という事である。

そして翌年二月には億の金を手にした彼らが東京に姿を現す以上、平成八年には特別な意味がある。

順次、目立たぬように退社をし、姿を隠しながら、何らかの事件を起こしているのではないか？

当然の疑問であり、それに間違いは無いであろう。それも、三人がチームを組んで起こしたはずであろうから、浜岡の三笠運輸から遠くない場所で起こしているはずだ。あの場所からだ、高速を使っ

ても愛知まで二時間、神奈川まで二時間半、それも県内に入ったというだけの事だからどう考えても事件は静岡県内で起こしている。一人か二人は運転手という仕事をしながら、残る二人か一人が専従となつて起こしたはずだ。

運転手という仕事をカモフラージュに広域な捜査攪乱をし、専従者は実行者として確実に目的を達成する、と言つやり方を取つたであらう。

そう思つて静岡県内の平成八年の新聞縮小版を広げて、丹念に三面記事に始まり色んな記事に目を通すのだが、それらしい記事はない。当時流行つたパチンコ屋を舞台にした変造プリベイドカード事件などが、らしいと言えはらしいのだが、残念な事に犯人は捕まつていない。

それに、平成八年の前半は小さな事件も割合載っているのだが、後半七月以降は当時話題になつた女学生誘拐事件があつたり、アトラントオリンピックが始まつたりした為、小さな事件は掲載がカットされた模様で余り載っていないのである。

二時近くまで調べていたが、目が痛くなつてきて、近くの喫茶店で遅い昼食を食べた。

食べている時、どういつ風の吹き回しなのか、久しぶりに柴垣から電話があつた。どうだ、どうなつた、と心配していたが省二郎は今のまでの経過を話し、心配するなと言つと、そうか大詰めを迎えているんだな、と興奮している様子である。

そうじゃないんだが・・・

省二郎は柴垣の事はさておき、彼らが起こしたであろう事件を、コピーを飲んで考える。

新聞にも載らない事件か

どうしたものかと思案したが良い知恵も浮かばず、また図書館へ戻つて続きの縮小版を見ようと、縮小版がずらりと並んだ棚を見ていて、そういえば、と思ひ出した。

五年前に捕まる時、一度中央図書館へ行って縮小版を見ようとした事があった。あれは、理香の新婚旅行の中止理由を知ろうと思った時だったが、万里子に会うため途中で中止をしてしまった。

・・・何か気になる。

平成十一年の縮小版の七月の記事を見てみた。確か、理香は六月に白壁とアパートで一緒に暮らし始め、結婚式などの話もしていたがマンションを買っただけで、七月には何となくその話はなくなったと言っていた。

七月に、急に結婚式や新婚旅行を止めなくなるような記事は、やはり、これと言って見当たらない。世界中、航空機事故など、何も無い。

しかし、省二郎はページをめくっていて、七月二十一日の記事に釘付けになった。

五年前に見ようとして見る事が出来なかった、平成十一年度の縮小版だった。見出しは

形骸を断ず

となっていた。

江藤淳という評論家が、体調不良のために自殺した、というものであった。しかし記事をよく読むと、先年死去した妻の、後追い自殺であろうと結んである。

省二郎は図書館のパソコンで、江藤淳の略歴を見てみた。

著書の中に「妻と私」という本がある。

課題図書「妻と私」・・・

解説は、その評論家が彼の夫人の末期がん病闘の一年余りの出来事を綴りながら、最愛の妻の死後の喪失感と孤独を書いたものである、としてあった。

喪失を抱えながら無為に生きる事を形骸と表現し、わが身を処決し、断ずるとしてある。

省二郎は全てが繋がった事を確信した。

白壁は、明子失踪から丸二年経って理香と出会った。その後一年、白壁は理香と暮らし始め、もう明子の事を忘れて理香と結婚しようとしたのだ・・・明子の事は忘れようと・・・

その年七月、思いもかけずこの事件が起きた。白壁はこの評論家と自分を対比させ、自分の内にある「冒してはならないもの」に対する、自分の裏切りが赦せなかった。明子を守れなかった自分が、目の前にある幸せを掴もうとした事、それが赦せなかった。

だから、理香と一緒に住み始めてしまった状態を続けながら、結婚という一つの形式にまで踏み込む事が出来なくなってしまうた。

二年経ち、その状態もやがて薄れ、今度こそけりを付けようと白壁は岡山へ寄った。そして、明子の影に出会い、自分の本当の居場所は明子の所でしかない事をはっきり自覚したのだ。

そして翌年、一月十三日、テレビでその評論家の死の解説を聞くに及び、己の死を決心したのである。

省二郎はそう考え至ると、一見矛盾だらけのように見えた白壁の言動が、よく理解できる気がした。

白壁は最後まで、明子を愛していたのだ。問題は、死を決心した白壁が西岡たちと何らかの対決をして殺されたのか、あるいは単なる自殺だったのかだ。

省二郎は長い間、考え事をしていたようであった。気が付くと、図書館の窓辺に飾ってあるサギ草をじっと見ている自分があった。

## 第2章 その4 ダリアスバンク

感慨に耽りながら、平成八年の縮小版を見ていた為かちつとも頭に入らなかつた。

五年前にもしこれを見ていたら、どうだっただろう？ この記事が目に入ったろうか？ 白壁と明子の関係を知っている今だからこそ、敏感に反応しただけで、あの時見ても何も思わなかつただろうと思

う。

今だから判ることなのだ。

そんな事を考えながら、平成八年度版を見ているので、なかなか集中出来ない。

大きな活字だけが目に入る。

相変わらず女学生の誘拐記事が多い。

「裕子ちゃん宅へ非情な手紙」などという大きな活字が・・・

裕子？

省二郎は、不思議な気が湧き起こると同時に、頭の中の霧が晴れ渡って焦点を結ぶのを感じた。

「・・・裕子？」

確か盗まれた詩集の著者らしき人間の署名も「ゆう子」だった。

2001年の時点で五年の歳月が流れた、と、あの詩集からは読み取れる。すると平成八年、すなわち1996年の出来事があの詩集に書かれているのだ。

事件は歩調を合わせるかのように平成八年七月二十三日に発生していた。

それは、次のような状況下で発生したのである。

中野裕子は当時十七歳、浜松に住む私立聖路加女学院高等部の二年生であり、その生家は十六代に続く材木商を営んでいた。資産は現在の浜松市天竜区西北部の山林六百町歩と旧浜松市内に多くの不動産を所有していた。

その中野裕子が夏季休暇が始まってすぐの七月二十三日午後二時ごろ、所属している水泳部の練習を終えて、浜松医科大学の白い病棟を右手に見上げ、なだらかに続く坂道を歩いていた時である。

夏の気だるい午後、蝉時雨の中を裕子は歩いていたのだが、バス停を降りた辺りから男が一人、十メートルほどの間隔を空けて歩いてくる。

地質学者に扱ればこの辺りは昔、天竜川に洗われた箇所であるため、それに削られて現在は高低差が三十メートルほどある、崖に近いような山道になっている。

当然人家は少なく、樹木が連なつて森閑としている。

蝉が鳴き、鳥が飛び、人の近づく気配を察するのか、蛇の目蝶がはたはたと逃げ散る、そんな所である。

後ろの男以外は人影が見えない、その坂道を、大きく右に曲がり木陰に沿って歩いていくと、白いマツダのボンゴが停まっていた。

傍らに眼鏡を掛けた男がしゃがんで、地図を広げている。

裕子が通り過ぎようとすると、その男が地図を差し出し、松野小学校へはどう行ったら良いのかと尋ねた。

裕子が地図を覗き説明しようとする、その時であった。背後から強い力で口を塞がれ、抵抗する間もなく車に押し込まれてしまったのである。

すぐさま猿ぐつわと目隠しをされ、手足を縛られた。

暴れなければ、と思うのだが、身体が硬直するという事をきかない。

誰かもう一人いたのか、とうに車は動いている。

男の一人が低い声で

「危害は加えない」

と言つたのを合図に裕子は猛然と暴れたのだが、時は既に遅過ぎるほど遅く棺桶のような木箱に裕子に入れられてしまったのだった。

晴天の続く浜松市有玉西の路上での出来事である。

経緯は書かない。

この犯罪のポイントだけを書く。

身代金目的の誘拐事件は現金の受け渡し時が一番の問題だそうだが、この事件に現金の直接の受け渡しはない。

振込みであった。

アメリカより二百万US\$余りの決済金が、当時解体の動きが急速に進むユーゴスラビアのモンテネグロに本店所在地の認可を受けて

いるダリアスバンクに振り込まれただけである。ダリアスバンクは窓口のないプライベートバンクだったが、他行に依頼してスイフトなどを条件付で決済出来る機能を持っていた。しかもユーゴスラビアは統一国家とはいえない状況が1年ほど前から顕著になり、この翌年にはミロシビッチ政権が誕生し、コソボ紛争の火蓋が切られる。その混沌とした状況下にあるモンテネグロへの送金である。マネーロンダリングの最前線であった。

モンテネグロ自体、その後セルビア・モンテネグロ共和国からモンテネグロ共和国へと変遷を繰り返す。

そして余談だが、ダリアスバンクはその後五年ほどあとに日本人が副頭取になり、東京を舞台に詐欺事件を頻発させる事になる。

さて決済金であるが、それは裕子の父親が経営する日本の材木会社がブラジルの木材をアメリカに転売した、その代金としての決済金である。

日本国内での犯人からの接触は全て手紙、一度も電話やネットを使った連絡は無かった。

消印は日本国内ならば、アナログな、けれど正体の掴めないのんびりした犯行だった。全体として、拉致犯行時以外は、その瞬間というものがないのである。

裕子は二カ月後、元気にその姿を現した。

けれど裕子は犯人の顔も何も見なかったと言うし、何処にいたのかもさっぱり判らない、と言った。

しかしその流れを、省二郎は時系列で丹念に読んだ。

これだ

この二時間余りで白壁の心の軌跡が判ったと思ったら、彼らが初動資金を作るため、最初に犯した犯罪まで判った。

省二郎はこの二十四時間の間に、続けざまに詳らかになっていく事実で精神的に大きなダメージ受けているのが判るが、そうもいってられない。

時計を見ると四時四十分を過ぎている。

省二郎は表に出てタクシーを拾い、静岡駅へ向かった。そして、その途中にあるネットカフェを見つけ、中に入る。オレンジジュースを頼んでパソコンの前に座り「中野裕子」で検索すると、事件が未解決という事もあって事件がらみの項目が多い。けれど中に一件、結婚と言う文字がついた記事があった。芸能人同士の結婚式の記事なのだが、このように書いてある。

「最高の結婚式を目撃。けれど、この式場のオープンウエディングはオーナーの九品寺泰蔵氏と中野裕子氏だそうで、その時には及ばないけれど今回……」

## 断章 会話

「まだ来ないな……それにしても文様が一致するなんてねえ」  
「驚いたね。どうなってるんだろ？」

「しかし榎の爺さん、知らぬ存ぜぬとは恐れ入ったね」

「婆さんもだよ……遅いね。ちよつと先に入ってみようか」

「そうだな……しかし理由が判かんねえなあ……寒いね」

「……おつと失礼、危ないねえ……うわ、凄い臭いだね、こりや……あの横浜の探偵屋、利谷の女なんだろう？」

「ひでえな……そうだろう、あんな良い女に男がいないなんて事ないだろう……庇いやがって……知っていると言ったり、知らないと言ったり」

「犬飼も何にも喋らないし……ヤクザ同士の喧嘩で終わりだなこりやあ」

「なんまんだぶ……これかい？」

「みたいですね……うわあ、涙が出るよ、これは」

「ひでえ、何てでかい顔だ。目玉が飛び出して……うわあ……この仏さん、誰なんでしょうねえ？……引き取り手が無いなんて

なあ」

「指紋照合も前科なし。きれいなもんだって」

「所見では心臓だつてな。詰まつてたつてよ・・・そつと戻そう」

「ううん、ま・・・こつちの方が風向きが良いよ」

「ハンカチ要るかい。けどさ、榎も誰も違つて言うとなると、あの逃げ回っている利谷つて男、命拾いになるな。もう七日だよ」

「あの黒子の母ちゃん、庭の男はこの男かどうか判らないてっね？」

「もう少しそちらへ行けないか・・・これは、ほんと酷い臭いだね」

「母ちゃんかい？ まあね、あの母ちゃんだけだよ、まともなのは。文様も一致してるのに、どいつもこいつも」

「あれ、音がするね、来たのかな？」

「神妙にしないと・・・来ないね」

「・・・看護婦さんだつたのかな・・・仏さん、仲間に捨てられたのかなあ？」

「いや、花まで添えてあつたらしいし、課長が水葬だつて言つてたぜ」

「水葬？」

「だから服装一式、靴も一緒にあつたのさ」

「水葬なら浮かび上がることはないでしょうに・・・どうして浮いたんだい？」

「知らねえよ。魚だつて言つてたな、課長が・・・ラブカつて言つたかな・・・そいつが噛み切つたつてさ」

「ラブカ？」

「駿河湾の化け物だつてよ」

「ふーん・・・あれ、誰か来るな、先生のお出ましかな？」

## 第2章 その5 バスケット

省二郎が茅ヶ崎のマンションに帰り着いたのは、九時半であつた。名古屋屋に向かつてからまだ四日目の土曜日だが、何だかずいぶん長

かった気がする。

あの後も何度か柴垣から電話があり、マンションに着いたら電話をくれと言っているので、しなければならぬのだが、一度シャワーを浴び、身体をさっぱりさせたかった。

郵便箱には新聞だらけになっていたが、その中に二通、切手を貼った封筒と、何も貼っていない封筒があった。一通の切手が貼つてある封筒は住吉会計事務所からのもので、中を見ると、有本先輩に宜しくという短い手紙のほか一枚、写真が同封されていた。

見れば十幾年か前の山崎の写真であったが、省二郎には既に不要の写真であった。不要の写真ではあったが、雪の中、赤いヤツケをかぶった山崎がスティックを持ち上げて裕福そうな笑顔をしている。

憎しみなどというものは、とうにないが、かといって親しみがあるわけでもない。追いかける省二郎から死を賭して身をかわし、対向車線の向こうから冷たく見ていた山崎……

もう一通の切手の貼っていない封筒は美佐子からのもので、日曜日のパーティーへの招待状だった。

明日？

明日はどんな事があっても、裕子という女性に会わなければならぬ。

会社の事も気になって仕方がないが、それどころではない。

辻バイスマネージャーには、名古屋へ向かって駆け出した後すぐ電話を入れたのだが、その時は非情に怒っていた。美佐子も心配なのか、一・二度電話があった。最初美佐子は、内田が省二郎の配置転換を室賀常務に直接進言し、社内で大きな問題になっていると言ったが、一日置いた昨日、二度目の電話の時は明るい声で辻に連絡を取るようとの伝言を伝えて来た。

省二郎が電話をして不祥を詫びると、辻は

「君、何だか重要な問題を解決しているんだって。そうならそうと僕に言ってくれても構わないよ。会長から直接僕に電話があつてね、反対に何かあつたら君をサポートするように言われてさ、驚い

たよ」

と言った。

シャワーを浴びてから缶ビールを片手に、柴垣に連絡を入れる。

「おお、今帰ったよ・・・ええ、今から!？」

柴垣は辻堂にある海岸沿いのホテルの名前を言い、誰にも悟られず来てくれと言っ。

「・・・?」

柴垣は、俺が必要な時はいつでも言ってくれ、会社を辞めてでもお前を助ける、などと男気を見せているが、どうも柴垣ならやり兼ねないところがある。そう思って出所以来は突き放したような関係にしてある。

しかし今日の昼に電話があった時、西岡たちとの接点が判った事を伝えた。そのとき柴垣は、そうか、クライマックスが近づいているか、と妙な事に感心していたが・・・

省二郎は色んな事があり過ぎた事と睡眠不足のため寝たかったのだが、待っていると言われればそうもいかず、湘南街道をタクシーで走った。

土曜日の夜である。反対車線は若者を乗せた車で埋まり、その影響で上がり車線まで混雑している。

今は止んでいるが、夕方に降った夕立のせいで混雑の時間帯がずれているのかも知れない。

海岸沿いにあるホテルに着くと、今到着したのか派手な装いをした十人ほどの若者が嬌声を上げ、チェックインしている。

左手に大きな観葉植物があり、その脇を家族連れの一団が歩いている。

その向こうは大きな窓になっていて、昼間なら湘南の海が広がっているであろうが今は江ノ島を中心にして、三浦半島沿いに光の帯が点滅しているだけである。

省二郎はオープンカフェの中で、立って手を振っている柴垣を見つけ「おっ」

と声を掛け、柴垣の方へ歩み寄ろうとして、動きを止めた。

「・・・」

後ろから誰かがぶつかって来る。

何か言っているが、耳に入らない。

柴垣がこちらを見て、頷いている。

柴垣の隣に座って、赤い服を着た四・五歳の女の子を、膝の上に抱えた女性が省二郎を見ている。

水色のワンピースの上に、チェックのサマージャケットを羽織った小柄な女性が、こちらを見ている。

長い眉、つんとした鼻、そして小さな品のいい口

省二郎は頭が混乱しそうになった。

「・・・万里子」

柴垣が歩いて来て省二郎の前に立ち

「約束だからな」

と言った。

そして自分は向こうで待っているからと言って、離れていく。

省二郎は柴垣が何を言っているのか、耳に入らなかった。

ただ、言葉もなく立ち尽くしている。

「・・・万里子」

また、誰かがぶつかった。

万里子が膝に抱えていた女の子を降ろし、おかつば頭の髪の毛を掻き分けて何事か耳打ちすると、その女の子は

「・・・いやだ・・・」

と小さな声で言い、自分の頭ほどあるバスケットを抱えて万里子の後ろへまわり、万里子のスカートの影から省二郎を見ている。

省二郎は一步一步、ゆっくりと万里子に近寄った。

万里子は省二郎の顔を見ていたが、省二郎の手が肩に触れると、ずっと視線を外し、目頭に指を当てた。その指に、ブルーサファイアが光っている。

ああ、婚約指輪のままだ

翌八月四日、日曜日の朝、省二郎は九品寺裕子に会うべく、行動を開始した。

まず、電話をしようと思ったが電話番号はどうしても判らなかつた。九品寺家の関連する会社などはネットで簡単に検索出来たが、自宅はどうやっても判らない。

直接会う以外ないという考が固まり、ピーの餌と水が充分なのを確かめ、おかしな所でウンチはするなと厳命してから駅前のレンタカー屋へ行ってマツダファミリアを借り、一路横浜へと車を走らせた。横浜の九品寺家といえば省二郎でも名前くらいは聞いたことがある、昔からの富豪である。

もしどうしても会えないなら、最悪、星野会長に言えば会えない事もないであろう。先日九品寺家の所有するボートに星野常務が招待されたとか、誰かが言っていたし、地元の財界としての付き合いもあるであろう。

しかし、それは本当に最悪の場合であつて、それをしたら省二郎は何ものかに負けた事になる。とにかく独力で解決しなくてはならない。

そう思つて車を清水丘の九品寺家まで走らせた。

大きな家だつた。坂道を利用して巨石を積み上げた白亜の洋館である。玄関横には車庫が掘られているが、見るからに頑丈そうなステンレス製のパイプシャッターが下ろされている。

その右側が入り口正門であるが鋳物製の、高さ二メートルを越す門扉よつてびたりと閉ざされている。

忍び込むのには無理がある。

実行すればいつぞやのように警報装置が作動するであろう。

しかもその後五十メートルは行かなければ家屋にたどり着かないの

だ。

十重二十重とはいわないまでも二重三重にチェックポイントがあり  
そつだ。

省二郎は正攻法で攻める事とし、門扉の横のインターホンを押した。

「はい、どちら様ですか？」

と言う声は、日本人のものではない。

「有本と言いますが、奥さんにお会いしたい」

と言うと、少し待って下さいと言ってからずいぶん待たされた。拳  
句に

「どちら様ですか？」

と、聞き返して来る。

「ですから、有本と言います」

と答えると、またずいぶん待たされた。そして

「奥さんはいません」

と言う。

「・・・？」

パイプシャッターの向こうには真っ赤なアストンマーチン・ラピ

ドも置いてある。居留守を使っているが、何故だろう？

「では・・・」

と言って、裕子の主人である泰蔵氏への面会を頼むと、これはその  
場でイギリスへ出張しているという返事。

こうなればと思い、車を七十メートルほど離れた坂の上の木陰に停  
め、見張る事にした。

利谷からの朝の連絡では、今日、石黒が退院するので節子が迎えに  
行っていると言っていた。利谷は団体客の搜索に取り掛かっている。  
坂の上に来て見張り出して気が付いたのだが、坂の下方に横浜の街  
が広がりその向こうに横浜港が広がっている。背を向けていたため、  
気が付かなかった。

人通りが少ない、というか、ない。

そうして待つ事二時間、午後一時過ぎ、パイプシャッターが上がっ

たと思うと、真つ赤なアストンマーチンが滑り出てきて、真夏の光を浴びて反射を繰り返す坂道を下って行った。

乗っているのが誰かは判らなかつたが、まずは裕子であろう。

省二郎は後を尾行る。

マーチンを運転しているのが誰かは判らなかつたが、非情にわがままな運転をする事だけは確かだつた。

マーチンは黄金町の節子の事務所の前を通り、右折して中村川に当たるとその左岸を下り、途中から細い道を右に曲がって急斜面を一気に登つた。

省二郎は先ほどから覚悟している。

マーチンは省二郎が尾行している事は先刻承知しているだろう。何せ、こんな道を右へ左へと後を追うのである。

しかし真つ赤なマーチンは、振り払うとか確認するとかの動きを一切しない。

二台の車は連れ添うように強い陽射しの中を、坂道を折れ元町を走っている。

長い髪が揺れているところを見れば、運転しているのは女のように見受けられる。

裕子だ

諏訪町に入つて少し行き、大きな赤い屋根が見えたと思うと、急にスピードを落とし、左側の樹木が生い茂るレストランに入った。

省二郎もそれに続く。

マーチンから髪の長い女が降り立ち黄色いスーツを風になびかせた。そのマーチンの横にマツダファミリアを停めると、その女は省二郎の事を全く無視して店の入り口に入つて行くところであつた。店の名を見ると金色の文字で「フリージア」と書かれている。

省二郎は追いかけるように店の中に入った。音楽が低く流れている。日曜なのか、客が多い。

見渡すと女はすでに店の一番奥で、ティーカップを口に運んでいる。

いつ頼んだんだ？

省二郎は腹を括って歩いて行った。そしてその女の前に立ち、失礼ですが、と言おうとすると

「どうぞ」

とその女が先に言っ、前の椅子を目で示した。

「如何なさつて？ お座りになつたら？」

「・・・わたしは」

「有本さんでしょう。今朝から何度も伺つてましてよ」

「・・・」

「どうぞ、お紅茶が冷めますわ。それとも、冷たいものの方がよろしかったかしら？」

見れば、なるほど目の前にティーカップが置かれていて、湯気を立てているではないか。

省二郎が座りながら

「裕子さん？」

と聞くと、微笑みながら顔を傾けた。

その物腰はとても二十七歳には見えない。切れ長の目を省二郎に向けているが、鼻筋が通り、左右のバランスがきつちりとし、黒髪をそのまま肩でウエーブさせていて匂い立つような美人である。

化粧は殆どしていないようである。

「私にご用があるんでしょう？」

省二郎は気圧されるのを感じるが、誘拐犯を知っているとせば少しは協力的になるであろう。まずは挨拶からと思ひ

「有本と言います」

と言つてから

「少しお尋ねしたいことがあるんです。実はこの三人の男なんです  
が・・・」

と、芸が無いなと思ひながら、古川から借りた三人の写るスナップ  
写真をテーブルの上に置いた。

裕子は一瞥して

それが・・・？

という表情で省二郎を見た。

「あなたは昔、誘拐された事がありますね。その時の犯人だと思っ  
んです。よくごらんになって下さい」

すると裕子は微かに微笑んで

「このお紅茶、スリランカで採れた今年最高のお紅茶なんですって。  
お飲みにならないと、冷めますわよ」  
と言った。

省二郎はむっとして紅茶を見、ティーカップを持ち上げて匂いを嗅  
いでから、用意されている砂糖もミルクもレモンも何も入れないで  
一口飲んでみた。

まあ、こんなもんだらう

「・・・紅茶の種類は私には判りません。それより、あなたは全て  
を知っているはずだ。あなたを誘拐したのは、ここに写っている三  
人だ。ご覧になって下さい」  
と少し語気強く言うと、また先ほどのように、目の端で写真を一瞥  
して

「・・・昔、この店の入り口のところで私を睨んでいた、怖い人が  
いたわ・・・あなたそっくり」

と言って、視線を窓の外に投げた。

それがどうした、と思って省二郎は聞いている。

しかし彼の中にもう一人の省二郎は、しまった、と思っている。  
あまりにも準備不足だった。裕子という存在への完璧なる認識不足  
だ。自分が何かとんでもない間違いを犯している事を感じ取ってい  
る。

「いや、私が聞きたいのは・・・」

と、省二郎が情性のまま重なるように言いかけると、それを遮るよ  
うに裕子が言った。

「有本さん、私に何をお聞きにたりたいの？ あなたは、誰？」

「・・・？」

省二郎が言葉に詰まると、裕子は

「ちよつと失礼」

と言って立ち上がり、洗面所の方へ歩いていった。

省二郎は大失態を演じている自分が判る。

確かに語りかけ方が直線的であった事は認めるが、そういう技術的な問題ではなく、裕子という女性とこの問題について話をするには、もっと深い理解を必要とする人間と人間の問題の何かが足りない事を告げていた。もっともつと煮えたぎった後の、言葉のエッセンスが要る。しかもそれを語れる、自分が要る。裕子という存在はそれほど濃密で、自分が抱える問題の核心の存在だ。その態度、物腰、言いよう、それらは全てそれを暗示している。

省二郎が腕を組んでこの失敗をどう挽回したらいいものかと考えていると、ウエイトレスが来て裕子のティーカップを下げようとする。まだ、紅茶も半分入ったままだ。

「え・・・今の、女性は？」

「奥様はお帰りになりましたけどー」

無然とした気持ちのまま、省二郎も店を出たが、いいようにあしらわれたという不快感と、それを裏返したような裕子の行動の、余りな見事さの対比が、省二郎の心を金縛りにしているようであった。時間にすれば五分もなかったであつたらう・・・

## 第2章 死んじゃったんだもん

車に戻り利谷に連絡を入れると、ちよつど良い、横浜にいるなら節子の所へ行つてくれと言う。

「俺はお尋ね者じゃなくなったらしい」

だから、俺も節子の事務所へ行くからそこで落ち合おうという事だった。

節子に連絡を入れて、今からそちらへ行くと言うと

「利ちゃん八王子だから、まだ一時間は掛かるわ」

だから今近くのファミリーストランにいるので、良かったらこち

らに来てと言う。

そこで節子の指定した桜木町のレストランへ行くと、日曜日なので家族連れが多い中、奥のほうに節子がいた。近寄っていくと、節子は右手に包帯を巻いて、それを首からぶら下げている男と一緒にいた。

「こちら石黒君、初対面の気がしないでしょう?」  
と言ってヒツヒツヒツと笑う。

節子のそういう態度はそれなりに魅力があるのだが、どうしても先ほど別れた裕子と比べてしまう。

しかし節子はそんな事お構いなく、昨日利谷に会って指示を受けたのだと言って

「今日マーちゃんを引き取ってから、ついでに品川と川崎のホテルを回ったのよ。ねえ」

と難しい顔をしている石黒に相槌を求めた。

省二郎は利谷が如何なる自信があるのか、数日中に十五名の団体客の泊まったホテルを特定すると言っていた具体的な中身を知らない。節子は、利ちゃんって頭が良いのよねえ、と石黒に言った。

聞けば、利谷はこう考えたのだという。

すなわち、まず考えなければいけない事は、彼らは寿司屋を選んでから宿泊施設を選んだのか、あるいはその反対か?

答えは、宿泊先からである。何故なら、彼らに許された時間は八十時間、具体的には西岡が省二郎から電話を受けた日曜の午後から、省二郎に扮した男が「寿司鉄」に現れる火曜日の夜中までの時間なのだ。

しかし、宿泊先の確保は当日では余りにも無理がある。十五名の団体客なのだ。

火曜日にこちらへ宿泊となれば、その前日にホテルが決まったというのも余りにも変である。となれば、日曜に宿泊先を決めるべく、必死で探したに違いない。

半日であと二日後と決まっている十五人の宿泊先を確保するとなる

と、その方法はきわめて限られたものになる。

ネット予約の制度が無かった当時、方法としてはホテルガイドの本を利用したに違いない。旅行屋への依頼はするまい。犯罪が絡んでいる。

日曜日の午後、鎌倉にいた西岡は、翌日の月曜日の朝には宮古にいた訳だから、西岡が手配は出来ない。

名古屋の団体客なので、名古屋から東京の宿泊先の電話番号を知ると仮定すると、電話帳かネットしかない。電話帳は名古屋では関東の物を手に入れるには日曜日で無理。

あとは当時盛んだったハローサービスか時刻表の案内欄だろうが、これも無理だ。

どう考えても、ホテルガイドかネットしかないが、今と違ってネットに宿泊施設の予約が無かった事を考えると、やはりホテルガイドの本だ。

利谷は節子に言って平成十三年の各種ホテルガイドの本を、丸一日走り回って集めてみた。

そうすると掲載先が殆ど重複しており調査対象は三十を超えない。だから今日から利谷のグループと節子のグループに分かれて探しているのだという。

「二日間で全部回れるから、明日には判るよねえ、マーちゃん」と節子は石黒を見て言った。

石黒は、はいと言って小さく頷いた。

そうだろうか？

省二郎が窓の外を行き交う車の流れを見て、考えに耽っていると「そんな事じゃないのよ。大変な事ってー」と深刻そうな顔をさせて節子が言った。

お昼に携帯へいつもの刑事から連絡があり、二時間ほど前に事務所であつたところ、節子に一枚の写真を見せて

「知っているか？」

と聞くのである。それが

「鬼のような顔になっていたけど、宮下だったのよ」

「鬼・・・？ 宮下・・・？」

聞いた気がするが、省二郎には判らない。

「ええつと、何だっけ、ほら・・・山崎さん、あの山崎栄次郎って人なのよ」

「何だつて！ 刑事が山崎の写真を持って来た？」

刑事が、何故？

「そんなに驚かないでよ・・・それが、デスマスクなのよ。水死体つてね、目玉とか唇が水分で膨れあつがて鬼みたいな顔のなるのね。死に顔なのよ」

「ええ！」

わけの判らない衝撃が省二郎を貫く。

「駿河湾に浮いていたんですつてー　そいでね、榎を刺した人間は彼に間違いないつて判ったんですつて。だから、利ちゃんに出頭するよう伝えるつて言うのよ」

省二郎は気持ちを落ち着かせて聞いた。

「・・・どう言う事？」

「判ないわよ。警察としては宮下さん・・・じゃなくて山崎さんのね、身元が判らないから利ちゃんなら知っていると知っているみたいなの」

そう言つて節子が水を飲んだ時、節子の携帯が鳴った。

利谷から、もすぐ事務所に着くから全員集合という事だった。

省二郎たちはすぐそのレストランを引き払い、節子の事務所に向かった。日曜なのだが、初めて見る高木香保と挨拶を交わし応接室の扉を開けると、すでに利谷はソファーに横になつていて「ノックぐらいしろよ」

と、省二郎を見上げた。

真田が窓の所で腕立て伏せをしている。

利谷は起き上がりながら

「どうする？」

と聞いた。

「俺はもうお尋ね者ではなくなったそうだ。犬飼にも確認した」

「どうするって聞かれて・・・利谷さんの方はもう終了かなあ？」

省二郎と利谷の置かれている互いの状況が一変して、利害関係がなくなつたのである。

利谷が

「俺の方は終わつちまつた。で、お前、どうする？」

と、省二郎に向かって言うと、腕立て伏せを終えて石黒と話をしていた真田が、横から

「終わつちまつた、じゃ気が納まらんでしょうが」

と、この男には珍しく激しい口調で言った。

利谷が困つたなといった顔をして、今度は真田に向かって言う。

「ゴール寸前の最終局面で差されたわけだ。しかしだ、二着ではあつても連複の馬券は当たつた・・・満足出来んか」

「当たり前でしょう。だったらこの十日間は何だつたんだつて事になりますよ。利谷さんらしくない。引き下がる手はないつて。終わつたとか、まだだとかの問題じゃない。生き方の問題だ」

と、何かのコンクールのような言い方をした。

何を感じたのか

「それって良いね」

とみんなから少し離れて椅子に座っている石黒が、小さな声で間が抜けた事を言うと、それまで何も言わず男たちの会話を聞いていた節子が

「だけど、もう良いんじゃない。犯人も死んじやつたつて言うしさあ」

と冷めた言い方をした。

それを聞くと、真田が猛然と言った。

「じゃあ節ちゃん。オーラスだよ、トップひっくり返されてよ、二

着で賞金もらったから良いや。負けたけど帰ろうって思う？ 勝負はこれからだって」  
節子も低い声で言う。

「だって犯人は死んじゃったんだもん。勝つも負けるもないじゃん」  
真田は興奮しているのか、赤い顔をして何か言いたそうにしているのだが、いい言葉が見つからないようである。

そんな二人を見比べていて、利谷が言った。

「店長、止めなよ。俺も判って言うてんだ・・・こういう時は男と女って、二極に分かれるものなんだよ。お互い頭で判っていても、どちらかを選ぶかって時にはこうなるんだ。二つを一緒には選べない」

と言って大きく息を吸い込み、しょうがねえなあといった面持ちで「要するに、勝ち方とか負け方とかの、カタの問題なんだ。勝ち負けじゃないんだ。納得できない成功より、納得できる失敗を選ぶ時が男にはあるって事さ」  
そう言った。

省二郎は高木香保が運んできたお茶を口に含んで、利谷が言うとうして気障な言葉が気障でなくなるのか、と思っている。錆びた声のせいだろうか？

その省二郎に

「とにかく、進むところまで進んで来ている。奴らが何を考え、何をしようとしたのか、それが判るまで追及は止めん・・・お前だってそうだろう」

と、省二郎に向かって、語気鋭く言った。

その後お互いの知りえた情報を交換しあって、夜八時、省二郎と別れて利谷は久しぶりにG・グラスホテルに帰った。

フロントの愛子がにっこりして、大変でしたわねと言っ言葉を背に部屋へ戻り、冷蔵庫からミネラルを取り出して喉に流した。

冷蔵庫の上に青いメガホンが置いてある。

カーテンを開けると見慣れた横浜港の夜景が広がる。ちょうど十日振りである。変な形だが、節子との約束は果たした。

利谷は省二郎の事を考える。

初めは頼りのない奴だと思っていたが、それも西岡に襲わせるための偽装であつたと判り、ここ二・三日でその認識は一変している。

あの頭の回転の速さ、そして重い思考力。そして何よりも彼を特徴付けているのはあの悠揚とした態度であろう。

利谷は自分が省二郎に惹かれていたのを感じる。

行動力では引けを取らないと自負は出来ても、九品寺裕子が鍵だと、そこまで追い詰めた鮮やかさは到底自分には真似が出来ない。

いつの間にか省二郎に指示されながら動いている自分がいる。

先ほどの別れ際、二人きりになった時もそうだった。

省二郎は駄目だと言う。今のような捜し方では、名古屋の客は捕捉できないと。

そして、リストに載っていない二軒のホテルの名を挙げ、必ずその二軒のどちらかに宿泊しているはずだと断言した。

利谷は明日、その二軒のホテルを回ってみる心算である。

いずれにしろこの三週間にわたって続いたごちゃごちゃも、あと二

・三日で終わる。

利谷はもう一度ミネラルを一口飲んでからベッドに腰掛けた。

上着の内ポケットから節子のブレスレットを取り出すと、数条のきらめきが利谷の目を射る。

しばらくして携帯のボタンを押す。利谷の声が部屋に静かに響いた。

「あ、私、利谷ですが、奥様ですか・・・ご無沙汰しております。

野田社長はお帰りでしょうか？」

左手でBGMのスイッチを回す。音楽が流れる。

「あ、私です・・・盆明けには出社しようと思しますので手配をお願いします・・・いや、早くは出来ません。女の事でやらなきゃならない事が出来ましたので・・・」

終章 喪失の青空  
断章 日記

今日、堀井に会った。

堀井は、私が思っていた通りの、いい目をしていた。いい目はしていたが、私はあのような性急さを好まない。

私と話がしたいのなら、有本ではなく、堀井省二郎として私の前に立って欲しい。自分を有本と名乗り、私が「有本さん？」と呼んでも、あたり前のような顔をしているような男とは、話もしたくない。山崎さんや西岡さんは、彼を買いかぶり過ぎていたのではないか？  
彼はあなたたちとは全く違う人間のように思えるが・・・？

人には超えることの出来ない、目には見えない線がある。人は誰でもここから引き返す。

けれど、その一線を越えて、旅立たねばならなかった人間も、またいるのだ。

堀井よ、あなたが旅立たねばならなかった人間の悲しみが判る人間ならば、それなりの人間として私に会いに来て欲しい。

それが、私とあなたとの間に斃れている人間たちへの、最後の礼儀というものではないか。

堀井は私に、あなたは全てを知っている、と言っていたが、言った堀井自身そうは思っていない。

私を知っている？ 何を？ 何を私を知っていると云うのだ。私を知っているのは、あの夏の暑さと、節穴から見えた空の青さだけだ。ということ、堀井は知るまい。

それにしても十年前のあの夏、初めの動揺が去った後の、あの白々とした心の静けさは、何だったのだろうか？・・・無為の日々・・・私、何を考えていたのか？

思い出す、あの嵐の夜の白壁さんを―

白壁さんは、逃げ出して道に迷い、ずぶ濡れになった私を抱きしめ「帰りたいたろう。待っている人のところへ、帰りたいたろう・・・裕子ちゃん、君はいつでも帰れるんだよ。君の、権利なんだ」と、搾り出すような声で言った。

あの漆黒の闇の山中に、呆然と立ち尽くしていたのは、確かに私だ。怖かった―

だけど私は、あのような形の愛情を、父親からさえ受けたことはない。

ターニングポイントというものがあつたとすれば、それはあの時だったのだろう。あれ以後、私が帰りたいたえば、いつでも帰れたのだから・・・

誰だつて、人の窺い知れない秘密を持っているものなのだ。

語り伝えたいと願つても、どうしても相手に伝えられない感情、というものは確かに存在する。

太陽のせいだ、と言うのが、何らかの正当性を持っているとするならば、私の正当性とは、青空のせいだ、と言えなくもない。

犯罪とは、強烈な目的性を帯びているもののだが、被害者がその目的性に巻き込まれて精神の拘束を受けてしまうことを、心理学者は難しい理屈をこねて指摘する。けれど、事はそんなに難しいものではない。

少なくとも、私はそうだった。

私は、あの三人の男たちの弁護がしたい。法の狭間に落ち込んだ人間が、次に為しえる行為は三通りしか残されていけないのだ。

諦念か、復讐か、あるいは自決か―

しかし、山崎さんも西岡さんも、そして白壁さんも、私の弁護に対して表情ひとつ変えるでもなく

「裕子ちゃん、ありがとう」

と、いつものように笑うだけであろう。

彼らにとつて、一連の出来事は復讐ではなく、過去への決別のため  
に乗り越えなければならぬ「何か」であったのだから――

もし私が今、堀井に伝えたい事があるとすれば、もう戦闘は終了し  
ている、という事だ。これ以上の闘いは、無益だ。

しかし、堀井はまだ私に対して闘いを挑んで来るであろう。限界と  
は、オーバーランして、初めて判ることなのだから――

私は未だ会ったことのない明子さんの事を思う。

同じ女性として、明子さんの命の軌跡は、私の心の支えになってい  
る部分がある。

北の街、札幌に住むという明子さんに、会いたいと思う時があるの  
だ。

会って、何をしたい、と言うわけでもない。

話す、言葉がある、と言うわけでもない。

ただ、その為に生き、その為に死んだ白壁さんに代わって、会いた  
いと、心の底から思うのだ。

明日は朝早く、成田に行かなくてはならない。行って、旅立つ西岡  
さんに、最後の「さようなら」を言わなくてはならない。

それが私の、過去への別れになるだろう。

2007・8・4 ゆう子

終章 その1 ピー

もう十時半になっている。

後ろの座席ではピーが寝ている。

ピー、子猫の名前である。いや、タマの子、と言ったほうが判り易いかも知れない。

一昨日、万里子の後ろの陰に隠れるようにしていた女の子が

「あげる」

と言って渡されたのが、アメリカンショートヘヤーのピーである。

「達雄兄ちゃんの家だね、タマの赤ちゃんをもらったの」

それを綾子はどうしてもお父さんにあげると言っただけで利かないから

と万里子は言った。

自分に娘がいた。

そんな事、夢想だにしなかった。

万里子は

「柴垣さんに守ってもらっていたから」

と言っただけ、当の本人は

「お前がああなった以上、万理ちゃんだって危険だからな。何がどうなっているのかさっぱり判らんのだから」

だから万里子と相談をして、お前には勿論、誰にも綾子の事は話していないと言う。ただ、死んだお前のお袋さんには死ぬ間際に一度会ってるからな、と言った。

その夜は二時間ほど万里子たちと過ごし、省二郎の指を握って離さない綾子を宿めてから

「一週間以内には迎えに行く」

と、省二郎は二人に約束した。

そのとき綾子からバスケットに入れたピーを渡されたのであるが、飼い方が判らなかつた。昔、二・三日タマを連れ回したが、あの時以来である。

とにかく昨日は出かける時に餌と水を用意し、新聞紙を広げてうんちはこのようにするよう厳命したのだが、帰ってみると約束は守られていなかった。

そこで昨夜、町のペットショップへ行って猫のうんち用のキャット

レーを買って用意をし、今日はピーを車に乗せたまま裕子の家の前の木陰で昨日のように見張っているわけであるが、先ほどまでうるさかったピーが今は後部座席で寝ている。

今日も暑い一日が始まっている。すでにここから薄っすらと見える房総半島の上に、積乱雲が湧き出しているのだ。

今日はもう一度、どうあっても裕子に会わなければならない。そう思って朝の八時にここへ来たのだが、その時すでにアストンマーチンがなかった。月曜日と言うことも考えて

出勤したのかな？

とも思ったが、あの裕子である。あり得ない。しかしこんな朝早くからどこへ行ったのだろうか？ 待つ事にした。

昨日は大失敗だった。昨日のあの五分ほどで、裕子の人となりが省二郎には判る。馬鹿だった。まさか、被害者と思っていた裕子から、あのように強烈な反撃を受けるとは思っていなかったのだ。

あなたは誰？ と裕子は謎をかけたが、省二郎は答えられなかった。こうなれば、生半可なことでは裕子は心を開かないだろう。どうする・・・？

海を見ながら待っていると、船が往き、空を飛行機が飛んでいく。

どこへ行ったんだろう？

そうして待つ事に二時間半

陽が高くなって来たので車を少し動かそうとギアに手をかけ、ブレーキを外した時、坂道の下から真っ赤なアストンマーチンが現れた。

マーチンが車庫の前で停まるとパイプシャッターが上がり始める。

省二郎は既に判断を下している。

距離は七十メートル、躊躇は出来ない。アイドリングしていた車のギアをDに入れ、思いつき車を発進させる。

無理かも知れない

マーチンが車庫に入って行く。

シャッターが上で一旦止まる。

坂道のため加速が早い。思いつ切り、アクセルを踏む。

前方、マーチンのリアー部分が消え、シャッターが下り始めている。あと二十五メートル！

カッカッカー！ 焦点がぶれる！

よしっとブレーキを力いっぱい踏み込み、ギアーをLに落として車をスピンさせ、車庫の中に突っ込む！

ギヤーギツギユ ンギギツ！！

車が九十度近く回転し、タイヤが軋み、煙を上げる。

「・・・！」

コンクリートの白い壁が目前に迫る！

が、ハンドルを切り過ぎて尻が大回りをし、真っ赤なマーチンの左扉に右リアーサイドが激しく当たった。

大きな音が目をつんざく。

反動で横の壁にぶつかり

「がくん」

として止った。

ほこりが舞い上がり、ゴムの焦げる臭いが鼻をつく。

後ろでシャッターが下り、止まった音がした。

身体全体がジーンとしているが、省二郎はすかさずドアを開けようとノブを引き、身体ごと押す。が、フェンダーの当たり所が悪かったのか開かない。

瞬時、省二郎は身体を横にして、両脚でドアを蹴った。

一度、二度

ドアが半開きになる。

その半開きになったドアから上体を出そうとすると、ピーが外に飛び出していく・・・

あっと思ったが遅かった。

外に出てマーチンを見るとファミリアの右後部がマーチンの車体左に当たったのかサイドミラーがちぎれて転がっている。

「おい、ピー」

半開きになったドアから逃げ出したピーの名前を呼ぶが、何処へ隠れたのかピーの姿が見えない。車の下かと思つて覗くがいない。

「おい、ピー」

と捜している

「何してらっしゃるの？」

と、車庫に続く芝生の上から声が聞こえた。

見上げると、今日は白いスーツに身を包んだ裕子がつばの広い青い帽子を目深にして、手に持ったサングラスをクルクル回しながら

「変わった停め方をなさるのね」

と言つた。そして四つんばいになっている省二郎を見て

「何してるの？ 私に用事じゃない事？」

と、言つてから背を向けて歩き始めた。そして肩越しに

「訂正しておいてあげる。・・・そっくりだわ」

と言つた。

## 終章 裕子

裕子の部屋の床は、五ミリはありそうなシルク段通が敷き詰められていた。

美術織物で出来たフランス襷のカーテンがゆったりと垂れ下がる窓辺から、二メートルほど離れて、裕子の居間で二人は向かい合っている。

ふた間続きの裕子の部屋の、この居間の部分だけでも二百五十平米はある。

天井も、高い。

家具はロココ調の凝った木製家具で統一されており、ダークブラウンの壁と色合いを調整してあるようだ。

大きな書庫が、二つも連らなっている。

裕子は昨日と同じように脚を組み、何かご質問？ というような表

情をして省二郎と向かい会っている。が、昨日と違い二人とも殆ど話をしない。間のテーブルの上には、薄紅色のバラが活けてあり、それを挟んだまま五分は経過している。

裕子は相変わらず冷たい、冷ややかな視線を省二郎に浴びせるだけで、何も言わない。組んだ脚を時折組みかえるのだが、その脚の先にある青いハイヒールが鈍く光る。

かちつとした、硬質の雰囲気を持つ裕子だが、今日は濃紺の縁取りのある白いスーツを着ていて、首にプラチナのネックレスが巻かれている。そのネックレスに五カラットもあるようなダイヤが光っている。

そうやって見てみると、なるほど、この女にはダイヤがよく似合う。無言で対座しているだけであったが、その無言の中に、省二郎は裕子という人間の息づきを感じ取っている。

裕子は時々、ふつと窓の外に視線を走らせ、一見ボンヤリしているような時があるのだが、それが計算づくではない事は今の省二郎には、よく理解できる。

出来るどころか、裕子から見れば省二郎がそう写っているはずだ。

西岡もそうだった

そうか、思い出す。この男をどこかで見た事があると思ったのは、白壁の視線だ。二人とも、いつもあらぬところを見ているような眼差しをしていた。それだったのだ。

それならば、話のしようもある。無言の対話ならこの五年間、それだけをしていたと言ってもいい。昨日のような重石のない言葉は、裕子との会話には必要がない。削ぎ落とされた会話のみが要る・・・窓の外には、横浜の港が見えている。

十分ほどした時、ノックする音がして、メイドがワゴン車を運んで来た。

省二郎と裕子の前にグラスを置き、その場でオレンジを搾ってからメープルシロップを入れ、炭酸を注いだ。そして片言の日本語で

「失礼します」

と言うと、裕子が、ワゴンはそのままにして置くように言い、続けて「私の事は留守にしておいてね」と言った。

メイドが了解した事を伝え、退きさがった。

裕子はまた何も言わずグラスを取り上げて、形の良い口にストローを運び、一口飲んだようだった。

省二郎もグラスを取り上げ、グラスから泡立つ炭酸が窓から差し込む光に弾けるのを眺め、一口飲んで又テーブルに戻した。蝉の声が聞こえている。

・・・時が、流れる。

省二郎を見て、裕子が口を開いた。

「いつから私を待っていたの？」

省二郎は答える。

「朝八時から」

「そう・・・朝早くから私がどこへ行っていたのか、あなたはその内に知るでしょうね」

「・・・？」

裕子は省二郎から視線を外して言った。

「音楽でもお聞きになる？」

省二郎はそれに対して何も答えず、裕子を見て言った。

「私は昨日、あなたに悪い事をした。とても失礼な事をした・・・許して欲しい・・・」

もう、充分対話はした。間違いなく、裕子もそうである筈だ。

「それがお判りになる？ 本当に？」

「・・・私はあなたの最後の問いに、答えなければならぬ」

「・・・」

「私の名前は、堀井省二郎だ」

裕子は微笑む。

「じゃあ、私もあなたの問いに答えなければならぬわね。何がお聞きになりたいの？」

第一関門は突破した。

「あなたは私を知っている。それもずいぶん昔から……そうですね？」

「さあ、どうかしら？」

「……判っている……あなたに言われるまでもなく、判っている……解決にはならない」

「だったら、お帰りになる？」

「いや、事件の解決にはならなくても、私自身の解決にはなる」  
「……」

室内には二人だけの会話が、伸びきった糸が今にも切れてしまいそうな切実感をはらみながら続いている。

「裕子さん、私は知る権利があり、あなたは教える義務がある」

「……そうなの？ それでいいの？ 権利とか義務とかの問題で、いいの？」

裕子は、するどい。ここでの返答如何では、省二郎に対して裕子の心は永遠に閉ざされ、軽蔑だけが残る。

「……あなたが、正しい。それは私の弱さだ……ありのままを言えば、おそらく私は真実を知らなければ、これから生きていけないのだろう。そう考えれば、勝手な私のわがままだ」

裕子は微笑んで、小首を傾げた。

「どうしても？」

「どうしても」

裕子はしばらく黙っていたが、やがて

「……みんな一緒ね、バカみたい」

と、省二郎の顔から目を離して言った。

省二郎は閉ざされていた裕子の、心の扉が開いた事が判る。裕子は省二郎を、未知なる世界へ招待しているのだ。

「私が知りたいのは二つだ」

「ふたつ？」

「彼はどうして殺されたのか？ そして、何故、私だったのか？」

裕子は脚を組みなおし、遠くを見る目付きをして

「・・・白壁さん・・・」

と、呟いて、続けた。

「人間は自分で死を選ぶ時だってあるわ。ああいう場合は、そう考  
えるのが一番素直じゃないかしら」

監獄で省二郎は、考えうる限りの、幾通りものシナリオを考えた。  
その中に、いま裕子が言ったシナリオも考えなかった訳ではない。  
一つの映像が、省二郎の中で焦点を結ぶ。

おそらく、白壁は何らかの事情で睡眠薬自殺をした。いや、しよう  
とした。二人の男・・・そこにもう一人女がいたかも知れないが、  
彼らは白壁が、錠剤が足りなかったのか、途中で吐いたのか、ある  
いは助けようとしてなお中途半端な最悪の事態に陥ったのか、いず  
れにしろ死に切れずに苦悶をしている白壁と対面した時、どうした  
ろう？ 白壁との接点は秘密にしなければならなかった。限られた  
時間のなかで、助けを他に求める手段が、彼らにはなかった。

「そうになると、場所はホテルですね？」

「・・・あら。何でもお見通しつてわけね」

窓から見えるベイブリッジの下を、豪華客船が航行して行く。航跡  
が白く続いている。

かもめが群れになって、飛んでいる。

「青酸カリは、あなたが運んだ？」

裕子は、ゆっくりと表情を変え

「山崎さんは、いつも言ってた。僕は、死ぬ時は、場所を選ばない  
んだって・・・死んだら、その場所に捨ててくれって・・・いつも  
死ぬ用意のある人たちだったのよ」

そう静かに言って、港の方を長い間見ていた。そして

「お紅茶、如何？ 昨日はお飲みにならなかったんでしょ？」

と、ワゴンを手元に引き寄せて、裕子は言った。  
風の具合なのか、柔らかい匂いが流れて来る。

「スリランカの、うち農園で作ったのよ」

「いや、昨日は一口だけど飲みました」  
裕子は笑う。

「ああいうのは飲んだって言わないの」  
省二郎は苦笑する。

省二郎は白壁の死に対して、最後の念を押ししておきたかった。

「彼は・・・白壁はどうして死を選んだのだろう？」

裕子の動作が止まり、長い沈黙が続いた。

「愛情って、なんなんでしょうね」

それが、長い沈黙のあとに続けて出て来た、裕子の言葉だった。そして、答えだった。

間違いはない。明子への想いが死の原因だ。

省二郎は、先日静岡の図書館に咲いていたサギ草を思い出していた。ひっそりとした、そういう世界もあるのだろう・・・

「最後の質問をしたい」

裕子は紅茶をいれるため、ティーカップを取り出している。

「私を殺人者に仕立てたのは、何故？」

裕子の手が、またちよつと止まった。そしてまた続けながら言った。

「私はね、いつも思わせ振りの女って見られるの。だけど、本当はそうじゃない。知っている事を話すって、恐ろしい事なのよ・・・いつか、それが自分に跳ね返って来る」

「・・・」

「今のあなたには判る筈よ。あなたは最初、電話で西岡さんに何を喋ったの？ 全てはそこから始まった」

そうだ、思い出す。最初、省二郎は彼らしか知らないホットライン用の電話を西岡に掛けて、白壁の失踪を話し、捜索の協力を頼んだのだ。西岡にしてみれば脅威だっただろう。

「しかし、それが私を陥れる理由になるのだろうか？」

「・・・陥れる？ まさか・・・」

そう言って笑い

「・・・そうねえ」

と、裕子は続けた。紅茶を省二郎の前に置く。

「堀井さん、先ほど言ったように、あなたの為にあなたに教える義務は私にはないわ。それは死んだ人に対してとても失礼な事。けれど、死んでしまった人たちの為に、あなたに教えなければならぬ義務なら、私にはあるような気がする」

「・・・」

「答えは、偶然よ」

「ぐうぜん？」

「あなたにアリバイが無いなんて、まさか、西岡さんも山崎さんも知らなかったわ。財布の中のカードだって、一度でも使ってあればアリバイは崩れるはずだった。知っていたのは、五千万円を持っているという事だけよ・・・だって言ってたもの、一週間以内だって」

話が、核心に近づいている。

「一週間以内 何が？」

「資産の処分よ。あなたが警察に拘留されるのは、どう考えても四・五日、いくら長くても一週間が限度、その間にあの人たちは資産を処分して、姿を隠さなければならなかった」

「・・・」

「必ず警察は自分たちを追って来るって、覚悟を決めて行動してたのよ。必死だったの・・・不動産の売却を助けようとしていたら、刑事が私のお店に来た事がある。あの時には、これでもう終わりだと思った」

「・・・」

「だから、翌日国外に逃げたのよ。それが・・・どういう訳か、あなたが真犯人という事になってしまった」

「・・・」

正午になったのか、どこからかチャイムの音が聞こえている。

省二郎は胸が苦しくなるのを感じる。

最後の抵抗を試してみた。

「囑託殺人というなら、自首する方法もあつたはずだが・・・」  
「山に埋めたのは、私を守るためなの・・・私があの人たちと連絡が取れている、となれば私がどうなるか・・・お判りでしょうか？」  
「そうなのかも知れない。裕子の言う通りなのだろう。しかし、その後が続く空白の五年間を、それで納得したければならないのだろうか？」

「あなたは二ヶ月だが、私は五年だ」

「だから・・・慰めて欲しいの？」

「・・・すまなかつた・・・どうしても感情が表に出てしまう・・・  
そうだね、あなたはあなた、私は私だ」

省二郎は

「失礼」

と、言つて立ち上がり、二つある本棚まで歩いて行つた。

高さだけでも二メートル以上あるが、特注の書庫なのであろう。木彫りの装飾で統一されている。

省二郎はぎっしりした本を目で追つて行き、やがて、一冊の小冊子を取り出した。

ページをめくると、巻頭の詩が目に入る。

・  
・  
・

なのに 伝えたいと願うわたしには

涙を流す以外

他に何が 出来たというのだろうか

あの真つ赤なカンナはどうなったのか・・・

壁にもたれている

表情を失くしたあとの表情が わたしには分かる

心を捨てる という意味が

わたしと同じように　あなたに分かっていたように  
けれどあなたは　わたしと共に  
青空を見ている以外

他に何が　許されていたのだろう

過去への仮説はいつも空しい・・・

そう　わたしに分かることは

青空を見ている　あなたの悲しみだけ

2001年5月

ゆう子

「青空」というこの詩を、省二郎は五年前、ベッドで寝転んで見た事がある。あの時はわけも判らず頭が痛いだけだったが、今の省二郎は違う。

これは、俘囚の歌だ。

いや、囚われ人が囚われ人に対する、共感の歌だ。

省二郎は思い出す。

獄舎の壁にもたれて、ひざを抱え、鉄格子のはまった窓の、小さな青空ばかり見ていた事を―　あの、遠い日々の事

今の省二郎には、この歌の意味が朧気ながら判る気がする。何ものが得体の知れない感動が、胸にひたひたと迫って来る気がするのだ。

そうして佇んでいると、扉をノックしてメイドが入って来た。

裕子が何やら対応していたがやがて立ち上がり、省二郎の所へ来て

「外でね、トシタニって人が騒いでいるんですって、どうなさる？」と聞いた。

省二郎はメイドに、すぐ行くなって伝えて下さい、と言って、今度は裕子に向き直り、ありがとうと言った。

「ありがとう。あなたは私の思っていた通りの人だった」

裕子は肩をすばめる仕草をして

「あら、お株を取られちゃったわね」

と言って微笑んでから

「長い付き合いになりそうな気がするわね」

と言った。

さっぱりとした香水の匂いが、省二郎の鼻を掠めた。

### 終章 その3 遺髪

利谷と省二郎を乗せた車は、東名高速の東郷パーキングエリアの辺りを走っている。

時刻は午後六時を過ぎ、張り出している雲の頂点が澄み切った空に伸びている。

夕日が左前方から射し込んで、まぶしい。

あと三十分もすれば、長久手にある山崎に家に着くであろう。運転している利谷が喋っている。

「何言やあがる。二つのホテルのオーナーが九品寺のものだって判りやあ、お前の居場所も判るさ……しかし、お前いつも携帯切ってるな」

省二郎は利谷の喋るのを聞きながら、他ごとを考えている。

死ぬに際して場所を選ばずと山崎は言っていたというが、自分はそのまでの決心はつかないであろう。青酸カリをいつも携え、そこまですべてを決意して、初めて生きていけた山崎と言う男は、どういう男だったのだろうか。

「……おい。何考えている、返事もせずに」と、利谷が言った。

「いや三人の男たちの事ですよ」

「三人といつても、山崎も白壁も死んで、残っているのは西岡だけだろう？」 奴を捕まえる気か？」

「いや、警告もされた事だし……いや、それは冗談としても、そ

「こまでやる気はなくなりました」

「だろつなあ。何処の誰かが判り、その理由さえ判ればそれで良いのだろつなあ・・・悪意でもあつたならまた話は違つたろつが」

「

それに、と利谷はしばらく考えてから言った。

「お前、奴らにどこか似てるぜ」

省二郎は否定もしなかったが肯定もしなかった。ただ

「そうかも知れませんね」

と呟いてはみたが、自分は決してああいう風にはならない、という確信はある。

万里子が待っている。そして綾子が・・・

いや、たとえ万里子が待っていないなくても、自分は同じ石に躓きはしない。

必ず、陽の当たる道を歩むのだ。

省二郎は意味なく尋ねた。

「そのスポーツ用品店はまだやっているんです？」

「いや、房江に聞いたたら、売っちゃったてよ。山崎は警察が来ると思つたんだろつなあ。余ほど資産の処分を急いだのだろつ、そこで世話をした人を招待するつて名目で人を集めたんだから」

物思いに耽っている省二郎に

「しかし、あの明子つてのは何処へ消えちまったんだ？」

と言つた。

車は名古屋のトールゲートを越えて、右折して長久手を走っている。

「さあねえ。興味も無くなくなりましたよ」

「ふーん、ま、そういう事にしておこう・・・けど、その、白壁の自殺も俺にはよく判らん。だってよ、明子はまだ生きてるんだろつ？」

「ええ、後追い自殺つていうのは聞きますがね・・・群発自殺つていうのもあるらしいですよ・・・けど・・・」

「けど？」

省二郎はそれ以上何も言わなかった。どんな名称が付けられていても、白壁の心の軌跡は、省二郎には判るような気がするが、気がするだけで、結局こういう問題は本人しか判らないのだろう。判っている事といえば白壁は典子に向かつて、明子を守ってやれなかった自分を、涙と共に責めていたという事実だけだ。間を置いて利谷が言った。

「ところで、裕子ってのは何者なんだ？」

省二郎は首をひねりながら苦笑する。

「パトリシア・ハーストって、知ってます？」

「知らねえよ」

「ストックホルムシンドロームは？」

「お前、俺を馬鹿にしてるんだろっ」

利谷が笑って言う。

「うーん、まあ、私たちには関係のない、訳の判らん世界があるってことです」

「ふーん」

省二郎は裕子の言葉を思い出していた。

裕子は省二郎に、これから長い付き合いになる、と言ったが省二郎には判らなかつた。

そうだろうか？

しかし、裕子と自分にしか判らない、二人だけの感情の塊りがある。おそらく生涯、人には窺い知られる事のない、狂おしいほど静かな思いが二人だけにはある。そう思うと、長くなると言う裕子の言葉は正しいのかも知れないが・・・

省二郎が考え込んでいると利谷が、省二郎の足元を見て

「お前、変な物を持ってるな」と顎でしゃくった。

今日の昼ファミリアを壊してしまったので、レンタカー屋へ車を返しに行く時、利谷が運転するクラウンと二台連ねて一緒に行った。そしたらレンタカー屋に、清算は後でよいが、私物は今持って行っ

てくれと言われ、そのままキャットレールを持ち歩いている。

「うん」

省二郎は経緯が面倒なので説明しなかった。

夕陽が沈んで、名古屋の街を残照が包んでいる。

もう一度、考えてみた。

古川は三人の男たちの事を、冬の海の水平線を見ているような男たちだったと言ったが、自分はそういう光景にはそぐわないと思う。

自分は藤木や赤松のように、自分の前にある道を一步一步、歩いて行く人間なのだ。いや、そういう人間になるのだ。

利谷はまだ言っている。

「しかし、白壁を山に埋めたのは判ったとしても、山崎を海に沈めたのは何故だ？」

「判りませんね。彼らの事情があっただけでしょう。だけど、房江さんに会えば判りますよ」

車が停まった。

「着いたぜ」

利谷の錆びのある声がする。

表札のない家に、省二郎たちが来るのを待っているであろう、打ち水をした庭に続く門扉が開いている。

飛び石が光っている。

利谷に続いて省二郎も車から降りる。

あと省二郎に残されている事といえばこの家の中にあるであろう、遺骨のない・・・というか、恐らくは遺髪のみが安置されている仏壇の、これまた恐らく戒名のない位牌に、房江に見守られて焼香する事だけであった。

そしてまた明日から、会社だ。

美佐子の顔がちらつと浮かんだ。

エピソード　　手紙

こちら札幌は、九月末だというのに朝夕の空気がピンと張り詰めて、ひんやりと冷たく感じられる日が続いております。

アンカレッジでは、いかがお過ごしですか？　やはり札幌よりも、うんと寒いのでしょうかね。

あなたがカナダへ発つてから、すでに一ヶ月余り経ちました。もう日本には帰らないとの事でしたので、是非にもお見送りしたかったですけれど、余りに突然の事なので間に合わず失礼いたしました。昨日「AKI」がお休みでしたので、久しぶりにアモールへ行つてまいりました。ポプラ並木を歩きながら、あなたとの事を考えてみたかったです。

バスと電車を乗り継いで、一時間もかかりました。

昨日はあなたにお褒めにあずかった、野菊の花柄をあしらった日傘の出番はありませんでしたが、その代わり芝の中のアちらこちらに子供の背丈ほどの姫シオンが咲き乱れて、静かな陽射しの中、長い影を引いておりました。

アモール、覚えておいでですか？

二年前の八月十九日、あなたが初めて岩見沢に私を訪ねておいでになった日、二人で入った大きな窓が五つも並んでいるカフェーの名前です。

あなたが着ていらした沈んだグレーのスーツが、びっくりするほど映えた、薄いブルーの羊革の椅子のお店ですけど、お忘れかしら？　私がアイスココアをオーダーすると、あなたはカフェオーレのオーダーを突然アイスオーレに変えたりして、ウエートレスを困らせたお店です。

私、あの日のことは決して忘れておりません。

白壁のこと、わたし、自分ではすっかり清算し終えたつもりでいたんですけど、本当は身体全身でそれを覚えていたんだという事。それにこだわらないよう意識する事で、反対にそれに縋って生きてい

たんだという事、それを私はあの日あなたに教えられたんです。

帰りの道すがら、ポプラ並木に吹く風と、あの喧騒としたエゾ蝉の  
声、そして澄み切った真夏の午後の強い陽射し――

あなたに白壁の逝ったことを聞いて、辛かった白壁との思い出が青  
空にさざめくポプラのそよぎの中に、一つひとつ剥がされていくか  
のようでした。

とても悲しい、青空でした。

私の心のどこかにあつて、瞬時に砕け散った、硝子とも見える青空  
の悲しみが、あなたにはどれ程お判りになった事かしら？

私の八年間の希望と絶望とが、あの青空には詰まっております。  
それがあなたにお会いして、二人きりで誰も居ない岩見沢公園のハ  
マナスの丘を歩きながら、青空高くそよぐポプラを見ておりますと  
何ですか、そういったものがもうどうでも良いかのように、私には  
思われていきました。

私って、単純で忘れっぽくって、最後まで人を恨む事の出来ない、  
幸せな女なんだなあつて、自分でも嫌になる位でした。

過ぎ去った日々の事を忘れろとは言わないが、これからやって来る  
日の事を考えてもいい頃じゃあないか、と、あなたは仰いました。  
やり直すために、時間はあるんだと――

あの日のあなたは、僕は遣り残した事があるからまだ立ち直る訳に  
はいかないが、あなただけには立ち直つて欲しい、などと言って、  
とてもちぐはぐでしたけど、あの言葉だけは忘れません。

私、あの当時、きつとああいう言葉を待っていたんだと思います。  
何かに、飢えていたんです。

いつの間にか、知らず知らず、本当にいつの間にか癒されていたん  
ですね。

あの時あなたは、脱皮という言葉をお使いになった――。

今、夜の十一時を回って、一人きりの食事を終えたところです。

今日は六時以降のお客様が誰もパーマをお掛けにならなかったので、

帰宅したのがいつもより少し早目でした。七時のお客様がパーマをお掛けになると、このマンションに帰るのが十時を過ぎて、そんな時は朝の早いお隣にバスルームの音でずい分と気を使います。そして今が、こうやって夜一人、赤いシエードを被ったスタンドの前に座った時が「明子の時間」なんです。

今日はあなたにお手紙を書いておりますが、ここ一週間程はマーテルエクストラをお水で割り、氷を浮かべて、あなたに差し上げるお手紙をどういふ風に書けばいいものか、そればかりを考えておりました。

純情なのに驚きましてー？ あるいは「AKI」の開店のお祝いで、あなたとお食事をした全日空ホテルでのディナーの時、ワインを口に含んだだけで赤い顔をしていたのが嘘のようだと、お叱りを受けますかしらー

さて、そろそろ逃げ場もなくなってまいりました。ご用件を書きま

す。  
二年前に白壁が残したものだからと、過分なお金を頂戴いたしました。それが、あなたの脱皮のためにも必要なんだとー

しかし、僕にはもう必要のないお金だからと言って今回振り込まれましたお金は、頂く訳にはまいりません。頂戴するには余りにも金額が多すぎます。

どうやって送金したらいいのか、お教え下さい。

でも、もし宜しかったらお言葉に甘えて、来月にでも、アンカレッジ郊外の雪をいただいたロツキー山脈の上の、空一面が燃えているかのようなバーミリオンの夕日とやらを、私も見たいと思います。

お許し願えればその時、持って参じたいと思っておりますがご迷惑でしょうか？

心弾むご返事を、お待ち致しております。

西岡 様

2007年9月27日

明子

P.S

先日のお便りに書きましたアメリカンショートヘアの子猫、覚えておいでですか？

横浜から来たという、とても上品なお客様に頂いたグレーの子猫の事ですけど、チーコという名前にしたそうです。  
咲ちゃんが伝えて欲しいとの事でした。

喪失の青空

完

## 砂丘（後書き）

後書きです。

長い読み物を最後まで読んでいただいて有難うございました。

修正したい箇所がまだありますが、今私はバンコクとパソコンペンを行ったり来たりしております。ネット環境が非常に悪く、立ち上げるだけでも10分を要する有様です。

一度日本に帰国した折、きちつと手直ししたいと思っております。

私を書きたかったこと、それは「愛情とは何か」という事です。

愛する相手が死んだ時、自分も死んでしまいたい、と思う人は沢山います。それを実行に移す人も時々ですがいます。

そのような行動を選択する人の心が、判らないように判る、と言いつのか、判るようで判らない、と言いつのかは紙一重のような気がします。

いずれにしろ、そのような事例に出くわす度に、言い知れぬ程の「いたたまれない感動に」襲われるのは私だけなのでしょうか？

堀田

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9180c/>

---

喪失の青空 夏（冬の続きです）

2010年10月9日23時25分発行